

法嗣 現如上人

北海道開拓における



東本願寺の事蹟



打田 元輝

KTel 090-1306-6001
uchiyan12@gmail.com

東本願寺街道探索会

編集にあたって

この冊子は、右ページ通りの合冊編集版で、函館大谷高校が平成元年に発刊した紀要を底本としており、これにこれまでの文献からの種々の記録を追加して、「東本願寺の事蹟」特に札幌本府への新道開削を明らかにしようとして試みたものです。

しかし、新道開削の当時の作業状況やそのルートを知りえるものは殆どなく、僅か高見澤権之丞の絵図や日記しかありませんし、現在の中山峠付近で実際に開削された街道跡を探索した記録も皆無です。

この冊子を公開することにより、この札幌近郊にある古道に興味を持っていただき開削道筋の発見に繋がれば幸いです。

追補と追録の概要

1、制作と公開にあたって……………右ページ下段に続いて

喜茂別峠ルートの痕跡 ……………	B
留産～定山溪へのルートについて ……………	B
百数十年 人馬の通行が途絶えた古道を発見 ……………	B
喜茂別から定山溪への峠越え……の検討 ……………	C
身近な歴史紀行(地蔵慶護著) から引用 ……………	E
札幌より有珠に至る新道……高見澤権之丞 絵図 ……	F
喜茂別峠ルート痕跡発見? ……………	J

2、東本願寺北海道回教史[函館大谷高校紀要] ……への追補

定山溪の降口 2 km程の明治開削跡道を発見 ……………	39
以下は、目次参照 ……………	41

3、追録 1

現如上人像一行の函館到着までの苦難 ……………	1-1～6
-------------------------	-------

4、追録 2

橋口文蔵遺事録……紋龍村からシンノシケコタンまでの紀行録…	2-1～2
-------------------------------	-------

5、追録 3

「東久世開拓長官日録」抄 ……………	3-1～2
「高見澤権之丞日記」抄 ……………	3-3～4

6、追録 4

東本願寺北海道開教百年史からの抜粋（横書）引用

北海道新聞社発刊の「北海道百年」の間違い……第一～第五	4-1～6
「新北海道史」第二巻の間違い ……………	4-7～8

付録 アイヌ民族差別に関する学習資料 共なる世界を願って ……………	127～
------------------------------------	------

東本願寺の事蹟 製作と公開にあたって

冊子
構成

東本願寺北海道開教史『函館大谷高校紀要』

～ 特に本願寺街道を中心として ～

令和2年 引用再編補追版

追録1 現如上人の渡道前の道中

国立国会図書館デジタルコレクション

北海道東本願寺由来からの一部分を引用(横書き再編)

追録2 橋口文蔵 遺事録

明治39年 帝国印刷(株) 発刊の一部分を引用(横書き)

追録3 東本願寺北海道開教(八十年)史

昭和25年 真宗大谷派本願寺札幌別院 発刊から抜粋

追録4 東本願寺北海道開教百年史

昭和49年 真宗大谷派北海道教務所発刊 から抜粋

この冊子は上記の構成としており、メインは最上段の函館大谷高校の紀要平成2年改訂版ですが、冊子としての名称を「東本願寺の事蹟」と変えさせていただきました。 ※ 冊子の中扉を参照

編者は、令和2年 引用再編補追版の39ページに掲載のとおり、平成30年4月に札幌定山溪への降口約2km程の明治4年頃の開削された道跡を発見しました。

これまで、数回現地への案内も行っただのですが、期待したほどの反応もなく経過しています、これは、増毛山道や沙流留山道に比べて、やはり知名度が低いことだろうか、と思っています。

しかし、東本願寺街道の開削は、現国道230号線の原型である箇所以外にも数本あり、北海道の開拓に多大な功績があったのです。

このたび、「函館大谷高等学校宗教部」が平成元年3月31日に発行した紀要の改訂版を全面引用し、編者の少しばかりの情報を追加して、同高校の許諾を頂き、続いて、東本願寺街道等に関し、各種文献から上記構成の通り追録としての引用転載など、北海道教務所の許諾を頂き製作したものです。

また、後編に『アイヌ民族差別に関する学習資料』共なる世界を願って真宗大谷派宗所出版部(東本願寺出版部)発刊の前篇部分を転載させて頂いておりますので、教団の願いとするところも、知って頂けるかと思い、ここにこれらを公開することと致しました。

※註 東本願寺街道探索会……開削道跡をご覧になりたい方は、住所・氏名・生年月日・Fax又はTelをお知らせ下さい。日程調整し探索会を実施します。

Email:uchiyan12@gmail.com Fax 011-351-5336

KTel 090-1306-6001

令和2年2月

札幌市南区 打田 元輝

東本願寺街道 喜茂別峠ルート of 痕跡

東本願寺街道・留産～定山溪へのルートについて

明治2年 蝦夷地は北海道と命名され 開拓使本府が札幌と決定されます、その12月 寒風ふきすさぶ中 島 義勇判官はコタンベツの丘に立って 次の一句を読みました。

河水遠く流れて山隅にそばだつ

平原千里地は膏沃

四通八達よろしく府を開くべし

他日五州第一の都 (いつの日か、日本随一の都になるだろう)

島判官は暮れ正月も休まずに本府の建設に全力を尽くしたのですが、折悪く天明以来の大飢饉に重ねて食料運搬船も難破し、高騰した食料の調達で資金を使い果たしたため、3月には東京に戻されてしまいました。

この後、岩村判官が引き継ぐのですが……

この時代 函館から本府札幌への内陸路はまだ有りませんでした、新政府には予算も無く そこで目をつけられたのが、東本願寺だったのです。

政府の立前上 “東本願寺の新道切開を許可した” という事になったのです。明治2年 東本願寺は下見調査とともに 松浦武四郎(当時開拓判官)からも新道ルートの助言を得ましたので、翌3年2月 現如上人に率いられた一行 162名の僧侶達が京都を出発したのです。

※ これらの経過などは、HP『東本願寺の事蹟』をご覧ください。

この本府への新道は、伊達を起点とし洞爺湖東岸を経て留産から札幌平岸終点となる 103 キロに及ぶもので、明治4年10月に完成したのですが、翌々6年に千歳周りの札幌新道が開通したために、すぐに廃れて自然に帰ってしまったのではとも言われていました。

百数十年 人馬の通行が途絶えた古道を発見

筆者は、平成30年4月にこの東本願寺の僧侶達が開削した道筋の一部と目される古道跡を発見したので次に記述しましたが、物的証拠は何も無いことを付け加えて於きます。

発見場所は、定山溪薄別バス停の先で無意根登山道【小川沿い】の南側山腹にある約2キロ程ですが、当然この先へも道跡が続くことでしょうから、今後 探索をしなければなりません。

また、峠超えの箇所や留産近辺も同様ですので、とりあえず喜茂別岳付近を高精細衛星画像で調べてみたところ道筋らしき痕跡を発見しましたので、後編にて紹介致します。

東本願寺街道(本願寺道路・有珠新道とも)の喜茂別から定山溪への峠越え

明治3年に東本願寺が開削した新道の最大の道が標記 103Km の道路で、喜茂別から峠を越えたルートの詳細が知られていないのが現状であろう。

現在、定山溪への降口の約 2Km 程については前述しましたが、喜茂別町留産から峠にかけてのルートを以下に考察してみます、

まず、開削後の資料としては、前3～4ページに掲載の2枚の絵図がありましたが、この2図ともに喜茂別付近は詳細を知ることができません。

また、次の① ②「伊達の風土第十号」掲載図や明治26年の二十万輯製図でも同様ですので、次の5図について比較検討してみます。



見ての通り札幌から洞爺湖に通じていること位しか読み取れません。

[illegible]

次に②の明治時代の 20 万輯製図ですが、これは「身近な歴史紀行」(地蔵慶護 著 北海道新聞社 平成 11 年発刊)に掲載されている 3 / 武四郎が冬に歩いた中山峠『■武四郎の峠越え』の掲載図の同一地域を編者がキャプチャ編集し一部分を比較図に加えています。

また、この図に関する地蔵慶護氏の著述を次に転載しておきます。

身近な歴史紀行(地蔵慶護著)から引用

武四郎が冬に歩いた中山峠 ■武四郎の峠越え

本願寺街道が完成する 13 年前の安政 5 (1858) 年、松浦武四郎が新道開削の可能性をさぐるためこのルートを探査している。……(中略)……この峠は現在の中山峠だと思っていたが……(中略)……武四郎が越えたのは中山峠でなかったのではないかとという疑問がわいてきた。もう少し北寄りを通ったのかといろいろ検討しているうちに、明治 27 年発行陸地測量部の 20 万分の 1 図に現在の尻別川留産付近から、喜茂別町と京極町の境界になっている尾根伝いに歩道らしい点線があるのを見つけた。「武稲山」の約 4 キロ南で陵線を越え、定山溪側の薄別川に下りているのである。「武稲山」とは現在の「無意根山」のことだろう。その 4 キロ南といえば「喜茂別岳」の北側の鞍部にあたり、そこが峠(以後、喜茂別峠と呼ぶ)であったことになる。これが武四郎の探査したルートだろうか。標高は 1100 m。なぜこのような高いところを新道のルートに選んだのだろうか。

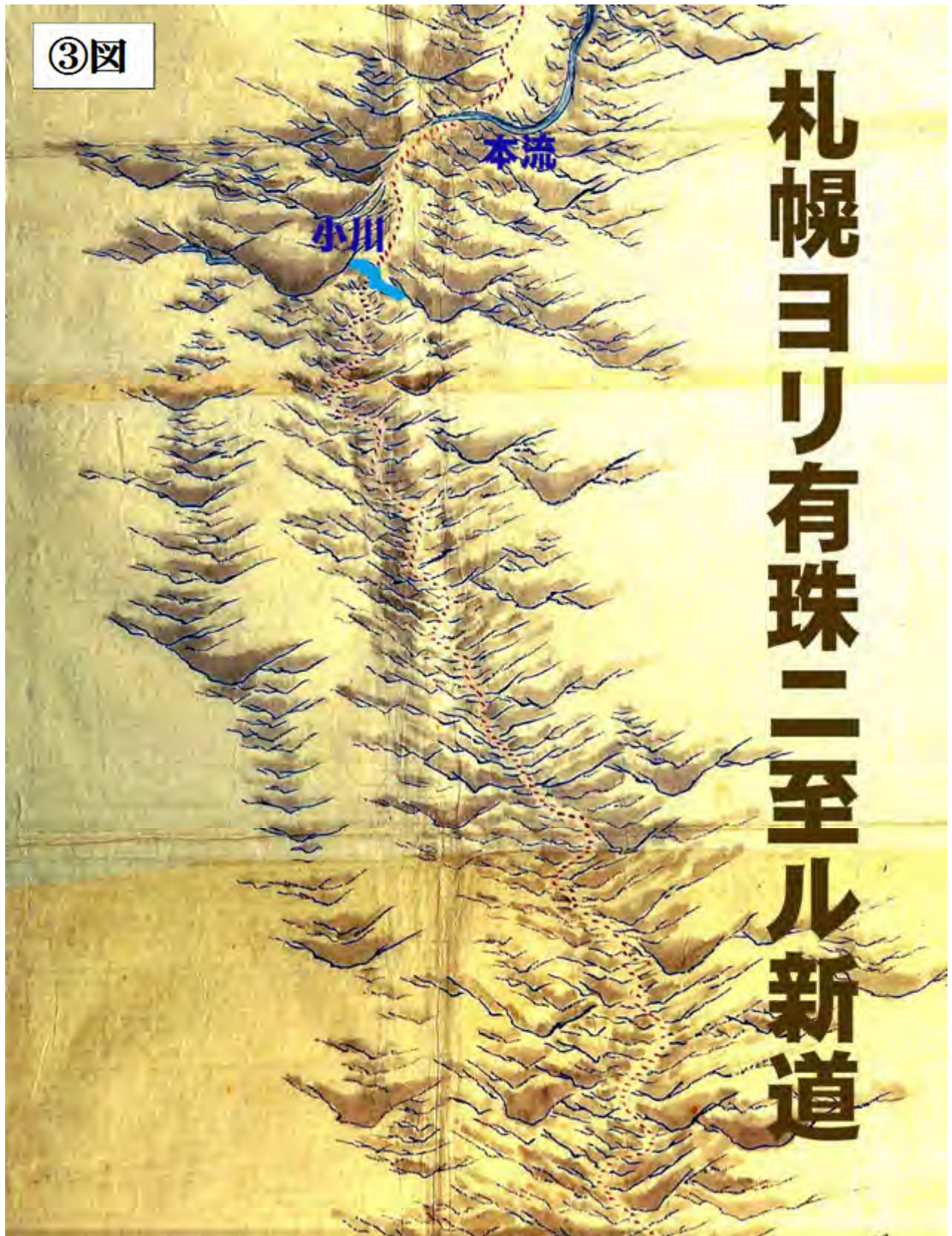
右の図は掲載図の同部分を編者が加筆したもので②図は、その切り取り部分です



なお、地蔵氏は標題の通り“冬に歩いた…峠”としており、開削道跡を探索してはいないようであり、これらの想定図を掲載していますので、後の④図をご覧ください。。

この③図は標題の、北海道大学附属図書館所蔵 図類 225-1 の一部分で、
内容説明 明治4年7月完成した本願寺新道の図。開拓使記録局印あり。
とあります。

至 定山溪温泉



－ F①－の下に貼ってください
貼り足しする図です



—F②—の下に貼り しする図です



至 留寿都

札幌ヨリ有珠二至ル新道ノ図 1.2 北大北方資料室 蔵 図類225-1.2

茶色文字は 筆者が加筆したものです。

—F①②③—

③図ではルートの詳細が判り難いので、この図の筆者高見澤権之丞がこのルートの開拓使長官の見分に随行した記録などを次に掲載いたします。

以下は「東本願寺北海道開教史」札幌別院昭和 25 年発行から転載しました。

※ 但し 文中の “ヨリ” を “～” に置き換えてあります。

- 一、副島参議様 東久世長官様、御家来 4 人宛都合 8 人也、
明治四年未の七 7 月 1 4 日 御本府御出立に相成有珠新道御見分、右に付権之丞義御先立被仰付、モロラン迄御供致、人足 2 0 人、馬 2 0 疋、外に土人 3 人、牧馬より馬迫 1 人、右之御賄方共被仰付万事手配敢、同 1 4 日之夜湯元定山宅え御泊、
同 1 5 日之夜カシッポ御泊 同 1 6 日之夜トウヤ沼土人小屋に御泊
同 1 7 日昼御休モンベツ藤五郎様御役所に而御休、
同夜モロランえ御當浩着、御本陣に御泊。
同 1 8 日之朝正 5 時御船え御移り相成、御順風に而御出帆に相成、
権之丞義者右モロラン着 1 8 日八時迄残御荷物手配致、是より幌別泊にて
同 1 9 日之夜勇佛泊是より 2 0 日之夜、シマ、ツツ泊
モロランへ本府迄黨着す、但昼 8 時半時の着、御状判官様え差上置
一、明治四年未の 7 月 2 6 日翌 8 時、長官様御屋敷より權之丞御用に付、罷出候虚極上々之饅頭 5 本被下置、右者新道御先立致候に付御下げに相成候由
一、西村権監事様有珠新道明治四年未の 8 月 2 0 日御本府御出立に相成御見分被為遊候似付、権之丞毅御先立被仰付、
同 2 0 日之夜湯元御泊、同 2 1 日夜カシッポ御泊、同 2 2 日之夜トウヤ沼土人小屋に御泊、同 2 3 日夜有珠に御泊、同 2 4 日西村様大藤様御兩人様者同 2 4 日 4 時時時御出立に相成、権之丞人足並馬迫 1 1 人有珠に而跡取方付。
一、参議様 長官様有珠新道御見分之節、日々入費之外 1 日に金二百疋宛都合金四圓二分嘗御役所より御手嘗金被下置候也、並御書附被下置候也、明治四年未の 7 月 2 9 日
一、明治四年未の 9 月 1 2 日へ有珠新道籾岡面被仰付、東京行都合 3 度被仰付、右新道筋坂澤山故、大往下場と相定候由
- 有珠新道里敷付**
- 一、御本府へ平岸村迄 1 里 4 町 5 8 間平岸村へマクマナキ迄 1 里 2 0 町マクマナイへミソマツ迄 1 里 2 9 町 1 3 間ミソマツへ湯元定山コタン迄 2 里 1 8 町 3 6 間、右者湯元迄川幅共入里敷、但川幅合都合 8 6 間入、
一、湯元より峠下迄 1 里 2 0 町 7 日御休所峠下へ岩松迄 1 里 3 5 町 2 3 間御休所岩松へカシッポ迄 1 2 里 1 4 町 5 3 間御休所右者湯元へカシッポ迄 1 泊之里敷
一、カシッポへシゲコタン迄 2 里 4 町 5 間継立場シゲコタンへニゴリ川迄 3 里 3 4 町 5 間御休所ニゴリ川へトウヤ迄 1 里 9 町御休所右者カシッポへトウヤ迄 1 泊里敷
一、トウヤへサウベツ迄 4 里 1 0 町 5 8 間御休所サウベツへ新道入口棒杭迄 2 里 8 町 1 9 間新道入口棒杭へモンベツ迄 1 8 町御休所・モンベツへモロラン迄 3 里 1 2 町御泊所
右者トウヤへモロラン迄 1 泊里敷 一、御本府へモロラン迄都合 4 泊りに而 一、
一、明治 4 年未の 9 月 2 2 日坂本少主典様有珠新道出来御見分、權之丞御案内節改め置虻田峰へ有珠迄 1 里 1 1 町 2 9 間 虻田へ虻田山の峯迄 2 1 町 4 0 間 虻田へトウヤ沼迄 1 里 4 町 1 1 間 有珠へトウヤ沼迄 1 里 3 5 町 御本府へ有珠迄 2 6 里 5 町 3 4 間
御本府へ虻田迄 2 5 里 3 4 町 4 5 間、
一、營繕御役所、明治 4 年未の 1 1 月 1 6 日初め而御開に相成、諸職人え御酒被下置候
一、明治 6 年西の 7 月 6 日 御本願御棟揚餅米 2 7 俵 2 斗、右を 3 3, 3 3 2 出来候様被仰付、是者菓子屋蛇足園に而御請負致出来す

④図 これは「身近な歴史紀行」(地蔵慶護 著 北海道新聞社 平成 11 年発行)の 3/武四郎が冬に歩いた中山峠『■武四郎の峠越え』に掲載されている次の図の峠付近の一部分を比較図に引用したものです。

なお、地蔵慶護氏著述にはこの想定図の説明は見当たらないので、図中に表示の通り編者が一部を修正加筆しております。

※ 図中の喜茂別峠から白水川沿へのルートなどは疑問に思います。



※ 一部修正加筆させていただきました。

①は、白水川の合流地点

②は、無意根大橋下の合流地点



⑤ この図は、HP『エバ夫婦の山紀行ログ』から引用したもので、文中に『国道から林道出合に設置してある標識、ここから3,7キロ先に登山口がある』とありますので、**緑線の林道中岳線**を辿ると登山口に至り**赤線が裏の沢コース**となります。

ここで下図**裏の沢コース**と④の**喜茂別峠ルート**を比較すると喜茂別岳から南部の尾根筋はやや近いのではとも見えるのですが、どうなのでしょう？

山頂からの眺望

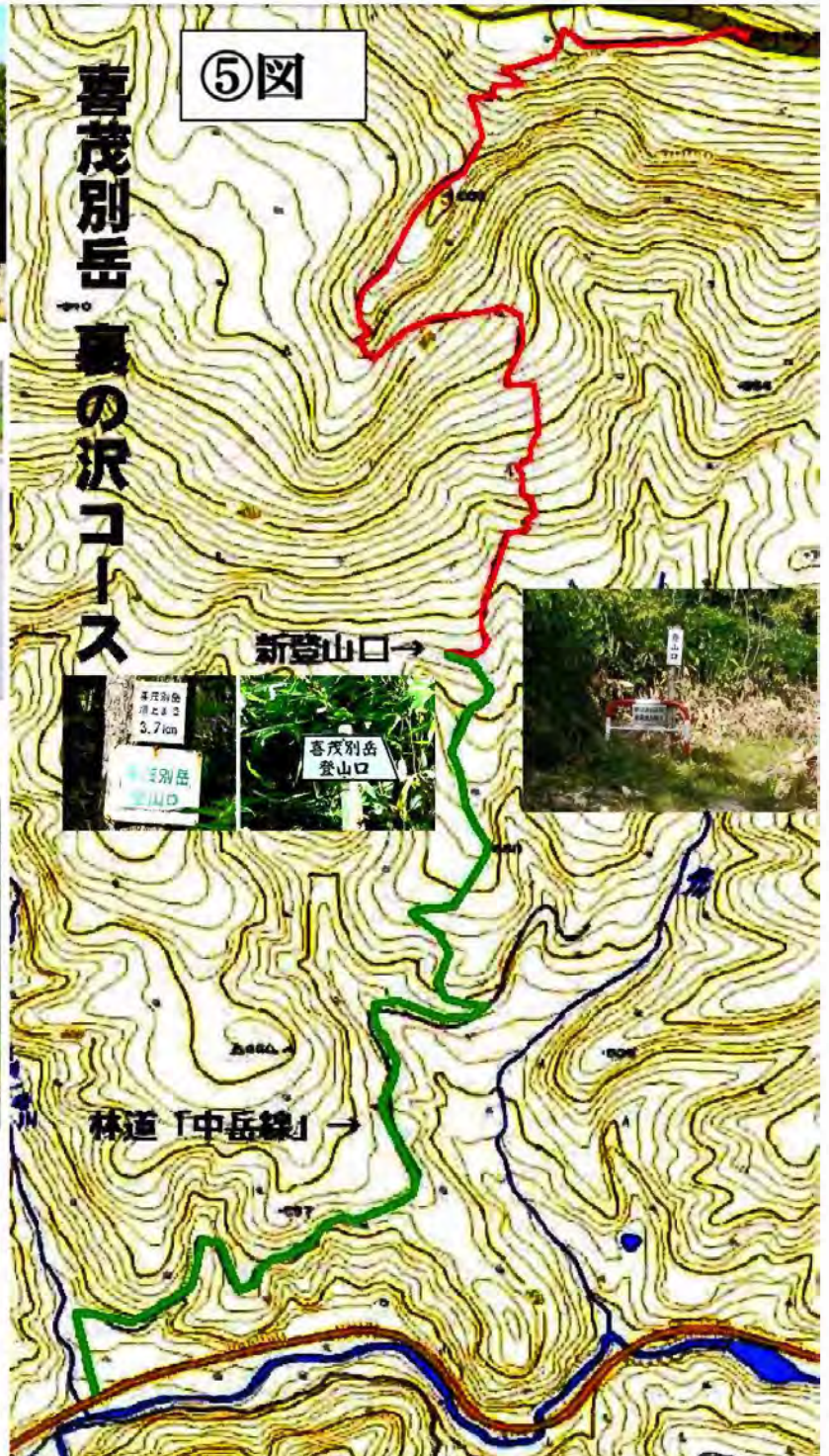
ここが喜茂別岳 ↓ 山頂



登山口の先に退避場あり



林道中岳線 入口の標識 ↑



東本願寺街道開削跡を発見 札幌市の研究家・打田さん

2018年08月15日 17時00分

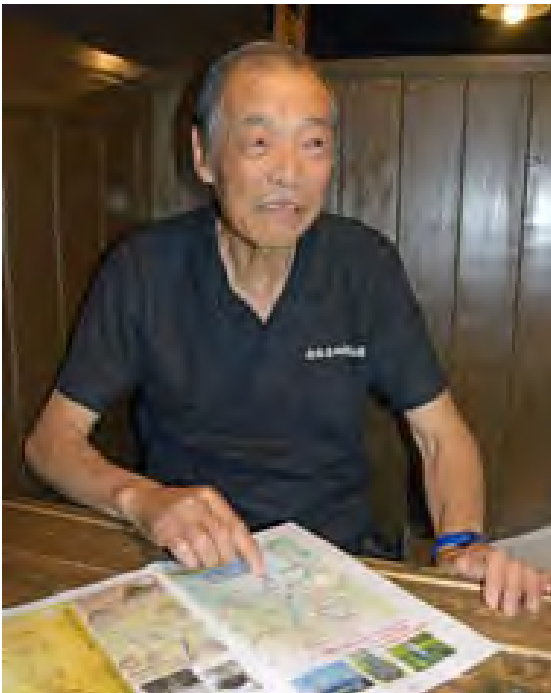
明治の開拓最初期に東本願寺の僧らが中心になり開削した、伊達一札幌間をつなぐ「東本願寺街道」の一部と推定される旧道跡を、札幌市の研究家・打田元輝さん(75)が発見した。年代測定や追加調査で「失われたルートの特定を目指したい」と話している。

同街道は開拓最初期の1871(明治4)年10月、現在の伊達市有珠から開拓本府を置く札幌市の平岸天神山南麓をつなぐ内陸道として開通。別名・有珠新道という。国道36号側に道路が開通するのは、この2年後で「最も古い幹線道路の一つ」だ。

明治維新で地位が揺らいでいた東本願寺が建設に名乗りを上げ、工事の中核を担った。大谷光瑩率いる僧は、当時、北上途中に寄付を集め費用を賄い、土族、アイヌ民族を加え1年ほどの突貫工事で完成。打田さんは「今考えれば本道最初の民活事業」と説明する。

ルートは松浦武四郎の助言を得て、有珠から洞爺湖東岸、尻別岳西側を経て、難所の喜茂別から定山溪方面に至る山岳部を開削したとされる。

発見内容を説明する打田さん ↓



測量の知識を持ち、道の技士を退官後、後志管内で建設業や測量団体の事務局を担った打田さんは、これまで特定されずにいた街道の研究に着手。ことし4月に札幌市南区の無意根山登山口周辺を探索した結果、周辺にルートの一部と推定できる開削跡が約2キロにわたり続いていることを発見した。

打田さんは「これまで河川沿いと推定されていたが、発見が街道跡であれば、ルートはより北側の山岳部の尾根沿いを通っていたことになる」と主張。

今後は周辺で見つかった切り株の年代測定、喜茂別側ルートの調査を進める考え。「将来的には北海道遺産の登録を目指したい」として、調査、研究に共同で取り組む仲間も募っている。

そこで喜茂別岳山頂付近の高精細衛星画像をアップしてみました。
次の衛星画像で、自然状況とは思えない並木状の筋を発見しました……

喜茂別峠～至 薄別川 →シケレベニウシベツ
↓下の青細線を付けた部分です。
喜茂別岳から北方向へは獣道があったようです



- ↑赤線は、前図の裏の沢コースの強調です。
- ※ 喜茂別岳の位置からすると……この青線的位置が喜茂別峠の開削跡であろう？……この高原部分は笹の根を掘り取ったので土が露出したため、木の実が着床して並木状に樹木が茂ったと思われます。
- ③図参照 暗部の “ヤチ” の西を通して薄別川へ下っている。
同図に“御泊所”とあるのでその残骸を発見出来るかもしれない。

ここへ行くには、約500mの藪漕ぎを要するでしょう……
古道探索に興味のある方のご協力を是非お願いいたします。

札幌市南区川沿3条4丁目6-5 打田 元輝 090-1306-6001

Email= uchiyan12@gmail.com

東本願寺北海道開教史

～特に本願寺街道を中心として～

令和 2 年 引用再編補追版

※本編は「函館大谷高等学校宗教部」平成元年 3 月 31 日発行の改訂版を
全面引用し文字を読みやすく大きく濃く再編集し一部追補したものです。

打田 元輝

目次『大谷高校紀要 青字は編者補入 茶字は他の文献から』

序（昭和 57 年 第 1 版の「序」を引用）	1
1. はじめに（道路の発達）	3
2. 本願寺建立と東西分裂	6
3. 真宗の蝦夷地開教	9
4. 専念寺と松前藩の結合	11
5. 欧州人の米航と幕府の直轄化	13
6. 明治初期の本島における政策	16
7. 現如上人の出立（北上）	20
8. 現如上人の管刹地所検分	27
9. 本願寺道路の開削と修復	30
A 軍川新道 12 Km	34
B 本願寺街道の開削 103 Km	35
東久世長官と副島参議の新道検分	37
定山溪の降口 2 km 程の明治開削跡道を発見	39
札幌郡西部図 船越長善 筆 成立年 明治 6 (1873) 年	41
中山峠 道の駅横に立つ「旧本願寺街道」碑について	42
伊達の風土 第 10 号と 14 号から【抜粋編集】	43
C 山鼻より発垂別までの 6 Km	59
D 鶉山道の改修工事 7 6 K m	60
10. 駒ヶ岳の噴火と本願寺道路	67
11. 桔梗野の開拓	71
12. 資料編	73
1 「北海都新聞」明治 42 年 9 月 4 日	73
2 「田村新九郎の嘆願書	76
3 「東本願寺開道移民記念碑建設之趣意書」	77
4 「現如上人銅像の由来」	80
5 「鶉山道図巻」の巻記	81
6 「現如上人巡教工程図」	82
追加資料 道内御休泊所一覧	a. b. c. d. e. f
7 「北海都新聞」（資料 1 の続き）	83
8 「桔梗開基百年の碑」	85
9 幕末東西本願寺の道南の開拓	86
10 東本願寺街道 開削 改修 推定図	87
11 六条郷安寧村関係図	87
『現如上人北海道行化之跡』錦絵は函館市中央図書館から	89
12 蝦夷が島温度御 音符付き	108
13 詠 歌	109
14 移住奨励歌	109
15 酔 歌	109
16 蝦夷が島温度 歌詞	110
本願寺街道年表（昭和 57 年第 1 版の「年表」を引用）	111
おわりに	124
参考文献	125

追録 1～4

アイヌ民族差別に関する学習資料 共なる世界を願って …

序

※一部重複があると思うが昭和 57 年 第 1 版の「序」を引用しました。

本願寺街道

東本願寺は徳川家康より京都、堀川の地に土地を寄進されてできた。以後、徳川家とのつながりも深く、維新に至り、そのようなつながりをもつものとして見られたことは当然であろう。

そこで東本願寺は、何でもよいからその汚名を除きたいと思って、その意志を義兄、山階宮晃親王に話してあった。そのことがきっかけとなり、厳如上人は朝廷に「何事でも背かない」という誓詞を差し出す羽目になった。募末には勤皇方に味方して、法主自身、勤皇の志を立てていた事は、明白の事ではあったが、天下の状勢としては止むを得ないことであろう。時あたかも、日本に対するロシアの圧迫大なりし事は、外国の事情に詳しい者にはよくわかっていた。北海道の調査もその必要を感じ、明治政府の緊急を要する事として行われたのである。然し、北海道開発、特に道路開削は、莫大な経費を要する事である。明治になり間もない時期では、まだ戦争が終ったばかりで政府自身に資金はない。けれども政府は何とかして北海道開発をした。丁度その時に本願寺より「何事にても、申し受ける」という誓詞が入っていた事は、政府にとっては大変都合がよかったのである。早速、明治政府の重臣は、山階宮を通じ、北海道開発の政治工作を行った。その政治工作は見事に図に乗り、東本願寺が北海道の道路開発を行う事になった。

翌五年、政府が札幌本道を着工できるまでの空白を埋める事が出来たのが本願寺街道である。もしその空白を埋める事が出来なければ、ロシア侵出もあり大きな目的であった。本願寺道路が出来ていない明治 3 年の札幌の人口は 13 人が、道路が完成した明治 4 年になると、624 人に急増している事を見ても、又それ以後の政府の東本願寺へ対する姿勢を見ても、東本願寺がその目的を無事果した事が分ろう。

要するに、北方開発の先兵として、危険を侵して、短時日に行う事は、莫大な資金と人を持つ団体でなければできない事である。けれども、人を多く集める事は、北海道では不可能である。少数の人間で仕事をするとすれば、一人で二人分、三人分の仕事をしなければならない。そこに並の人間以上の事ができる者が要求された事になる。

その仕事をやり抜いた事が、道路開発上の歴史的大事業であり、又教化上も、これ以後多くの人が帰依した事の大きな要因となる力がそこにあったと思われる。

開拓に至るまで

北海道開発の出願が、明治2年9月に下るや、東本願寺法主（第二十一世）巖如上人は、当時19才の法嗣、現如上人に命じて、その準備を行った。まず、加藤徹雲に命じ、実地検分として先発させ、次いで用掛主任、節制松井逝水。節制副・源光寺。使命司・長巖寺。筆史・山岡新助。小卒1名に命じて、同月20日、横浜より開拓使御用船昇平丸に乗り、北海道の下調査を行った。開拓の目標として、次の三項目を掲げた。「新道切開」「移民奨励」「教化普及」の項目を掲げ、明治3年2月10日、当時19才の現如上人を責任者として、総指揮・下間頼世治部卿法眼・以下開拓使から印鑑を受けた者、士分43名、僧分15名、小卒43名、計101名の者が、京都を出発し、北海道へ向った。途中陸路で青森まで行き、青森から船で函館へ明治3年7月7日着いた。函館に着いた一行は、教化隊27名、新道切開隊74名に分かれ、開拓に取りかかった。

教化隊の目的は、札幌に教化の中心となる札幌管刹を作る為である。一行の名前は、次の通りである。現如上人。総指揮、下間法眼（坊官奏者役）。浄興寺（勅書櫃守護役）。浅井溢。宮谷管雄。松井逝水。平岡逸郎。村田牧。上田甫。稲波豊雄。大井権蔵。神田順治（参事）。山岡捨松。加藤時之助。中村主殿（医師）。光伝寺（休泊掛）。従者、広助・吉助・上田普吉他8名である。

新道切開隊の目的は、札幌までの道路建設である。一行の名前は次の通りである。総指揮・宇野三右衛門（奏者助役）。尾崎半衛門。鷺田覚右衛門。海老群平。手塚繁三郎。福永茂三郎。柴山太八郎。仲野藤左衛門。大浜和助。村上義有。田渕敬二（会計方）。木村幸治。杉浦意記（納戸会計兼公用人）。平岡源兵衛。飯田翠。二村篤三郎。心海寺（開拓掛）。西照寺僚（開拓掛）。了蓮寺。栄泉寺。伊藤寅吉。鈴木吉造。小助。中村小三郎。沢菩兵衛。吉平（二村篤三郎従者）、他48名、計74名である。

1. はじめに（道路の発達）

文化庁では、昭和 54（1979）年より「歴史の道」の保存・保護を呼びかけている。

北海道としては、戊辰戦争関係の道路を主体と考えているという。その一環としてか、昭和 56（1981）年 10 月 4 日、松前・福島両町教育委員会主催で、実に 70 年ぶりに、白神山道の最古道の復原踏査が行われた。本校の宗教部も招待され参加した。将来的には、この道路を「歴史の道」や「ハイキングコース」として活用していく考えとの事であった。

北海道では、約 2 万年前（旧石器時代末期）から人々が生活を営んでいた。約 1 万年前頃（沖積世時代で現日本列島を形成）から、定住生活に入ったと考えられるが、食糧を得る手段としては、「けもの道」や河岸・海岸を利用し生計を営んでいたと考えられている。

古来、北海道（以後・明治 2 年迄は蝦夷地＝狭義の意味でと記す）はアイヌの人々を主人公とする生活文化で、小集落（＝＝＝コタン）を主体とする彼等は、本州でのような「治道（はりみち）」を必要とする事はなく、古来よりの雑木林や草原の「けもの道」など上記のような地を交通していた。



道 分 路

江差山道（227 号線）中山トンネル東口にあたり、毛無山道（旧々道）の西入口にもあたる。トンネルに向い北（右側）。 S 62. 10. 18

15 世紀中頃の箱館（函館という表記は明治 2 年より使用）の石崎八幡神社の鰐口や 16 世紀の新羅之記録などによれば、気候温暖な道南を中心に、和人の集落が形成されていた事が知られる。従って

“治道” も作られた事と考えられる。時代は前後するが、道南の “12 の館” 等も良い例であろう。

通路に関しては、海上交通と共に、見るべきものはほとんどなかった。例えば、^{※1}「休明光記」によれば

『～又蝦夷地は盡く險阻にして、通路自在ならず、所としては人跡を絶え、その海岸は搔送り、舟をもってようように通路をなすといえども、風順よからざれば、舟行の道をたち・・・』

と記されている。蝦夷地はことごとく険しく、通路としては海岸線が多く、緊急時の連絡も思うようにとれない未開地であると伝えられている。北海道での “治道” の歴史は、非常に浅く、前期幕領時代『寛政 11（1799）年～文政 4（1811）年』になり、主に東蝦夷地が対象となった。「大日本恵登呂府」で著名な近藤重蔵が、択捉島の帰途、十勝の広尾と日高の類似間の約 10 km に山道を開削したこれが、最初の “治道” とされている。

後幕領時代『安政1(1854)～慶応3(1867)年』には、残る西蝦夷地が開削された。当時の箱館奉行所では、防衛施設の面で巨費を必要としていたので、民間に“橋銭”を徴収する事を条件に開削を奨励した。安政5(1858)年頃までに一応完成したが、それは本島を^{※2}一周する事を目的とした人馬道であった。箱館近郊では、安政1(1853)年道南の難所として有名な鶉越え

(現・国道227号線)を、大野村市渡の道仙(大悲庵主)と木間内の麓長吉(旅館主)が開削をころもだが失敗している。安政4(1857)年には、亀尾の住人である^{※3}庵原 菡 斉が箱館奉行の命で、軍川新道(現・藤城～軍川)を開削した。

明治期になってからは、開拓長官、特に二代東久世通禧は、北海道の中心地を、石狩国の札幌と定め連絡路の建設を考えた。(他にも軍事的な目的もあり札幌を中心とする放射状道路の開削も含む)

このような時期の前半に、本論「本願寺街道」が開削された。その後に、官費による“札幌本道”が、日本最初の馬車道として、本願寺道路完成の翌年 明治5(1872)年開削されている。明治19(1886)年北海道庁が新設され、明治20年代に入ると、金子堅太郎の囚人^{※4}使用命令により、監獄道路なる道路が開削された。代表的道路は“北見道路”であろう。開削殉死者数約300名にも及ぶという。



昭和61年日本の道百選に選ばれた
函館市街の「本願寺街道」



石畳やガレキの街並みなど異国情緒あふ
れとして整備されている大正街道が、建
物の「日本の道100選」に選ばれた。
『市町村ごで』62年/4579

明治40(1907)年代には、「第1次拓殖計画」等に依り、更に充実を見るに至った。大正8(1919)年には、「道路法」が施行され、軍事色は一層強くなった。第二次世界大戦後の昭和25(1950)年には、北海道総合開発計画に基づく「道路法」が施行されるようになった。更に昭和41(1966)年になると、「国土開発幹線自動車建設法」が施行され、高速自動車道(国道)が、各所で開通するようになった。

近年では、昭和61(1986)年より建設省と日本の道実行委員会とで「特色ある優れた道路」を“日本の道百選”として選んでいる。道南からは、昭和61(1986)年国道5号線の^{※5}「七飯町の赤松並木道」が、翌62年は市道末広8号線、愛称「大三坂」0.3kmが、函館らしいエキゾチックな坂道として、選定された。函館市としては、今後2,900万円をかけ、整備維持していくという。



註1 休明光記、羽太正養著（後・筑前守）寛政7（1799）年～文化4

（1807）年迄間、蝦夷地取締御用掛・蝦夷奉行・箱館奉行・松前奉行の奉行職として、「蝦夷地御所置の始末」の大綱で、本綱9巻・附18巻からなる重要資料。

5のbの註2. 参照

註2. 東本願寺が朝廷に提出した願書にも「蝦夷地の義は周回のみ道路～」と記されている。

註3. 寛政6（1794）年～安政5（1858）年 幕吏で御手作場・道路開削で有名。安政1（1854）年に子息・勇三郎が、箱館奉行所杞下となったので共に渡島し、汐泊川下流のメナ：コタン（現・亀尾町）を自費開拓し御手作場となる。 菰 齊はこの地が銭亀の尾の部分にあたるので、「亀の尾」と命名したのが町名起源。「庵原町」は菰 齊の功を記念し町名とした。共に昭和14年4月函館市に合併。墓所は亀尾町39番地興禅寺。

註4. 囚人道路・タコ部屋道路とか種々あり当時は貴重な労働力でもあったが、虐待がひどく人間らしい待遇はまったくなく、近年地方史研究会の会友により逐次調査され、発掘・埋葬されている。

註5. 国道5号線、別名「大沼国道」の愛称で呼ばれている。

明治9年、天皇の行幸を記念し、旧道より移植したもので、現在“赤松1383本・黒松101本” 当時の松は高さ20m 直径80cm、距離は桔梗町から峠下までの14.4kmに及ぶ。尚、当時の赤松の一部は、道立林業試験場道南支場西側と上磯町東浜の海岸側の赤松も共に移植されたものである。

※編者追記

右図は明治中期の地形図



※参考33頁の地図と見比べて下さい

2. 本願寺の建立と東西分裂

親鸞聖人の教えである浄土真宗（一向宗・門徒宗・真宗）の本山である本願寺が建立されたのは、聖人の死後10年目の文永9(1272)年に末娘である覚信尼によって、京都・^{※1}東山の大谷の地に「御影堂」を建立した事に起源している。本願寺と寺号が公称、されたのは、元亨1(1321)年 本願寺3世・覚如上人の時である。

8世 蓮如上人(1415～1498)の代になってから、本願寺教団は飛躍的な発展をとげた。その理由は地侍や名主層を通して、農民の自治組織の中で教化する方法がとられたからである。このような教化の中で発展した本願寺勢力は、旧仏教界や大名勢力との間で、所謂「一向一揆」の勢力争いを引き起こす結果ともなった。一例としては寛正6(1465)年に大谷の本願寺は比叡山の天台衆徒によって焼失している。このような社会状況の中で蓮如上人は、更なる教線^{※2}拡大の為に「名号本尊」をスローガンに畿内・北陸地方の教化・布教を行った。この例については、次編の「真宗の蝦夷地開教」でもふれるが、蓮如上人の精力的な教化・布教活動によって、北陸地方は本願寺の有力地盤となり、時の守護大名・富樫氏を自決させ、約1世紀間にわたる本願寺の領国と化した。蓮如上人は4年後の文明7(1475)年 吉崎を後に、京都に向った。京都では文明11(1479)年 山科に本願寺（現・京都東山区山科）を再建したが、再び異宗徒の為に焼失した。（日蓮宗徒）



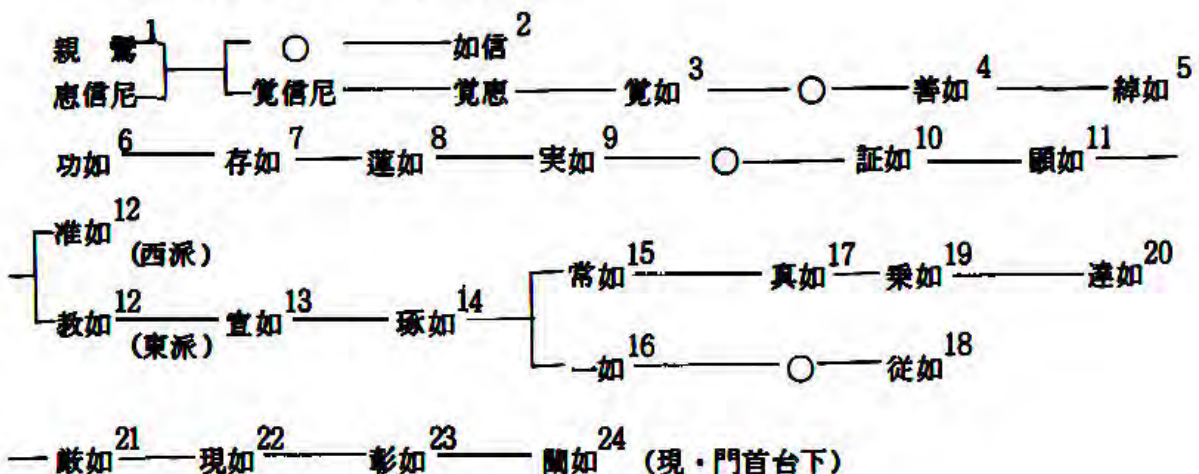
「安城御影」

幼名 松石庵・松石丸・十八公
名 俗名（配流時）・藤井善信



蓮如影像（室町時代作）

真宗大谷派系図



本願寺9世・実如上人は大坂（阪は明治期より）の石山を本願寺（現・大坂城内）とした。11世 顕如上人は永禄2（1559）年に朝廷より“門跡”号を許可され、経済的援助を得る事ができた。しかし、中国地方の平定を目的としていた織田信長は、関西の要津である大坂を手中にする為に、本願寺と対立したが、天正8（1580）年勅命に依り講和した。その後紀伊の国（現・和歌山市鷺森）や大坂（現・大阪市北区東天満）等に移転したが、千利久の自決した天正19（1591）年に、本願寺12世・准如上人は時の天下人・豊臣秀吉により寺地を寄進され、現在の京都・堀川七条に堂宇を建立した。これが今日の通称“西本双願”である。

慶長7（1602）年に全国を平定した徳川家康は、本願寺11世・顕如上人の長男・光寿に寺地として、京都・東六条と七条に四町四方（約57,600坪＝古屋敷）を寄進し、ここに光寿は10余年ぶりに復職し、系図に示したように



<http://www.sainenji.net/kyouyo.htm>
「石山合戦軍船旗」
(広島県竹原市長善寺蔵)

東派12世・教如と称し、現在地の京都・烏丸七条に堂宇を建立した。ここに本論の論題のもととなる東本願寺が誕生したのである。また翌年徳川秀忠（慶長10（1605）年＝より2代将軍）の口ぞえにより、上野国隈橋の妙安寺（群馬県前橋市）より親鸞聖人御影像を迎えた。更に3代将軍・徳川家光によって、寛永18（1641）年に寺地として東西194間2尺・南北297間5尺（約58,000坪）が寄進され、先の古屋敷に対して新屋敷（涉成園＝枳殻きこく邸）といわれた。ここに今日の東本願寺が完全に分離独立した。しかし、

近年の研究によれば完全に東本願寺の独立が認められたのは、元和5（1619）年であるという。

一向一揆の図

安芸門徒の黄旗（石山合戦）

旗には

「すすめばおうじょうごくらく、
しりぞけばむげんじごく」

と記されている。



三河一向一揆





蓮如の里
福井県坂井郡金津町観光パンフ

真宗十派本山表

	派名	本山	所在県
1	大谷派	本願寺(東)	京都市
2	本願寺派	本願寺(西)	〃
3	高田派	専修寺	三重県
4	木辺派	錦織寺	滋賀県
5	仏光寺派	仏光寺	京都市
6	興正寺派	興正寺	〃
7	出雲路寺派	毫摂寺	福井県
8	三門徒派	専照寺	福井市
9	山元派	証誠寺	福井県
10	誠照寺派	証誠寺	〃

又本山自体も自派の事を^{※3}東派といていた。以上の経過で建立された堂宇は数度の火災に遭遇したが、現在の堂宇は蛤御門の変(=禁門の変：元治1(1864)年で焼失し、明治13(1880)年から明治28(1895)年にかけて完成したもので、世界最古の木造建築物である。(最終完成は明治44年の勅使門の完成までまたねばならない。)以上の建立経過の中で、東本願寺と徳川家(幕府)との親密な^{※4}関係は_否定できぬが、後編に示すように、朝廷に対して

“誓紙”を提出し教団の態度を明確化した。

註1. 現・円山公園から知恩院付近で、
場所は知恩院塔中の崇泰院あたりか。

註2. 本像より絵像、絵像より南無阿弥陀仏
の名号を第一義とする思想。

註3. 現在のように“真宗大谷派”と改称
したのは、明治14(1881)年6月11日の
事である。

註4. 本願寺東派13世・宣如上人を東泰院と
命名した理由もここにあると考えるの
だが。



3. 真宗の蝦夷地開教

本願寺8世^{※1}蓮加上人は「真宗界では中興の祖」といわれ、越前の吉崎山に堂宇を建立（現・福井県坂井郡吉崎村＝現・蓮如の里は風光絶佳の要害の地）し、「名号本尊」をスローガンとして教化・布教に活動した。

この頃上人の多数の門弟の中に、肥後（現・熊本）の名家菊地の分家である菊地武広（弘賢）と弟・武明（明順）という兄弟僧がいた。蓮加上人は兄の弘賢に対し蝦夷地へ弟の^{※2}明頂に對しては東北地方への教化・布教を命じた。



真宗大谷派吉崎別院

1673年山上についての公訴の結果1721年（享保6）掛所として再興す。
金津町観光パンフ



吉崎山上の北潟湖を背にした蓮加上人像
昭和9年作・高村光雲四大銅像作の一つ
金津町観光パンフ 編者が画像を置換

この蓮加上人の弘賢への命が、蝦夷地における真宗の先駆となったのである。^{※3}弘賢は明応8(1499)年に本島の^{※3}上ノ国に一堂宇浄願寺を建立し、教化活動に専念したが、此の建立等を裏づける資料としては、現在秋田市旭北栄町の浄土真宗（旧・大谷派）の浄願寺の御本尊の裏書きに、下記のように記されている。

大谷本願寺釈実如（花押）

文亀元年辛酉十二月二十八日

方便法身尊像

夷島 松前津

願主 釈弘賢

この資料は現在のところ本道に浄土真宗が伝えられた事を示す最古の史料である。

浄願寺2世・了明が永正2(1505)年に、山科本願寺（現・京都市東山区）で、本願寺9世・実加上人より得度を受けた際、父・弘賢の蝦夷地開教の功を賞されて、自筆の“法名”と“浄願寺”の寺号を下賜された。

しかし、時は永正年間で和人の苛酷な支配が起因し、アイヌとの争乱（＝永正の乱）が続き、2世了明は嗣子・了専と共に永正11(1514)年本島を後にした。**前**頁に記した秋田に定住したが、それまでの経路は津軽（現・青森）の^{*4}鯨ヶ沢・出羽の土崎そして先に記した現・秋田市旭北栄町にと日本海沿岸を数度にわたり移転をくりかえしている。



註1. 応永22(1415)年～明応8(1499)年本願寺8世・幼名は布袋丸・緯は兼寿。本願寺7世・存知上人の長男、母は正室でない為6才の時去る。

当時の本願寺は経済的には窮乏状態であった中で、8世の法灯を続く、以後文書伝道等により繁栄の基礎がきずかれ、それと共に本文中のような法敵をも持つ結果となった。57才の時越前の朝倉氏の寄進により吉崎御坊を建立。77才で寺務を実如に譲り、信証院と号す。

註2. 酒田市方面を中心に布教。

註3. 桧山郡上ノ国町。

註4. 浄明寺の開基住職・西道（桧山安東氏の一族）の招きによる。



吉崎御坊の本堂跡

文明3年5月吉崎へ下向された蓮如上人はこの御山の地形が大変よいとして原始林を伐り開き整地をして7月27日から門徒衆の働きによりかたのごとく御坊を建立し諸国から集まる多くの門徒に真宗の御法をおとぎになった。照日寺（滋賀県多賀町）の古絵図によると本堂は南面し柱間五間四面、正面中央に向拝があって中に御本尊と親鸞聖人の御影像を安置し本堂の西側に庫裏と書院があった。吉崎御坊は文明6年(1474)3月28日火難にあいその後再建したが翌年8月21日再び戦国の動乱で焼失し上人は四年余りで吉崎を退去された。その後永世2年(1606)三度火災にかかり御坊跡は荒廃のままとなった。



現如上人お腰掛の石

この石は、蓮如上人御在世の当時から吉崎御坊の中にあっ
たもので、文明6年(1474)年の「吉崎山絵図」の中に描かれ
ているのは、この石であろうとされています。その古絵図
の中では、蓮如上人が二人の弟子を伴い本坊の後の石に腰を
掛けて、対岸の鹿島や波松のあたりの景色を、ご覧になって
いるところが画かれています。五百余年の月日が流れた今も
この石を見て蓮如上人御得をお慕いする信者が絶えません。

あわら市HP 吉崎御山の史跡紹介 その1と2から

4. 専念寺と松前藩の結合



専念寺

約400年前に建てられ、浄土真宗では、北海道最古のお寺です。松前家の特別な保護を受けて幕末までに北海道内における布施を独占し、「エゾ御坊」といわれたほどの名刹でしたが、明治以後2回の火事にあい、山門や経蔵、納骨堂に昔の面影が残っているだけです。

浄願寺の徹退後の約 60 年の空白時代の後、本島での教化・布教に貢献したのは、西館山専念寺である。専念寺の建立年代については数度の火災のために不明な点が多いが一般的には^{*1}天正 3 (1575) 年に真徳（出身地及び姓名は不詳）なる僧が、松前藩祖・慶広に招かれて福山町字荒町（現・松前城内）に一堂宇を建立したと伝えられている。

これから以後の専念寺における教化・布教の活動は、松前藩（松前家）との結びつきを無視して考える事はできない。

古来、松前藩では “一宗一派” 主義を政策としていた。専念寺は慶長 7 (1622) 年には東派（現・大谷派）に属し、急速に松前藩に接近していった。

そのきっかけは慶長 10 (1605) 年 3 月の「木仏事件」である。

本願寺 12 世・教如上人は専念寺の 3 世・了甫に対して、“寺号” と “御本尊” を下付したが、帰途に羽後（現・秋田）の浄願寺によって差し押えられた事件である。

当時の浄願寺は羽後や羽前（現・山形）一帯に「中格本山」として君臨する勢力をもっていた。

浄願寺の主張するところは、「蝦夷地における開教の祖は、浄願寺であり蝦夷地に浄土真宗系の寺院を建立するに際しては、当浄願寺の許可のもとに建立し、末寺となるべきである。」と主張するものである。専念寺としては、伯父であり（父は松前季広の 6 男で藩祖の弟にあたる）本島の島主でもある松前藩祖慶広公（5 代）に調停を依頼した。慶広公は本山である本願寺東派との交渉の結果、

「本尊は法主・11 世教如上人より、藩主・慶広に下付し、藩主・慶広公が専念寺に寄進する。」との形式で無事解決した。

この木仏事件の後には松前家（＝藩主）とは種々の関係をもち、本島＝蝦夷地の真宗界を約 200 年間にわたり独占し教権を支配する事となった。



蝦夷教化の先駆をなした浄願寺
羽後・羽前地域一帯に「中格本山」として権勢をほしいままにした浄願寺。
S 62.7.28

特に9世・快賢は若くして死去、後嗣として加賀国（現・石川県）能登の西念寺出身の百醜が入寺してから強まった。例えば、寺格が内陣（当時は上から二番目の格）となった事をはじめ、松前家の家紋入り五条袈裟（行事の袈裟）を藩主・賢広（藩祖・8世）より下付されたり、専念寺11世の嗣子として藩主の孫を迎えた事など松前家との血縁関係が15世までつづいた。経済的にも檀家数千軒をもつていたという。たぶん、当時の交易路である日本海側（当時は表日本）の真宗王国を誇る越中・越後・加賀の檀信徒であったであろう。

以上のような諸関係によって栄華をほこっていた専念寺も11世・達祥の代をさかいに衰退の道をたどる事となった。原因としては後期幕領時代となって政庁が政治・経済の中心地である箱館に移転した事、次いで鯨の不漁がつづくなどで、内的には松前家との血縁関係による貴族化、信仰心の希薄化等が考えられる。

時代は前後するが、専念寺6世の浄玄の代寛文8(1668)年に、木古内村に一堂宇を建立したが、翌年中断した。7世・瑞玄の時に泉沢村に再建し、後に宝永7(1710)年箱館村の富岡（現・弥生小学校附近）に移転し、宝暦9(1759)年には専念寺の掛所・浄玄寺と公称したが、宝暦9(1861)年には年間50両で浄玄寺及び専念寺12ヶ所の掛所を借り上げ、明治5(1872)年にはそれぞれ寺号を公称した。また^{※3}箱館別院は明治12(1879)年と明治40(1907)年に七堂伽藍が火災で焼失したが、大正12(1923)年11月に日本最初の鉄筋コンクリート造りとした。建立地は現在地の市内元町25番地である。尚・設計者は本山・大師堂を設計した伊藤平左衛門である。



専念寺経蔵

明治時代に自火・兵火・大火と3度の火災にあい写真は1668(寛文8)年建立のもの。S 62. 11. 8

松前藩と専念寺の血縁関係



註1. 他に天文2(1533)年・天文5(1536)年の説もある。

註2. 真徳は本願寺9世の実如上人の弟・兼俊の孫との説もある。

註3. 時の住職は本編の主人公である現如上人の嗣子・連枝・信正院大谷登潤師である。

5 欧州人の来航と幕府の直轄化

前編までは、浄土真宗と東本願寺と本島における教化を中心に考えてきたが、17世紀中葉となると、欧州における絶対主義や財政基盤を通しての重商主義政策など、一連の植民地政策により、新世界とも言える東洋にも欧州人の目が向けられるようになった。

本島＝蝦夷地に関する欧州人の地理知識は、大陸の一角から、半島の一部へ、17紀に至ってようやく“島”と認識されるに至った。また、日本人の知識も右の図の「元禄御国絵図」のような程度でしかなかった。

元禄御国絵図

北大北方資料室蔵 軸物210



元禄御国絵図
1700年（元禄13）松前藩の幕命により調繪と共に提出したもの。
家蔵：吉田伊兵衛の別荘によって作られたものと考えられている。

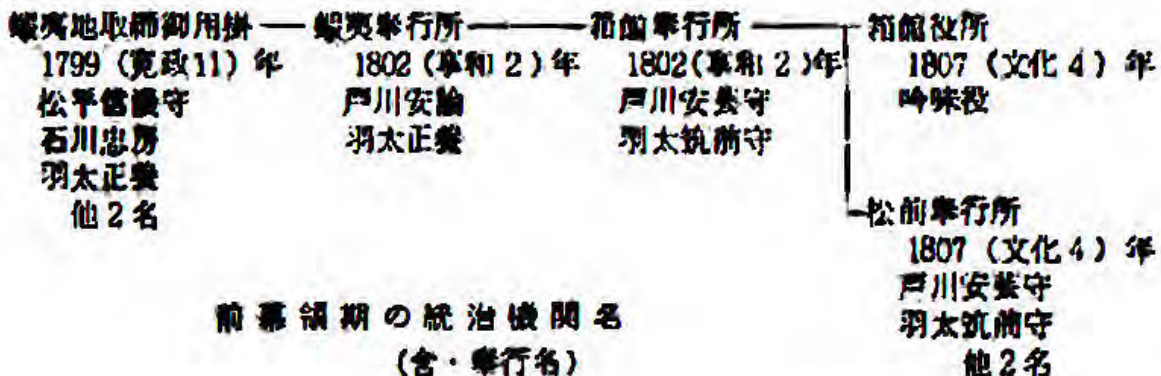
A、前幕領時代 寛政11(1799)～文政5(1822)年欧

州人が本島に関心を示した理由として

1. 金・銀の産出地として、
2. キリスト教の布教地として、
3. 地理的探検地として、

の3点が考えられその中で、多くは1の金・銀の探掘を目的としていた。本島に最初に、訪れたのは、寛永20(1643)年 東インド会社のフリースであり、次いで安永7(1778)年の露領軍中尉のラクスマン、英人プロトン等が本島沿岸を訪れている。

これらの状況に対して、松前藩では外国船の出没、特に露国船の頻繁な出沒＝千島列島南下策については、現地のアイヌ人を通して承知していたが、幕府には一切報告はしていなかった。領地（本島＝蝦夷地）に対しての知識は前頁の資料の絵図や共に幕府に提出された“元禄郷帳”のみで、領民に対する支配、特にアイヌに対する支配は「蝦夷は蝦夷しだい」との方針で、常に消極的態度に終始していた。



一方、国内的には仙台藩医である工藤平助は、※1「赤蝦夷風説考」二巻[〃]を著わし、露国侵略の危機を訴えた。老中 田沼意次は天明 15 (1785) 年に、幕史・山口鉄五郎に千島・樺太（現・サハリン）方面の調査・探検を、寛政 10 (1798) 年には同じく幕史・渡辺胤などに大規模な調査を命じるなど動きは活発化してきた。



また、彼等の報告に基づいて東蝦夷地を直轄化し、松平信濃守以下 4 名を「蝦夷地取締御用係」に任じた。彼等の政策は「アイヌの和人化策と交易と警備を主眼として好成績を収めた。以後役職名は資料のように変更改名はされたが、政策は踏襲され箱館は蝦夷地の首府として繁栄した。その間の事情は、箱館奉行・羽太筑前守の「休明光記」に詳しい。

B、後幕領時代＝箱館開港 安政 1 (1854) 年～慶応 13 (1867) 年

蝦夷地は幕府にとって露国との間係が一応安定期に入った事を表理由として、文政 4 (1822) 年本島を松前藩に返還した。それにともない幕府は嘉永 2 (1849) 年 藩主・※3 松前崇広に築城を命じた。これにより松前藩は藩祖以来はじめて城持大名となり安政 1 (1854) 年に城が完成した。同時に

「箱館周辺 5 里」の土地が下命され、更に翌年に「東は木古内以東・西は乙部以北」の東西蝦夷地の土地が下命された。その、訳は嘉永 6 (1853) 年米海軍ペリー准将を提督とした船隊が浦賀に入港し、開国を要求したが幕府は回答を翌年までのぼし、嘉永 7 (1854) 年に

「日米和親条約」（神奈川条約）を締結したためである。

その際、ペリー准将側の開国に伴う要求は、下田と共に松前を開港地としていたが、松前は藩領であり拒否し、郷土である箱館の地が決定された。ペリー艦隊はさっそく視察に訪れている。

その時の箱館市中の様子は＝＝＝平尾魯仙著「松前紀行」に詳しい。又、余談となるが、艦隊の従軍写真家・エリファレッド・ジュニアの手による銀版写真は我国最古の作品と伝えられている。



日本最古のダゲレオタイプ
ペリー艦隊従軍写真家が松前藩士連藤又左衛門と従者を撮したもの。
6/1 ペリーより寄贈された。
日本最古の銀版写真
ペリー提督箱館来航誌

註 1. 露の進出と対露貿易や本島開拓の必要性を、説いた。"赤蝦夷" "赤人" とは露人の意。

註 2. 蝦夷地取締御用掛・篠館奉行である羽太正養著、全 27 巻「休明の粥代の光によるものから」の語を書名とする。羽太の在職中（寛政 11～文化 4）の記録で幕府の蝦夷地経営の様子を伝える。重要資料。

1 の註 1 参照



羽太正養
(谷文晁『近世名家肖像』)

註 3. 松前藩中興の英主といわれ、外様大名でありながら、幕府の寺社奉行・老中格・老中を歴任した。兵庫開港問題で官位を剥奪され元治 2（1865）年 38 歳で病没した。



松前崇広

※ 編者補入



福山館

前身の福山館は、松前慶広の代に、松前氏が居城としていた大館（徳山館）より福山へ移城した際、1600 年（慶長 5 年）から 1606 年（慶長 11 年）にかけて建設された。

福山館は堀や石垣があり、本丸のほか二ノ丸、北ノ丸、櫓が築かれていたが、松前氏が無城待遇だったことから、正式に城とは呼ばれなかった。



松前城旧天守、焼失前 1935年9月撮影

6. 明治初期の本島における政策

前期幕領期・後期幕領期を通して欧米船の出没した時期で、灯明用の捕鯨油が北太西洋に、米合衆国では対中国貿易の中継地の必要から。また露帝国では千島方面から樺太(現・サハリン)方面に東方政策を転換した時期でもある、このような間係で外国船の本島沿岸部への出没が多かった。これらの行為などに対して幕府は当然鎖国政策を強化維持した。

慶応3(1867)年10月・15代将軍徳川慶喜は。諸藩の事情に鑑み“大政奉還”の上奏に至った。ついで、“討幕の密勅”“王政復古の大号令”そうしていわゆる“鳥羽伏見の戦”=戊辰戦争に発展していった。3月9日の戦闘の最中、旧来の摂政・関白・将軍が廃止され、それに代わり総裁・議定・参与の三職が招集され、侍従・清水谷公孝の献言によって防備・開拓が決定された。そうした中で同年4月本島の経済・政治の要である郷土“箱館”に行政機関である“裁判所”が設置された。しかし郷土箱館は翌2年5月までの間、旧幕府軍の海軍副総裁であった榎本武揚等に占領されたた事があつて、一時的空白期間であった。明治2(1869)年7月に東京に開拓使が設置され、旧佐賀藩主で開明的な鍋島正直が長官に任命されたが、



清水谷 公孝

高齢のために“七郷の都落”の一人として急進的思想家であった東久世通禧が二代長官と任命され、郷土箱館に開拓使が設置され、8月15日には当時本島に関する第一級の知識人と目されていた松浦武四郎(開拓使判官・正七位)の献言によって本島を北海道と命名し、同時に道内を「11カ国86郡」に分割した。此れら一連の功により同年9月19日選出御手当金として金百円下賜されている。

松浦武四郎は文政1(1818)年 現・三重県一志郡三雲村の郷土・松浦桂介時春の末子4男として生まれる。幼名は竹四郎・諱は弘<ひろむ>号は種々用いているが、多氣志楼・北海道人が代表的であろう・生家は浄土真宗である。

7歳で郷土の来応禅師に学び13歳で津藩校に入学。しかし16歳から20歳頃まで主に北陸から西日本にかけて旅行し、21歳で長崎の臨済宗禅林寺で出家し文桂<ぶんけい>と称している。27歳で還俗している。以後、蝦夷地(広義の)を探検し。僧侶時代、諸国の名士より詩文・絵画 仏典を学び、名所・史跡を訪ねた事が幸いいしてか、種々の著作を出版し今日に伝えている。



松浦武四郎

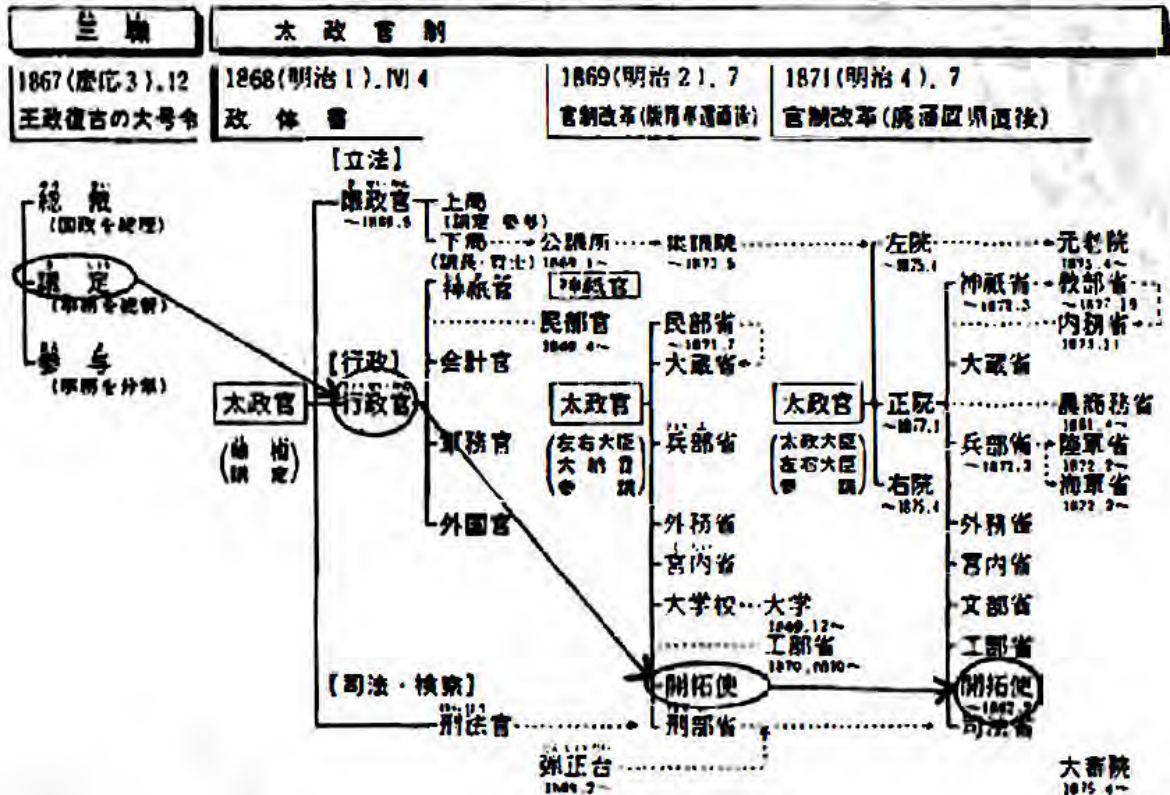
東京国立博物館で新たに発見された菊地容斎筆の彩色画。45歳頃の作で6度目の探検より帰宅。 S 58.5.8
北海道新聞

明治元(1868)年 51歳の時箱館府判事・翌年7月25日 開拓使大主典・8月2日 開拓使大判官を拝命している。8月15日蝦夷地を北海道と改名した事などにより、先に記したように金百円を下賜されている、明治3(1870)年3月30日に官位・位階を返上し、明治21(1888)年2月10日自宅にて卒中の為死去する。

行年71歳・従五位・教光院釈官遍照北海居士

以上のように北海海に対する政策は、幕領時代から眺めれば“対露戦”に備えての政略に終始していた、本題の“本願寺道路”での東本願寺としての立場は。慶長7(1602)年 現在地を初代将軍・徳川家康及び3代将軍 徳川家光より拝領し、後年の種々の加護の関係上当然徳川方=幕府方と目されたであろう。

の開拓機関の変遷



しかし21世法主・嚴如上人(大谷光勝)は、嗣子・現如上人(大谷光瑩)と共に寺院9,700余ヶ寺・門徒730余万名の統領としての立場より、朝廷に対し全曲的な協力をする旨の誓書を提出し、東本願寺の立場を明確にしてあった。

また 東本願寺（以下本山と称す）としては朝廷よりの献金や糧秣の献納請求が多く、本山としても手元金は“零”に等しい財政状態であったので、当時としては老齢（54歳）の法主や嗣子が、地方巡錫による“浄財の献金・糧秣献納”で、朝廷に対しての忠誠心が表明されていた。



東本願寺朝廷関係記録
東本は根北文庫の印があり従って東本願寺の旧蔵書である。内容は文久2年～明治5年迄の朝廷に対しての献金等についての記載。北海道教務所蔵
※ 題名は仮題

さて、新政府としては北海道の開拓と防備を急がなければとの政策から、先の本山からの誓約書がクローズアップし、本山側としても本派

本願寺に対する対策の関係等もからみ、本島（蝦夷地）に対しての 1. 新道開削 2. 教化普及 3. 移民奨励 を目的に、明治2（1862）年6月5日に、本島開拓等に関する“^{※3}願書”が艇出され、それに対して同年9月6日に次章に記載する“御沙汰書”が交付された。これらの諸政策により北海道の首都たる性格を持つ^{※4}札幌本府への幹線道路たるいわゆる「本願寺道路」（＝有珠新道）が開削される事になった。



北海道開教日誌
樋口南右衛門の手記で簡は現如上人隨行員として道庁役で参加。自宅は京都六条中津敷屋町（明治5年時の住所）
※ 題名は仮題。北海道教務所蔵

註1. 松浦武四郎の蝦夷探検歴は、以下の6回にわたり行われている。

- 第1回 弘化2（1845）年[28才]～東西蝦夷地巡視
- 第2回 弘化3（1846）年[29才]～樺太渡島
- 第3回 嘉永2（1848）年[32才]～国後・択捉島渡島
- 第4回 安政3（1856）年[39才]～樺太渡航（タライカ湖）※幕府雇となる
- 第5回 安政4（1857）年[40才]～西蝦夷地巡視（天塩）
- 第6回 安政5（1858）年[41才]～枝幸・宗谷巡視

松浦は6回の探検を通し、蝦夷地の第一級の知識人として認められたが、同時に和人のアイヌ人に対する苛酷な政策からの救済を訴えた。『日数へし極もしれて蝦夷人の言も聞くまでに成けり』

※ 後記「錦絵」の項参照

註2. 明治2（1869）年7月8日に「道名の義についての意見書」を開拓使に提出したが、それによると6名を候補としたが、アイヌの古名などの点から、北加伊道を最有力候補とした。「夷人自呼其国日加伊、蓋其地名加伊、其人髪長～」加伊を海とした事は偶然にも松浦の号と一致した。

「11国86郡」の国名・郡名については、「松前記」「斉明記」「統日本記」等を参考とし和音としたという。又、北蝦夷地の「様太」については、樺の太木が多い。との胆由からという。その結果9月27日には蝦夷地を北海道と改名する公布が下記のように発せられた。

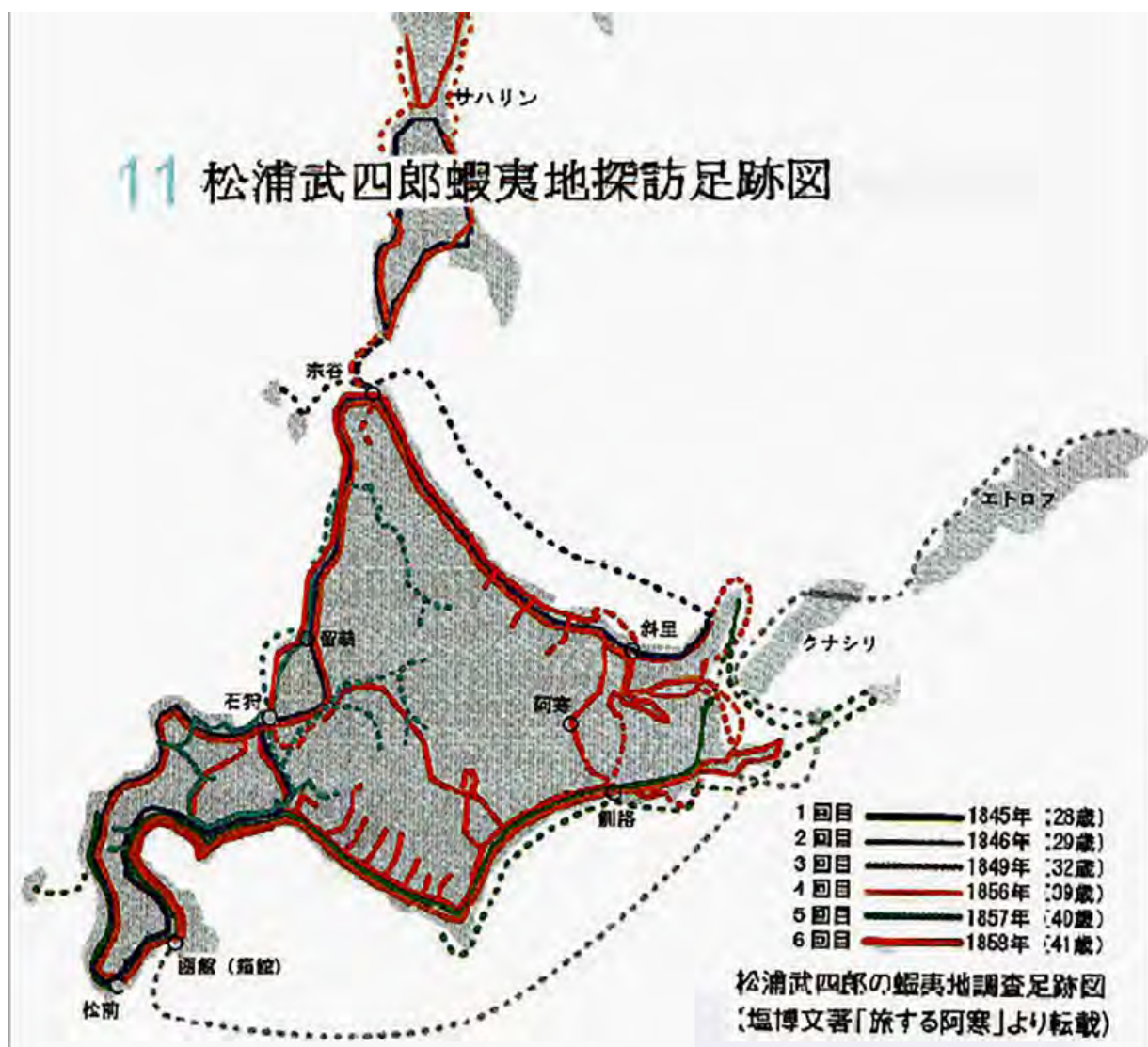
触　　書

此度、蝦夷地一円、北海道ト称シ、拾壹ヶ国二分チ、開拓使相建、総テ御政令・御擧行相成候条・此段相達候事、二月二十四日　開拓使

註3. 9. 本願寺道路の開削と修復 を参照

註4. 松浦武四郎蝦夷地探検中で、札幌を本府とする着想は第4回探検の5月6日頃の事であり、本願寺道路の経路については第5回探検の5月から8月頃にかけてと考えられる。 下記に留意

※ 第4回からは、幕府 雇 となっている事に留意
札幌本府への新道開削の経路については、第5回探検の2月から3月頃の残雪期である、38ページの「松浦武四郎の探查ルート想定図」参照



7. 現如上人の出立（北上）

明治2(1869)年 前記のように北海道の開拓等を願い出て、同年9月6日下記のような御沙汰沙汰書が弁官より下付された。

御 沙 汰 書

東本願寺 光勝

今般北海道新道切立 願之通被仰付候二付 開拓使之指揮ヲ受ケ
可致尽力旨御沙汰候事

また、本山が以後直接的に指揮を受ける開拓使に対しても8月28日付で下命されている。

○ 公 達

〔2年〕八月

今般本願寺東門主ヨリ北海道新道切開キノ義且有志ノ僧徒新開村
落へ移住人民教諭為致度段願ノ通被差許萬事其使へ可伺出旨申渡
候条此段相達候事

また、本山は9月17日開拓使に対して、移民奨励のため各機関にはたらしめかけるように願書を提出した。

今般蝦夷地開墾の儀、願の通り御許容相成、深奉畏入候、誠に当
御時勢、万分一も為報国尽力可仕様、差当東海道、東山道、北陸
道等の門徒へ臣光瑩出向、飽まで悉誘仕、悦服為致、彼地へ移住
聊なりとも速に奉奏実効素心御座候、然る素々無禄の事ゆへ、右
移住の人民は勸皆府、藩、県へ差支無之様之御沙汰被下度、此段
早急御聞済之程、宜しく御執成奉願上候

以上

九月

本願寺

新

前大僧正

光瑩

開拓使

御中

前記の書面によって太政官より当時の行政単位である府・藩・県に対して下記のような布告が下達された。

今般東本願寺、北海道新道切開、且門徒教諭願之通り被・仰付候
に付ては、東海、東山、北陸三道の門徒移住等の願出候はば、府
藩、県に於て、差支無之者は可差許候事

九月

太 政 官

ここで北海道開拓に対する書類上の準備は整ったが、本山での最高責任者である法主 21 世・嚴如上人（大谷光勝〈こうしょう〉・以下嚴如〈ごんにょ〉上人と記す）は、54 歳と当時としては老境であり且つ法務多忙なので、当時 19 歳の法嗣・現如上人（大谷光瑩〈こうえい〉・以下現如〈げんにょ〉上人と記す）を法主代行者とする事が決定した。

現如上人は真宗大谷派 22 世で、嚴如上人の第 5 子（嘉永 5（1852）年）として、誕生。上子は次々に若死し、長男同様に育てられた。

幼名は光養丸 2 歳で得度・号は愚邸・仏名は莊嚴院という。

文久 3（1863）年 大僧正となり、明治維新に際しては父・嚴如上人と共に祖父・山階宮（山階宮一世晃親王と嚴如上人は義兄）を通し、前記の誓約書を提出し、鳥羽・伏見の戦に際しては、軍費及び軍糧 245,000 両を献納したりして忠誠心を示している。

明治 3（1870）年 19 歳で父・嚴如上人の代行として、以下に記すよう朝命による北海道開拓、20 歳にてインドからヨーロッパにかけての視察と研修に余念がなかった。

明治 22（1884）年従三位に叙せられ、1 ヶ月後に東本願寺第 22 世の法灯を（38 歳で）継承した。

明治 28（1895）年には蛤御門の変で類焼した両堂を完成させた。

翌年 6 月には伯爵に叙せられる。

明治 30（1897）年には議局制（代議員制度）を施行するなど、教団・教学の近代化に貢献した。

明治 41（1908）年に第 2 子・彰如上人（大谷光満・34 歳）に法灯をゆづる。

大正 12（1923）年 没・行年 72 歳。



本山（東本願寺）全景

T 15 年 4 月

現如上人は本山旧家老・松井逝水元貞を開拓主任とし、以下 5 名を調査隊として北海道に派遣した。一行は明治 2（1869）年 9 月 20 日に出発し翌年 2 月 10 日に帰山し報告を行った。松井等の現地踏査によって作製された、新道開削ルート **2**。道場建立予定地は、前編での松浦開拓判官の助言に依るところが非常に多かったであろう。助言を裏付ける資料として、真宗大谷派北海道教務所の「東本願寺・北海道開教百年史」112 頁と、函館大谷高校宗教部の「東本願寺北海道開教史」65 頁のそれぞれの“北海道地図”があり、同宗教部の“北海道十二ヶ国八十六郡明細図”の説明文からも、松浦家が檀門徒であった事など、当時種々の資料の提供や助言のあった事は明確である。

その結果として本山は、明治3(1870)年1月17日 太政官に対し、道場建立予定地16ヶ所を出願したが、認可されたのは漁場などでよく認識されていた。○札幌郡本府 ○寿都郡 ○古平郡 ○余市郡 ○浦河郡 ○幌泉郡の地に1ヶ寺のみ建立を認可するという厳しい回答であった。理由は種々考えられるが、太政官に伝わる^{※3}祭政一致の政体によると考えるのが妥当であろう。

厳如上人一行は明治3(1870)年2月10日 出立と決定され、随行者は前記・樋口津右衛門師(随行者・宿割係)の日誌によれば、

御供方役割			
○開拓係	品川・心海寺	○御船係	園林坊
○御休泊係	越 ^マ 后・福順寺、同国・光伝寺		
○御宿割前日	柴田八木右エ門・樋口津右エ門		
○御当日御列	大長持弐棹	○寄領	大井権蔵
○御勅書奉供小率	三人	○御本尊御唐櫃小率	三人
○御真影御唐櫃小率	三人	○御守護役巡讃	越 ^マ 后・浄興寺
○宰制御先馬	下間頼世法眼	○御打物持	山岡拾松
○御太刀持	稲波豊雄	○御輿	轎長老人 轎夫六人
	略		略
○宰領	中野友右衛門	○鎗頭	北村九米蔵
総人数上下合シテ百拾人余			

の発令があり行程中(=旅中)の心得なる訓戒が示された。随行員は各署名したと思われる。

2月10日午前8時(前記 樋口津右衛門日誌)本山表玄関より出達され、一行110余名の先頭には「勅書 本願寺東新門主」の木札をかがけ、寛永の軍役令でいう5,000石の大身旗本並での供行列である。(5,000石は102名)

1 新道開削 2 移民奨励 3 教化普及

を目的に、浄財を募り得度式を行う等、末寺大檀家宅と法縁を結ぶ日々であった。行程は・北陸道・羽州街道と進んだが、5月25日尾花沢(山形県尾花沢市)の通念寺で秋田藩史(通称・久保田藩知事・佐竹義堯)^{※4}2名が、現如上人宛の書状を示した。その書状には

『藩内の通行は早急に願いたい。また、基金や移民に関する勧誘は御遠慮願いたい。行列に対しての妨害や迫害があっても当藩としては、一切責任はとれないので、できうれば、行程の変更をされては。』
との内容であった。 ※編者強調

以上のような強硬な理由の背景としては、

1. 戊辰の役においての会津藩討伐に対する膨大な出費。
2. 昨年来の飢饉での疲弊。
3. 神道思想による排仏主義。

(平田篤鳳の出身地＝21 頁の道場建立許可を参照。註 3) 等が考えられる。

以上の状況に対し、現如上人一行は前後策として、太平洋沿岸コースも考えたが、日数や費用の面で到底無理との判断のもとに、日本海を北上する事とし羽州浜街追を本荘へと目ざした。途中 6 月 5 日再び秋田藩史の楠永太郎等の騎馬 5・6 騎に妨害された。楠永等の傲慢無礼な態度に業を煮やした牽制・下間法眼頼世が抜刀しようとした時に現如上人は、

「信ぜずば とてものことに謗るべし
汚れぬものは洗はれもせず」

と口ずさまれた。

この虚をついた行動により双方平静となり、楠永等は『是非とも別途を』との念を押し引き返した。

この再度妨害された場所は現在の“秋田県由利郡西目町海士剥字御月森 1 番 171 号”で碑の建立されている所は町有地となっている。碑の東側は畑となっており、碑の南側の耕作者の佐々木ノブ子さん(72 歳・御月森 1 番 205 号)は、

「此の碑は“吉次郎ジッコの墓”といって、毎年 7 月 5 日に本荘市の超光寺の住持・六平さんが来て、附近の年寄男女 30 人程集まり法要をしています。此の辺りの人は皆んな超光寺の檀家ですよ。」 S 62. 7. 28 談



現如上人錫之跡
本荘・善応寺に向う途中再度秋田藩史に進路妨害された海士剥部落の地。
(現・由利郡西目町海士剥字御月森 S 67. 7. 28)

と話していた。部落民全体が超光寺の檀家と聞いていたが大抵の家は“佐々木”姓の標札。北海道のような家号はみあたらない。

さて、現如上人一行は良策のないまま 善光寺・超光寺・光誓寺と^{※5}秋田藩史の目を掠めて所在を点々としているうち、^{※6}本荘城下の子吉川口の古雪港に碇泊中の北海道帰りの 700 石積、加賀国小松の下郷屋長兵衛の和船「金剛丸」船頭で碑枷東派の信徒である文蔵が。自己の責任のもとに、現如上人一行を北海道江差港に渡海事を光誓寺で献言した。

現在の状況写真





現如上人遭雷遺跡

これといった良策のないまま6/5よりの3日間善応寺・超光寺・広誓寺と秋田藩との関係で宿舎をかえた。写真は善応寺山門。(本荘市古雪140番地) S 62.7.29

一行はその好意を受け金剛丸に6日上船し、風待ちの末3日後の12日に出航し、途中台風に遭遇し、21日に江差港ならぬ陸奥国深浦港に入港した。

※ 編者追記 15日に台風に遭遇し、6日間も漂流して深浦港まで戻ってしまった。 65頁 工程図 参照

深浦港は江戸期における津軽四大港で北前船で繁栄したが明治中期より衰退した。港である。



本荘城下の古雪港

城下を流れる子古川口の古雪港(秋田県南部漁港)に停泊中の蝦夷(北海道)帰りの金剛丸の船頭・和気屋文蔵の好意により6/12本荘藩古雪港を出港。 62.7.29

現在は林業の町で現在は十二湖でも有名である。

この船旅中に本山の堂衆の一人・泉竜寺・祐之(樋口津右衛門日誌では一老一等衆篤〜泉坊殿)が出達以来の心労や激務・老齡の為に医師の手当薬効のかいなく、現如上人の心配のうちに弘前の正蓮寺で8月6日67歳の生涯を終えた。師の墓は正蓮寺住職 谷山師によって立派に維持されている。



明治年間之深浦

途中台風の為北海道江差港には入港できず陸奥国(津軽)に6/20入港した。津軽藩四大港の一つ。町の80%は国有林。深浦町観光パンフ

師の話しでは泉坊の死に際して、

一般的には、正蓮寺檀家総代・山田儀八宅にて死去したと伝えられてはいるが、私の母が30歳頃・此の寺で泉老師の看病をし、その最期をみとった。と話したのを何度か聞いた。

S 62.7.27 談



泉龍寺祐之の墓碑

“法名権律師泉坊釈祐之”と記され右面には“新御門主現如上人御下向御供一老職泉龍寺 寄付人・山田義八・左面には明治3年8月6日と記されている。
弘前市新寺町・正蓮寺
S 62.7.27

泉老師の墓は資料中の檀家総代・山田氏により本堂東側に建立されている。

厳如上人は泉老師に対し“法名”と“七条袈裟”を下賜しその労を謝した。（自坊は 京都・東洞院通二条下ル・泉龍寺）

現如上人一行は深浦より鰺ヶ沢街道経由で、弘前に入り 28 日には青森に到着した。当時の青森は津軽四浦屈指の繁栄を示す良港で、東廻船の起点でもあり江戸廻米の積出港として発展したが、当時としては函館との間には定期の述絡船等は無かった。そこで現如上人一行は先発の使者として、手塚繁三郎（勘定方＝樋口右衛門日誌）を派遣し函館在住の檀信徒に、一行 100 余名の上座船の手配を命じた。上座船は開拓使（二代目長官・東久世通禧）が福岡藩から借上げた軍艦“環瀛丸”が 7 月 4 日に、又手塚繁三郎等の最新鋭蒸気船“庚午丸”が翌々日の 6 日入港した。

翌 7 日二隻の艦に分乗した現如上人一行は夕刻函館に上陸し、ただちに管刹に人山した。

※ 編者追記 28 日に青森に着いてから 5 日まで、船待ちしている。65 頁 工程図 参照

- 註 1. 弁官（＝弁事ともいい、太政官の書類の出納を司どる。）
- 註 2. 市立函館図書館には“北海道開教百年史”と同じ、明治 3 年庚午 2 発行の地図がある。淳風坊という人物が種々調査し記入したもの。
- 註 3. 旧来の神仏混合を禁じ神道を国教とした。従って全国的に廃仏希釈の風潮が強く現如上人一行も松本藩・秋田藩等により種々の迫害を受けた。なお明治 3 (1870) 年神社制度や祝祭日が制定された。
- 註 4. 正使・黒沢一蔵、副使・高垣第八郎 秋田藩は久保田（現・秋田市）に居城があったので通称・久保田藩という。明治酢新に際しては、佐幕色の強い東北諸藩中朝廷側に立った。
- 註 5. 浄専寺の、記録には、
（秋田県由利郡象紺町 2-56、真宗大谷派・浄専寺）
- 註 6. 本荘藩（＝本庄藩・藩主・六郷政鑑）は、秋田藩と共に、明治 1 年（1868）年 7 月に“菊章天旗”を授受している。

現如上人 北海道開拓使

- 明治三年六月四日浄専寺一泊下妻法眼、用人宇野三右エ門・松井主水、等上下五十余人。
- 三崎の麓、小砂川村・関村まで、檀中、村役人奉迎。
- 御門主は浄専寺新座敷上段侍史は次の間、隨行長以下は庫裡。
- 家老下妻法眼と供廻りは、国松六郎左エ門、用人宇野三右エ門上下は、須田安右エ門。
- 宰領係松井主水は、藤田玄智、
その他は各所に分宿、乗馬五頭、助九郎預かる。

(○当年代の私の父は 10 歳でした。)



札幌別院について

<http://www.ohigashi.or.jp/betsuin.html>

現在の札幌別院は、明治政府から下賜された地に、東本願寺の管刹（寺）を建立したのが始まりで、後に明治9年札幌別院と改められました。それ以後、北海道に於ける教化伝道の拠点となって活動し今日に至っております。

長い歳月を経た今日、札幌市は高層ビルが建ち並び、180万の人口を擁する日本でも代表的な大都市に発展致しました。そのような時代の変遷、街並みの変貌を一世紀以上にわたり、静かに見つめてきた札幌別院は、唯一街の証人ともいえます。境内に根をしっかりと下ろした銀杏や柏の大樹、風雪に耐えに耐えてきた御堂等、いかにも先人のご苦勞の歴史を物語ってくれています。鐘楼の梵鐘の音は、今日の我々に、語り部として静かに響きを伝えてくれます。

別院 III から⇒



8. 現如上人の管刹地所検分

現如上人一行の旅程は2月10日本山を出立してから7月7日函館管刹入まで5ヶ月間を費したのだが、翌日より精力的な行動を展開している。

まず旧奉行所に開設されている開拓使函館出張所に第2代長官・東久世通禧を訪問し、北海道の開拓に対しての開拓使の援助等を依頼した。現如上人の東久世長官訪問に関しては、“東久世長官日録抄”には

七月八日本願寺（昨七日光瑩到着）入来、新道開設之件申談。
（十一日本願寺小樽へ発足）

犀川会資料

とのみ記されて、詳細は不明である。しかし、開拓は道路開削から考えるならば、明治2(1869)年6月10日 蝦夷地に於ける知識人としての松浦武四郎から(開拓御用掛として、蝦夷地に関する新道開削の建白書が提出されているし、また後日(=明治4(1871)年7月)、参議・副島等と共に定山溪から有珠までの本願寺道路の視察を考えると、松浦の提言が採用されていると考えられる。

東久世通禧 天保4(1833)年11月21日～明治
45(1924)年1月4日 行年・80歳

公卿 東久世家9代、幼名、保丸、号、竹亭・古帆軒といい、9歳で出仕し近習・侍従・国事参政を歴任した。8月18日の政変で三条実美等と共に長州におちたが、王政復古と共に復歸し、参与・軍事参謀・外国事務、兵倉・横浜の各裁判所(行政機関で幕府直轄地に設置)総督・神奈川県知事を歴任し困難な外交問題を解決した。

明治2(1869)年8月25日第2代長官に任ぜられるや、9月30日開拓判官 島義勇・岡本監輔・松本十郎と東京で募集した移民200余名と共に、英船テールス号で函館に赴任、奉行所に開拓使出張所を開設した。

その後政策面では、本願寺街道・ガルトネル問題に敏腕を発揮した。後、札幌に開拓使本庁の建設を決するが、明治4(1871)年10月15日 侍従長として転出。以後、元老院・貴族院・枢密院の各副議長を歴任する。明治7(1884)年伯爵。明治44(1911)年 正二位。和歌、詩、書画を能くした。

前述の東久世長官訪問に際して、主眼である新道開鑿のルートの他にも、もちろん ○寺院建立の地 ○農民移住について 詳細な打ち合せがなされた事は推察される。



函館滞在の3日間の間に、一行を下記の2班に大別した。

1. 新道開削班～74名
2. 教化普及班～27名（目的は札幌管刹地検分）

教化普及班は現如上人を長として石狩札幌郡の本府をめざし、7月11日に函館管刹を出立した。石狩の地（札幌）が北海道の中心地となるべき事は、文化4(1807)年の近藤重蔵や安政4(1857)年松浦武四郎が力説していた地である。当時は荒地の原野で明治2(1869)年の戸数2戸、人口は7名という記録がある。



北海道十二カ国八十六郡明細図

北大北方資料室蔵 図類454

現如上人一行は同年9月に東京甘泉堂より発行された『現如上人北海道巡教錦絵』20枚続き18枚のルート通り札幌本府に向かい同年7月24日夕刻到着し、新政府下賜地^{※2}1000坪を検分し『勅賜東本願寺管刹地所』（現 真宗大谷派札幌分別院住所）なる木柱を建てた。其の日は在札幌官史の最高責任者である大主典（正七位・十一等官）^{※3}十文寺龍助（在札・明治2年8月～明治5年11月）の役宅を宿舎として一夜をすごしている。

高見澤権之承（開拓使営繕局雇＝手代・東派檀家）日記には、次のように記されている。 ※ 箱館からの行程（宿泊場所）は年表116.117頁を参照

また、平成18年に北海道道路史調査会 三浦 宏 編「東本願寺街道・定山溪国道物語」が発刊されております。

明治三年午ノ七月二十四日申ノ上刻東本願寺様、十文字大主典様御役宅迄御当着相成。御手当、午ノ二十三才に被為渡候由。御法名現如上人。御上下二十七人也。御本府御出立、小樽湊工御立越。七月二十五日

犀川会資

翌日は例の如くに得度式が行われている。札幌出立は得度式を終了した25日 函館郊外大野村までは大体同じコースで、往路に比べ3日間早くなっている。

8月3日大野村・大郷寺に宿泊し、翌4日は鶉山道（＝大野側の呼称で江差山道・国泊227号線）改修状況の視察と檀信徒の多い江差・松前・泉沢等いわゆる江差・福山街道の教化普及をめざした。函館管刹への帰山は8月13日であった。帰山してからの現如上人は18日まで滞在したが○新道開削○寺院建立について重臣らとの協議に朋け暮れした。離道は8月19日早朝『八幡丸』に乗船し昼食前に陸奥国佐井港に入津。途中『象潟』と同じ景勝地『松島』を見学し、9月18日 夕刻東京浅草本願寺に帰山した。

この約7ヶ月にわたる大旅行の末、一応目的は達せられ8月21日参内し新道開削に関する首尾が報告された。また、この壮挙について、先に記した“18組の錦絵”が甘泉堂より発行された。絵師は一曜斎国輝・一曜斎永躍・一曜斎広重等である。この完本は所々に保存展示されているが、関係機関としては、真宗大谷派札幌別院、同北海道教務所・北海道大学北方資料室・市立函館図書館などである。

また、同6枚組の錦絵は大型行事のたびに真宗大谷派札幌別院や同教務所から発行され昭和44年の札幌別院創立百年まで^{※6}幾度発行されたのだろうか。

註1. 別院の呼称は明治9年より、以前は管刹、江戸期は御坊と呼んでいた。また札幌の縄＝の糸扁は明治初期の1桁代まで使用されていたようだ。

柱2. 札幌管刹所の敷地面積は、明治3年1000坪ずつ二度、明治4年1600坪で、計3600坪となる。

屑川会資料 東久世開拓長官日録抄 明治4辛未年6月27日の項には、

東本願寺へ地処三千六百坪引渡。

柱3. 十文寺龍助文化9(1812)年～明治15(1882)年、行年70歳

伊達の支藩涌谷藩士・十文字好之の三男(末子)。名は好古・字は士訓・栗軒。藩校・月将館や昌平黉に学ぶ。1869年閏8月“開拓大主典”となるが明治4(1871)年7月19日退官。明治15年出生地にてコレラで死去。

柱4. 高見沢灌之承文化11(1814)年～明治13(1880)年、行年67歳

信濃国小諸(長野建小諸市)生まれ。50歳前後(維新前)に箱館で港湾業に従事。明治2(1869)年、銭函で開拓使の雇(手代)として建築、土木業に従事。明治7(1875)年頃退職し札幌で余生を送る。

柱5. 秋田県由利郡(25頁の7. 現如上人の北上の註5)

松島と同じは景勝地。〔芭蕉の句「松島は笑ふが如く、象潟は恨古が如し」(三省堂地名辞典)〕

文化1(1804)年の地震で「八十八瀉九十九島」は隆起消失した。

註6. 著者の手元には、明治3年～北海道新道切開一大錦版・昭和12年～全6組-B5版・昭和44年～札幌別院建立百年記念一大錦版と葉書版がある。他に大谷大学には昭和4年4月～全組一大錦版、七飯町立大沼中学校高木教諭のもとには北海道新道切開一年不詳葉書版が保存されている。

9. 本願寺道路の開削と修復

現如上人一行は札幌管刹地所検分と鶯山道検分及び江差・松前・泉沢沢方面の布教強化を行い 8 月 13 日帰山 8 月 19 日離道したが、その間、○新道開削及び道場の建立等について種々協議検討した事と推察される。

此の書では、道路関係について考えていくものである。開削・改修部分は下記の通りであり、現如上人随員の 3/4 にあたる 74 名が主力として任命されていた。

- a、軍 川 ～ 砂 原 18 km 新道
- b、伊 達 ～ 平 岸 103 km ”
- c、山 鼻 ～ 八垂別 6 km ”
- d、市 渡 ～ 江 差 76 km 改修

以上の 4 ルートである。

此で本山が新政府に提出した明治 2 (1869) 年 6 月 5 日の “願書” を、記してみよう。要旨は何度も記した ○新道開削 ○教化普及 ○移民奨励の 3 点である。

今般蝦夷地御開拓の御主意御下問有之候由奉拝承候、然る処私門末の儀は從來松前並に蝦夷地に五カ寺掛所取立出稼の人数是までも教導仕居候処日増歸依の有之候就ては蝦夷地の儀は周囲のみ通路有之山中一切道筋無之。何分不自由之地に御座候間為冥加如何様の御奉公も可仕候得共差当り新道切開石狩久摺十勝之深山も追々四通八通の域に相成候様致し且有志の輩は所々新開村落移住為致彼地土人は不及申諸方より出稼之者も異教に流れ不申様仕報御国恩度奉存候

以上

巳六月五日

本願寺東門主使 下間大蔵卿
弁事 御役所

と記されており、同年 9 月 6 日太政官弁官より “御沙汰書” が公布されたのは “7. 現如上人の出立” の最初に記した通り、最大の目的は本府（開拓使本庁舎所在地＝札幌）までの新道消削にある。また “5. 欧州人の来航と幕府の直轄化” で記した道路は、融雪や洪水 戊辰・己巳の戦争の後によって相当に荒廃したと考えられる

a 砂原から軍川までの新道 18Km

当時北海道の中心地的性格を有していた函館から、本府建設地までのコースは小題の逆である（小題は開削始点より）軍川から砂原までであるが、責任者として節制・宇野三右衛門、開拓掛として遠州金谷・西照寺が任命された。



軍川稲荷神社

S 56. 8

南入口に位置し軍川新道に接続している。

コース自体は安政 3 (1856) 年 水戸藩士であり、^{※1}メナ：コタン（現・函館市亀尾町）を自費開拓した、

庵原 菡 斎の切開した“軍川新道”と接続するものであった。本願寺道路は明治 3 (1870) 年 7 月 12 日 砂原村（現・砂原町彦濶）より軍川（現・七飯町軍川）間で、当時の状況は

～翌日砂原で人足十数人を傭入れ、切開きを取掛った。皆は^{※3}狼の為に鉄砲を離さずに仕事をしてゐた。切り開いた要所には「東本願寺切開新道」若くは「勅賜東本願寺管刹地所」の標柱を数本立て上進んだ。

北海道新聞第 23 号

とあり、昼でも深い樹海で、狼の害にも備えて鉄砲を離さず ～その費用は、1600 両を要した、など、現今では想像を越える状態であったが、工期は意外に早く 7 月 20 日に完成したとある。

しかし残念な事に、後述するが、昭和 4 年の駒ヶ岳の大噴火によって主に砂原・鹿部側（東側）は全て埋没した。

地元の青木老人（砂原町彦濶・65 歳）は少年期を回想して、



彦 濶（砂原）

北入口に位置し付近は分譲化が進み消滅寸前。

S 55. 9

昔、小さい頃は鹿部に行くのには、良くこの本願寺道路を通ったものです。また、草刈もやらされました。

昭和 56 年 7 月 談話

また、岩井老人（砂原町彦澗、73 歳）は、

当時としては、手入れの行き届いた道路で、馬に荷物を乗せて鹿部や軍川方面に行ったものです。とにかく多くの人々が利用していました。

昭和 56 年 7 月 談話

と話していた。

この埋没した本願寺道路も人々の必要性のもとに再現され、一部は町道として利用されている。

再視コース（当時の）は下記の通り

彦澗～マサゴ坂～短角牧場入口～チャプチャプ川（明神川源流）～
自衛隊演習場～留ノ湯とユートピア大沼中間～銚子口駅前～旧日本硫鉄
工場～ウワ通～軍川稲荷神社

コース全般の景観や特色は（二回の合宿調査は昭和 56. 59 年）7 月という季節的制約はあるが、土壌は全て“火山灰”地である。彦澗付近は分譲区画化され当時の面影は全くない。砂原岳東側付近までは雑木林、自衛隊演習場付近は、火山灰地が露出しており“モウセン苔”“イワ桔梗”時には“シラタマ”等の高山性植物が繁茂している。以後、小田急の分譲地付近までは、実生の“赤松”“カラ松”等が内浦湾や東円山に映え、南西に位置する大沼ともマッチして見事な景観である。レークホテルや銚子口駅付近までは、炭坑・造船業の盛況時の名残りの“カラ松”林が続いている。しかし分譲化も目立ち、秋にはアミタケ科の“アワタケ”とりで賑わう場所でもある。



第 2 回 合 宿 調 査

東円山附近

砂原町文化財調査委員と本校宗教部員

昭和 59. 7. 29

旧本通り（ウワ通り＝上の道路）は本願寺道路で、住民よりウワどうりと呼ばれ生活道路として活用されている。幅員 6～8m である。

当時の面影を残す建造物は、東起点の^{※5}軍川稲荷神社とその北側の“庚神塚”“山の神”の計 4 基だけであろう。



東円山付近（駒ヶ岳）
昭和4年の噴火で消滅したが復元された。



古道の名残を残す庚神塚

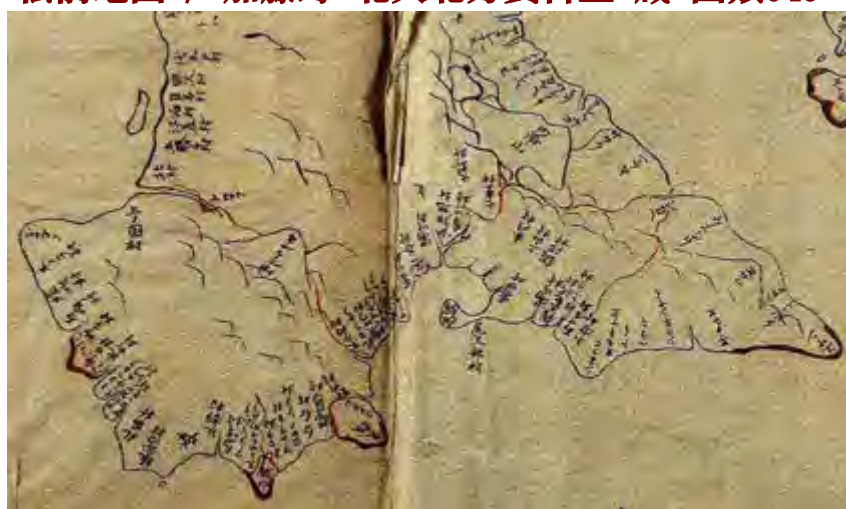
S 58. 4. 29

軍川稲荷神社北側で本校宗教部員と
高木・石本・藤野・梅田・市川の各氏。

松前地図 / 加藤寿 北大北方資料室 蔵 図類645

※ 編者追記

右の図は、加藤肩吾
自筆の「松前蝦夷図」
で寛政中期頃成立の
もので、上ノ国方面
シカベ・サワラ への
道筋が見えます。



↓この図は、明治27年の「北海道 地勢要覧図」である。



A. 軍川新道 12 Km

このルートは 国道 5 号線^{※6}「藤城地蔵堂」（＝古より安産・子安地蔵として地元民の信仰は厚い）より藤城川に沿って、七飯林道東起点あたりまでをいう。

大人の歩行では下りだけのコースでも 75 分程。北海道史には、

～安政三年箱館奉行竹内下野守巡回シテ軍川ニ至リ此事情ヲ聞キ亀尾在住ノ土庵原曲齊ニ命ジテ ～ 村民ヲ雇入レ奮励シテ藤山軍川間ノ山道ヲ ～ 里程ヲ短縮スルコト約三里ナリ是ニ由テ軍川ノ人民ハ函館ヘ日歸リヲ為スヲ得、又大川、七重、藤山、峠下諸村ノ鹿部ヘ日歸リシテ生魚等ヲ買出シ来ルヲ得ルニ至リシ等大ニ交通ノ便ヲ増シタリ。

明治 42 年 4 月 河野常吉

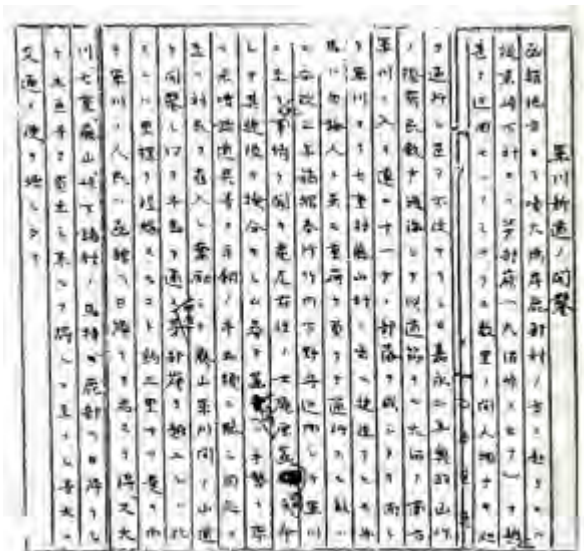
と、記されている。

コースは前述のように登り坂で、道幅は全段に 3～5 m で、その昔に馬車も行き来した面影が現在でも残っている。

また、地元の人々が “七飯石” と呼んでいる。“石”（戦前までは主に墓石に使用）が道の両側にあり大型の盤の多い所から、弁天台場や五稜郭の石垣にも使用されたとの説もある。

植生は “カラ松” “イタヤ” “サクラ” が多く珍しい植物では “サイハンラン” “サルメンエピネ” など自生している。

※ これで道路は函館～桔梗（真宗大谷派の開村）～七飯～軍川～砂原と開通される。



明治 42 年 4 月 北海道道路史

（河野常吉 著）森町・中村正勝氏 蔵

註 1, 汐泊川下流で目名といい、銭亀の尾の部分にあたるので現町名 “亀尾” と命名された。

註 2, 寛政 6 (1794) ～安政 5 (1858) 年 三戸溝土で幕府に仕える。

安政 1 (1854) 年 子息 勇三郎が箱館奉行配下となったので、竹内下野守に同行しメナコクンに入植し成功し、御手作場となる、現・庵原町は彼功を称えたもの。亀尾町と共に昭和 14 年 4 月 函館市に合併。

B 本願寺街道の開削 103 Km

砂原・軍川の18Km次の開削が俗に言う“本願寺街道”**現・観光国道230号線の原型である。**

本府札幌までの道路は砂原から海路を室蘭か伊達に上陸し北上するコースで、先に記したように、文化4年の近藤重蔵や安政4年の本島と関係深い松浦武四郎が考えていたものである。特に松浦武四郎は真宗の家であり、本山より先発隊として派遣された松井逝水との接触が決定的となったと考える。

別名“有珠新道”とか“虻田街道”とか呼称されている。

このコースが史書に記されるのは、“日本書記”の齊明天皇の頃・阿部比羅夫の蝦夷討伐であり、現・虻田郡倶知安町の比羅夫駅や比羅夫温泉として名前は残っているが、比羅夫の政庁所在地は別にしても、先の2名の他には、木材商で有名な飛騨屋久兵衛が宝暦5(1755)年蝦夷松を求めて同じようなコースを探索したと考える。



此の本願寺コースは、“東本願寺北海道開教百年史”によれば、

～さて尾去別からは今度新たに東本願寺が内陸に向って新道を切開いたのであるが、新道は長流川に沿って上り、有珠山及び洞爺湖の東側を迂回し、ソウベツ、ニポッキナイ、ヌキベツ、シリベツ、カシエブ、ムイナイ、シケレベツ、定山溪に出て、**今年**は豊平川に沿うて下り、簾舞、平岸を経て札幌に至るもので、平岸と札幌の間には道路が当時出来ていたから、東本願寺が切開いたのは尾去別より平岸に至る二十六里十町五間〔103 km〕であった。

この工事は宇野三右衛門道隆（節制馬）、尾崎半左衛門信盛（納戸会計司馬）が総指揮者となり三河の大浜和助を測量方、村上義有を会計方とした。（ ）は樋口津右衛門 書

と記されている。現代の市町村名では、室蘭から伊達迄は戊辰、己巳の戦役等で荒廃していたとしても補修程度で良いとして伊達市長和町から長流別を北上し、壮瞥・洞爺湖東岸を北上し貫氣別川沿・留寿都・尻別川・喜茂別町・**京極町**・中山峠・無意根山沿・豊平川上流・薄別・定山溪・簾舞・平岸町までの103 Kmである。

道路の規模については、先の東本願寺開教百年史には

～かくて伐木三間幅、その中の九尺幅を道路とした。橋梁を架すること百十三箇所、谷間に板敷をなすこと十七箇所、人夫賃金は笹刈一人日給一分、伐木、架橋等は特別割増。延人員五万五千余人^{※2} 所要経費一万八千〇五十七両余、工事が困難で一日一町(100 m)位しか進まぬ事もあり、一年有余の日子を要して明治四年七月工事は完了した。～

とあり、幅 5,4 m にわたり樹木を伐採し、中央に 2.7m の道をつけた当時としては、北海道における東海道第 1 級国道という事になるであろうか。

※編者追記 下記の石碑(旧道碑)は設置位置として疑問

(開削道は、この辺ではなくずっと北寄りの無意根側にある)



現如上人像
国道 230 号 中山峠 令和元年編者撮影



↑上図は、[がいほつぐらふ](http://www.gaiatsu.com) HPから

台座の碑文は81頁 隣の由来碑文は80頁に記載

しかし、この 1 級国道の総責任者である字野及び尾崎両氏の最も困難を感じたのは、労賃者の問題であっただろう。当時伊達藩の支藩である亘理藩(二万四千石が奥羽越列藩同盟敗者の責任で五十八石に減封)

7,854 人の扶養義務の為 現・伊達市に第 1 回 明治 3(1870)年 4 月 7 日に約 220 余名(計 9 回に 2,700 余名)が移住し生活に困難を期していたので、壮健な者 50 名

根室管内和田村の職人を中心とした人々 50 名、そしてこの地方のアイヌの人々が動員され、リキリウタとヲヤワツカの 2 人が頭として多数のアイヌを採用したらしいと考える。特に彼等の地理的知識が大いに役立ったことであろう事は、工期が約一年余という期間にもあらわれているであろう。

完成後、さっそく通交した著名人がいる。参議・“副島種臣”と開拓2代長官“東久世通禧”であり、案内役は、先の 高見澤日記の著者“高見澤権之丞”である、日記によれば、

- 一、副島参議様、明治四年末ノ七月九日昼七ツ時御本府ニ御到着ニ相成。
- 二、副島参議様、東久世此長官様御家来四人宛都合八人也。

明治四硝末ノ七月十四日御本府御出立ニ相成、有珠新道御検分。

右ニ付桃之丞義御先立被仰付。モロラン迄御供致。人足二十人、馬二十足、外二士人三人、牧馬ヨリ馬追一人。右ノ御賄共被仰付。

万事手配致、同十四ノ夜湯本定山エ御泊。

同十五日カシツフ御泊り。同十六日沼ノ夜トウヤ沼土人小屋ニ御泊り。

同十七日御昼休モンベツ藤五郎様御役所ニテ御休。

同夜モロランエ御到着、御本陣ニ御泊り。同十八ノ朝五ツ時御船エ御移り相成、御順風ニテ御出帆ニ相成。

桃之丞義ハ右ムロラン十八日ハツ時迄残、御荷物手配致、是ヨリ幌別ニテ同十九ノ夜夕仏泊。是ヨリ二十日夜シママツエ泊。

モロランヨリ本府迄到着ス。但昼ハツ半時ノ着。

層川会館資料

つまり、7月14日本府を出発し、当夜は定山禅師宅に泊り、15日にはカシフ（京極町）、16日トウヤ（洞爺湖）17日 モロラン（室蘭、18日の朝（軍艦日進で東京に向かった。高見澤の帰路についても別に問題はないので、当時の利用者の標準的コースであり日程であったであろう。

しかし、この本願寺街道も明治5(1872)3月18日から官費による

“札幌本道”（＝日本最初の長距離馬車道）の開削が行なわれた。

札幌本道開削の最大理由は、明治3(1870)年開拓次官・黒田清隆の欧米式技術の導入による北海道の開拓の建議が、政府に採用され、米人・ワーフィールド等により、欧米式に馬車を交通手段とする道路が計画され、平坦の多いコース。つまり函館郊外一本木（現・若松町）～森——^{※4}室蘭～苫小牧～千歳～札幌の地が採用された。

しかし、山中峠以南の各町村の開拓入植に際しては、本願寺街道は十二分に活用された事は疑いを抱かない。

また、北海道通史の著者、梅木通徳によれば、下記ように記されている。梅木氏に対しては、高見澤日記から端を発し種々^{※5}疑門がのこる。

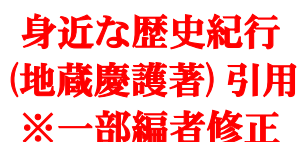
札幌・虻田間道路 札幌から定山溪を経て虻田に至る道路は、明治4年東本願寺によって開削されたものであるが、完成するに至らず現在に及んだもので、最近肥沃な後志羊蹄原野の開拓と虻田郡の移民増に伴う札幌との連絡の爲に、その改修が必要となったのである。

十九年まず札幌の穴の沢から工事を起こし、定山溪に至る路程四里五町を工費二万六千二百六十円を以って開削し、二十三年には定山溪と洞爺湖畔から工事を起こして、

二十七年を以って定山溪・虻田間を完成させた。なおこの豊平・虻田間街道の延長は三十一里二十五間であって虻田街道と称された。

註 5. 梅木氏の未完成説以外の資史料は現在の所拝読及び拝聴していない。

とするのが正解であろう。…開発局HP「開発事業のあゆみ」から



定山溪の降口 2 km程の明治開削跡道を発見

平成 30 年 4 月 21 日 札幌市南区 打田 元輝

蝦夷地が北海道と命名され北海道開拓使が(明治 2 (1869) 年 7 月)設置されました。本府建設に当たった島 義勇は「他日五州第一の都」(いつの日か、日本随一の都になるだろう)と漢詩を詠んでいます。

開拓使の本府を札幌に建設することが決定し、本府に通ずる内陸道の開削に東本願寺が名乗りを上げ、現如上人一行百八十余名は明治 3 (1870) 年 2 月 10 日京都を出発し、北陸地方を巡り蝦夷地移住を呼びかけ、寄付金を募りながら五ヶ月の長旅の末、7 月 7 日函館に着船しました。現如上人は黒松内歌棄～雷電～岩内～余市～小樽経由で札幌入りしています。

一方の新道開削部隊が最大難所の喜茂別～札幌間に着手したのは十月過ぎから翌春までの突貫工事であったようで、原始林の伐木蒔分 3 間(約 5.4m)道幅 9 尺(約 2.7m)人馬が通れる程度のもので、10 月^{※七月?}に平岸街道の終点まで 1 年 3 ヶ月で完成させています。現在は平岸天神山南麓や簾舞中学校西隣の二星岱南麓に旧道碑があり旧道跡が偲ばれます。また国道 230 号線中山峠の道の駅西側に現如上人像があり、すぐ側にも旧道碑があるので、その辺を開削道路跡と思われる方が多いのではと思います。

さて、東本願寺の僧侶達(伊達藩から 50 名ほどが加わっている)が開削した峠のルートは、どこかということ、明治 26 年の輯製 20 万分の地図を見ると、道の駅付近からは相当に北(無意根)寄りで喜茂別岳のすぐ北の鞍部を通っていたようですが、現在まででは『身近な歴史紀行』(地蔵慶護著)に見るより他は見当たりません。※「**武四郎の探査ルート想定図**」前ページ参照

そこで、筆者は明治 26 年図以外に開削道路の位置を示すものは無いものかと調べたところ、※ 次頁①②図 参照

① 札幌ヨリ有珠ニ至ル新道 北大北方資料室 蔵 図類 225-1.2

明治 4 年 7 月完成した本願寺新道の図。開拓使記録局印あり。

② 札幌郡西部図 / 飯島矩道、船越長善 北大北方資料室 蔵 図類 1480

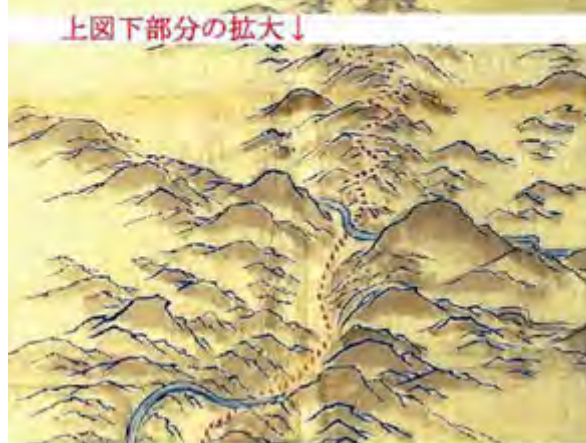
成立年 明治 6 (1873) 年 とくに河川、道路、部落所在を詳細に画く。

以上の二地図を調べることが出来ました。このようなことから、筆者は人生最大のプロジェクトとして、この(4 月)19 日から残雪の中を薄別川(シケレベウシベツ)、20 日ー小川[無意根登山道沿い]そして 21 日ー白水川と三ルートを探査して 白水川の帰路、予測を立てた無意根登山道口左向の山裾を探査したところ、130 数余年の時空を越えて、筆者の目前にそのたたずまいを見せてくれました。次頁③の桃色線参照 翌 22 日は、尾根筋をさらに進み送電線下付近までを確認出来たので絶対の確信が持てます。

当面は発見場所への探索会を実施しながら、函館方面や伊達・喜茂別の研究者と連携して活動し、北海道『札幌市』の文化財として認められないかと考えておりますので、多くの方々のご賛同をお願い申し上げます。



開削道跡↑



上図下部分の拡大↓





札幌郡西部図 / 飯島矩道、船越長善 北大北方資料室 蔵 図類1480

中山峠 道の駅横に立つ「旧本願寺街道」碑について

この旧道碑は 2001 年に建替えしたものであり、以前の旧道碑が現在は札幌藻岩山山麓の現如上人分骨堂への階段上がり口右側に移設されていることが、最近判明しました。

⇒背面に建替えの記録あり
旧石柱は経年により脆弱化した爲
御影石にて再建する
二〇〇一年五月 真宗大谷派北海道教区



銅像の左が↑由来の碑



札幌藻岩山山麓 北海御廟 階段上部が分骨堂

⇒移設されている元石柱
裏面などにはなにも
書かれていません



参考追加 伊達の風土 第十号 から

東本願寺街道の変化を地図で読む

森 美 典

一、はじめに

東本願寺が明治四年に完工させた伊達市長和から札幌の平岸に至る延長二十六里十町五間（約一〇三キロメートル）の本願寺街道は、今どうなっているのだろうか。以前から気になっていたことなので、郷土史研究会が東本願寺街道起点の標識柱を建立するこの機会に、この道路のその後を、地図を参考にしながら読みとってみたいと思う。

とは言っても、この道路が完成した明治四年は、今のようないくつかの地図が作られている時代ではない。大正七年八月に発行された「北海道史（附録地図）」には明治十四年交通圖が掲載されているが、この地図は縮尺二百五十万分の一の至極おおざっぱな地図である。はっきりわかるのは、長和から洞爺湖東岸を通り、洞爺から北側の台地によって中山峠らしき

ところを越え、札幌に通じているということだけである。この地図には何本かの等高線が記入されているが、明治十四年の日本の地図は等高線を入れられるほど進んでいたであろうか。ことによると、この地図は明治十四年に作製されたものではなく、「北海道史」編纂の際に、大正時代の地図を土台にして書き込まれたものかもしれない。なお、この地図は堀田会長が「伊達の風土」第三号に引用しているので、本稿では省略する。同誌十三ページを参照願いたい。

北海道関係の五万分の一地形図は、明治二十九年に陸地測量部が作った仮製五万分図が最初と私は理解している。国土地理院に旧版地図原本を申請すれば交付（有料）して買えるが、国土地理院には明治二十九年図よりも古い地図はない。

※ 以下を省略し前記「伊達の風土」第三号の引用図を次頁に拡大補筆し転載致しました。

↓ 次の図は前記「伊達の風土」第三号 福田喜一郎 筆に
掲載された 明治十四年交通図 の部分拡大図です。

大正七年発行
「北海道史」地図より転写
(北海道庁所蔵)



東本願寺の開削した道は、完成の翌年早くも存亡の危機に
立たされる。札幌本道の着工である。幹線道路のルートを室
蘭・苫小牧に奪われ、東本願寺街道は次第に荒廃して行く。
伊達の開拓は明治三年に始まっているが、壮瞥に最初の入植
者があったのは明治十二年、洞爺村へ三橋移住団が入ったの
は明治二十年である。完成からおよそ十五年もの間、東本願
寺街道沿いの地域に開拓の手が延びなかったのだから荒廃す
るのも不思議ではなかった。

明治十四

142

-13-

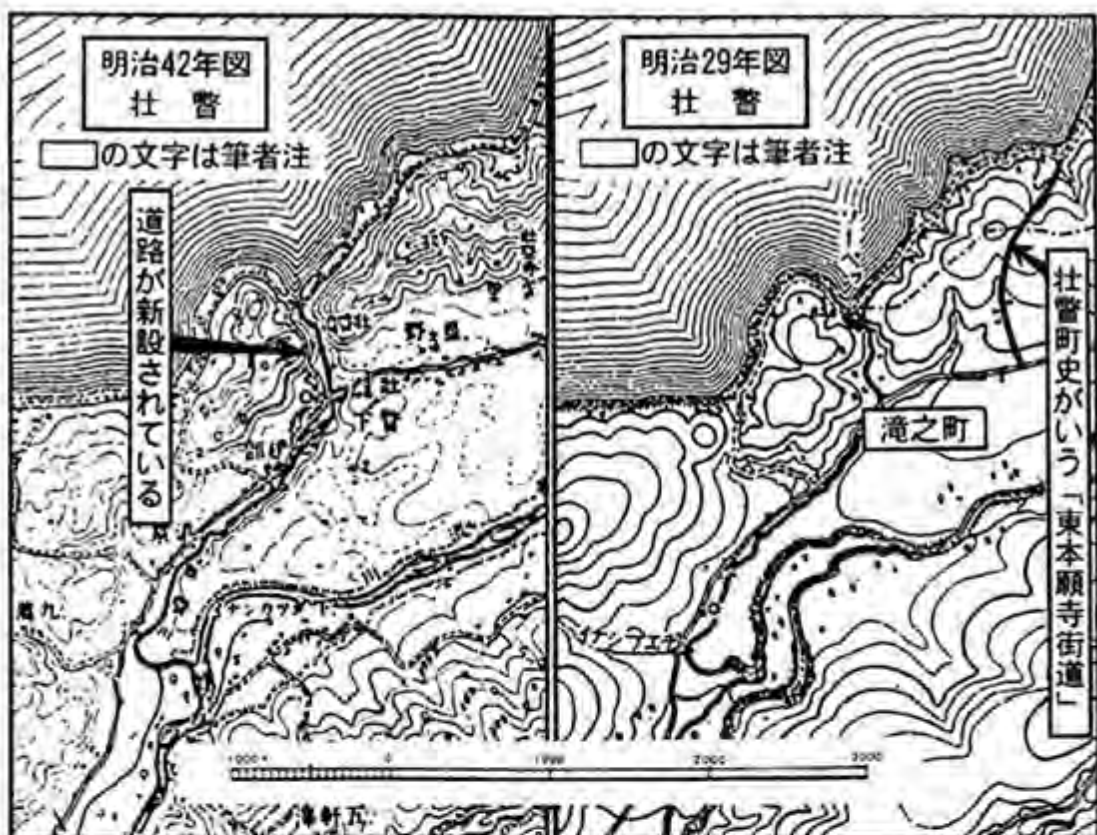
明治十九年橋口農場の留寿都進出、そして翌二十年三橋移住団の洞爺移住などがあって、札幌・虻田間の道路は、仮定県道として再び工事が行われる。明治十九年から二十七年にかけてのことである。前記の明治二十九年図に記されている洞爺以北の東本願寺街道と推測される道は、もはや東本願寺街道ではなく、この仮定県道（虻田街道）である。

仮定県道とはなっても、向洞爺以北は東本願寺街道の原形のままと見て良いであろう。壮瞥のように明治十年代から開拓の始まったところは急坂の道をより緩やかなところへ移したであろうが、その他の箇所については、大筋では東本願寺街道をなぞったとみてよいのではなからうか。詳細な等高線入りの地図がない時代に、前につけられた道から大きく外れる道を急いで造るということは難しい。これは東本願寺街道にもいえることだが、東本願寺は、人跡未踏の地に一年有余で道路をつけたのではない。和人から見れば人跡未踏といいたくなる山野の開削であっても、アブタとウスのアイヌ人にとつては、尻別川はサケの漁場で、通いなれた道なのである。この件については後述するが、東本願寺は、ウスとアブタのアイヌ人の力を借りずに道筋の決定をなし得たとは思えない。そうでなければ、アブタ・ウスのアイヌ人のサケ漁の道と東本願寺街道（虻田街道）がぴったり一致するはずがないからある。

おおざっぱな説明であるが、以上のようなことから、明治二十九年図には大筋において東本願寺街道がほぼ原形のまま記されていると考えている。少なくとも、明治二十九年図に現れる道は東本願寺街道の可能性があるが、明治四十二年図以降に新たに登場する道には東本願寺街道の可能性がないとみてよいであろう。

二、明治二十九年図にあらわれる道筋のその後の変化

冒頭に記した「北海道史（附録地図）の明治十四年交通圖のおおざっぱな道筋を参考にとすると、だれもが、東本願寺街道の現在の姿は道々伊達洞爺線（長和・洞爺村間）、道々岩内洞爺線（通称・武四郎坂。洞爺村市街・大原間）、国道二三〇号線（大原から札幌まで）と考えるであろう。ところが、長和・喜茂別間だけでも、明治二十九年図の東本願寺街道と思われる道に重ならない箇所が二十二キロはある。道路地図で計算すると、壮瞥経由で長和・喜茂別間は四十九キロ弱だから、この間の四割五分は東本願寺の開削した道と異なることになる。この中には五万分の一地形図上ではほんの少しずれただけというものも含めてはいるが、それらを除いてもほぼ四割である。計算した私も、本願寺街道と思われる道に重ならない距離が大きいのに驚いている。さきに推測した現在の



道路のうち、道々「岩内洞爺線」(武四郎坂の道)などはまったく無縁の存在なのである。とにかくこれらの箇所を長和側から順を追って取り上げてみよう。

(1) 東本願寺街道起点の標識と長和小学校の間

この間はカーブを描いていた道を直線化したもので、その距離約三百五十メートル。移設の最大幅約五十メートル。ごく最近の工事なので詳述する必要はないであろう。

(2) 伊達市と仕警町の境界から仕警町苗圃付近までの間

この間は、昭和十八年以降の昭和新山の活動によって道路が使用不能となったため、伊達・仕警境界の東約五十メートル付近から仕警町苗圃付近までの間を長流川沿いに迂回させたもので、仕警町史はその着工を昭和二十一年八月、約六か月を要して竣工したと記している。

(3) 仕警町滝之町・東湖畔放水口間

明治二十九年図では、滝之町・滝の上間の道を、現在の道々から小山ひとつ越えた西側に記している。建部から洞爺湖畔の阿野果樹園付近へ抜ける形である。これ以外に滝之町と湖畔を結ぶ道はないが、昭和五十四年の仕警町史によれば、東本願寺街道の原形は旧胆振線陸援下から壮栄寺の西側を北上して東湖畔の放水口付近へ下りる形である。この道の半分は現在では廃道同然らしい。この道のおよその道筋については明治二十九年図に書き込んでおいた。

なお、建部地区・阿野果樹園間の道は、建部昇太郎が自叙伝の中で元吉と二人で造った道と述べているという。

明治四十二年図では現在と同じように、壮瞥川沿いの斜面に新たな道が記されているが、壮瞥町史によれば、この道は壮瞥滝付近で現在の道々より二十メートル余り高いところ造られた道で、明治三十二年十二月着工、翌三十三年三月の竣工である。改修によって現在のところに変わったのは昭和七年と記されている。元は滝之町と東湖畔放水口の間を結んでいた道を、二キロ近く西へ移したのだから、前の二つの例と同一視するわけにはいくまい。

(4) 洞爺村財田の西端から大原までの間

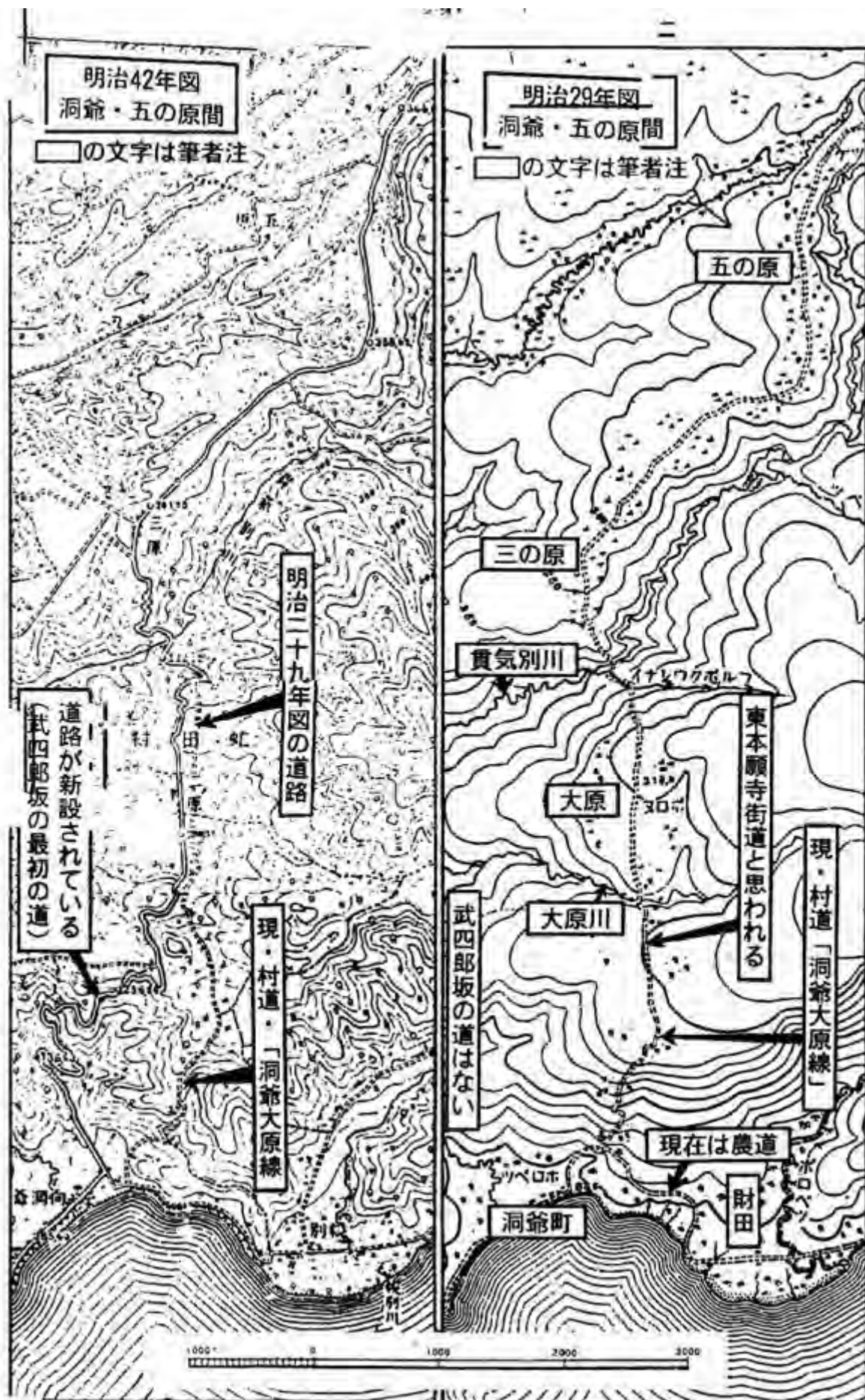
明治二十九年図では、洞爺村財田の西端から北側の台地上がり、約一キロ北西に進んだところで洞爺市街地から来る道と交わり、ここから北上する形になっている。これ以外に高台へ登る道はない。財田からの道と洞爺からの道が交わるころは、古くからの洞爺村の墓地の下である。

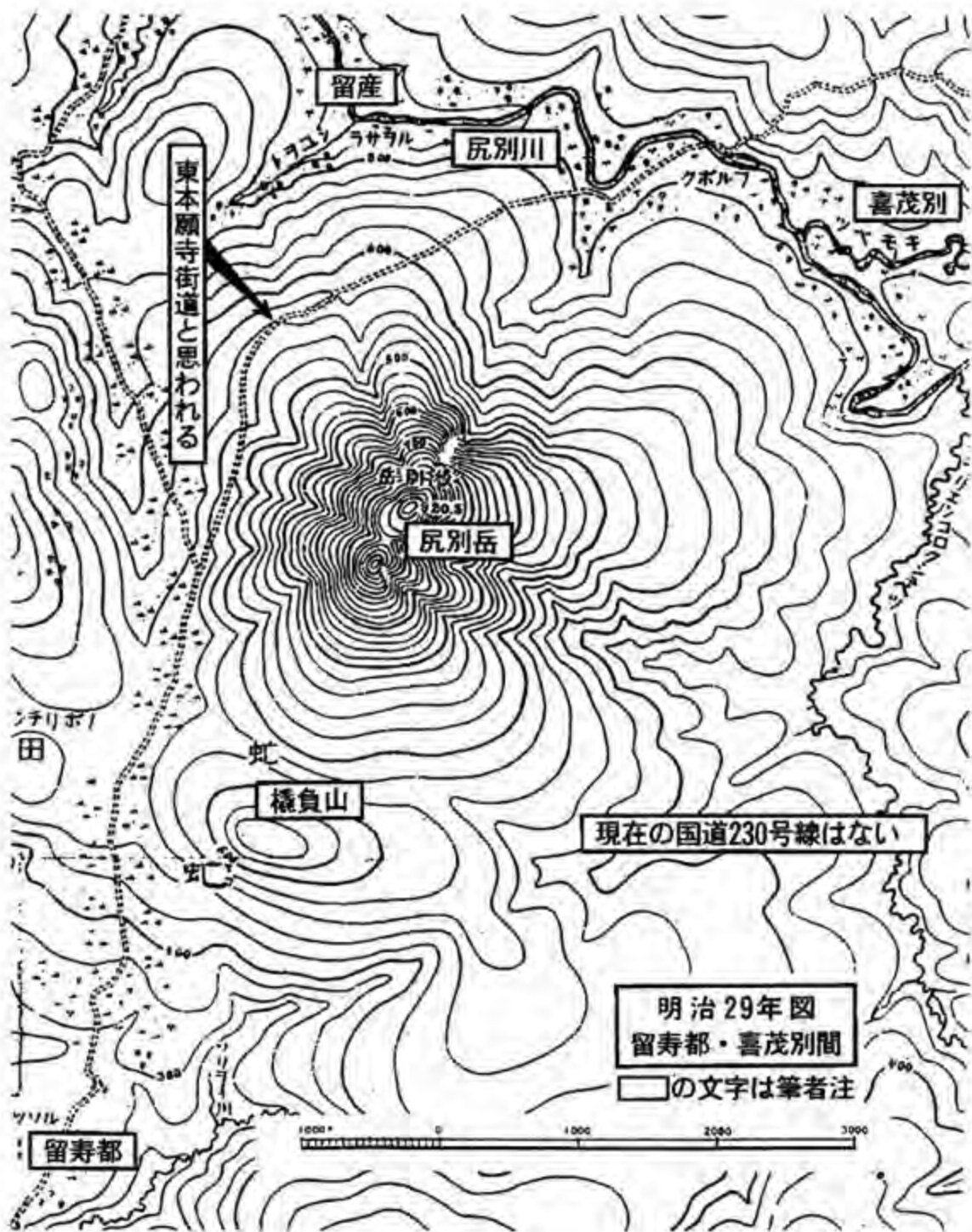
この地図は地名の記載に誤記があり、左側に記されているホロベツは、実は向洞爺（現在の洞爺町）である。財田と向洞爺の間には湖畔に道がない。ここに道が記されるのは明治四十二年図からである。現在の道々岩内洞爺線（通称・武四郎坂の道）は明治四十二年図に初めて登場するのだから、東本願寺街道とはまったく無縁の道路と思わねば

なるまい。

財田の西端から墓地の下までの道は、現在は農道として使用されている。墓地の下から大原に向かって北上する道は、現在は洞爺村の村道「洞爺大原線」になっている。幹線道路ではなくなっているが、これが東本願寺街道の名残と見て間違いあるまい。村道「洞爺大原線」は、実はアブタ・ウスのアイヌ人が尻別川でのサケ漁に往復していた道である（「伊達の風土」八号二十五ページの地図参照）。なお、村道「洞爺大原線」が現在の国道二三〇号線と交わる地点は、大原小学校の南の細流（ニウシナイ。現在名・大原川）にある澱粉工場のところである。

ついでに述べておくが、道々岩内洞爺線に武四郎坂の標識が立てられたのは昭和二十八年頃である。坂の下を耕作している安住家では、昭和二十年代までこの坂には名がなかったと語っているし、洞爺村の神原芳雄氏は、洞爺湖温泉・札幌間の直通バスが運行されるようになった時、バス会社が武四郎坂の標柱を持ってきて立てたのが最初と語っている。松浦武四郎が丁巳日誌や後方羊蹄日誌に記している地形は村道「洞爺大原線」にあって武四郎坂の道にはない。松浦武四郎も武四郎坂を歩いていないことになる。武四郎坂は歴史事実の検証をせずに名づけられた観光地名といっても良さそうである。





(5) 大原川と三の

原の間

大原川（ニウ

シナイ）から貫

気別川へ向かっ

てほぼ真北に向

かう道は、明治

四十二年図の時

にはやや西に移

設されている。

また、明治二十

九年図では蛇行

せずにフルボク

シナイへ下り、

貫気別川を渡っ

てからも同じよ

うにして三の原

へ向かっている

が、明治四十二

年図では貫気別

川の前後が蛇行

する形に変わっ

側にあった道が尾根の西側の沢に移り、さらに昭和四十年代の工事で沢の西側へ変わった（現在の地図省略）。

(6) 留寿都・喜茂別間

この間も、明治二十九年図に記されている東本願寺街道と思われる道と、現在の国道二三〇号線がまったく重ならない箇所である。明治二十九年図では一見してわかるように、留寿都（ルソツ）と喜茂別の間の道は尻別岳の西側を通っている。尻別岳の東側に道はない。ここに道が記されているのは明治四十二年図からである。

尻別岳西側の道筋は松浦武四郎が丁巳日誌に記している風景描写に一致している。武四郎の歩いた道はアプタ・ウスのアイヌ人が尻別川へサケ漁に往復した道である（「伊達の風土」八号参照）。

東本願寺街道の名残と思われる尻別岳西側の道はその後何度か移設され、現在は留寿都から真狩へ向かう道々を五百メートルほど西へ進んでから北へ折れ、横負山西方の小丘の西側を迂回する形に変わっている（現在の地図省略）。また、尻別岳山頂のほぼ真西に当たるところの、最初の道路の西側に馬鈴薯原々種農場の公宅が建ち並んでいて、道路はそこを通る形に変わっているし、尻別川へ下るのも、喜茂別市街地の向かい側ではなく、留産（尻別川が流れを北へ変えるところ）である。東本願寺が開削した道で今も使

われていると思われるのは、横負山西方の小丘を回ったところから馬鈴薯原々種農場手前までの約一・五キロと尻別岳北西の約一キロくらいのもものではなからうか。なお、この道路の現在の名称は道々「留寿都喜茂別線」である。

※ ※ ※

東本願寺街道のうち、洞爺村の村道「洞爺大原線」から尻別川までの間は、アプタ・ウスのアイヌ人のサケ漁の道をなぞっており、また、松浦武四郎が歩いた道にも重なっている。このことから東本願寺街道開削にはアプタ・ウスのアイヌ人のサケ漁の道が貢献していると認めねばなるまい。

東本願寺街道の長和・喜茂別間のうち、ほぼ元のままの経路で、今も幹線道路として使われている箇所は非常に少ないと判断せざるを得ない。詳しく調べたわけではないが、喜茂別町栄から札幌にかけての道筋も多分同様であろう。

明治十年代・二十年代の羊蹄山麓の開拓者たちにとっては、荒廃した道であっても本願寺道路が唯一の通路だったはずである。見方によっては、東本願寺街道は開削した直後はろくに使われず、必要になった時には荒廃していたという悲運の街道であった。しかし、この道があったから虻田街道として改めて整備され、今の国道二三〇号線に発展したということができよう。

参考追加 伊達の風土第十四号 から

本願寺街道の変化を地図で読む (二)

森 美 典

一、はじめに

第十号に発表した「東本願寺街道の変化を地図で読む」

の中で、「明治二十九年図は、喜茂別町栄と定山溪のやや手前までの間に道路を記していない」と書き、この間の本願寺街道がその後どうなったのかということについては言及しなかったが、それから間もなく、「洞爺村史」を執筆された安住尚志氏から「本願寺街道」と題する橋口文蔵未定稿のコピーを頂いた。これに目を通すと、明治二十九年図が、喜茂別市街地の東側と、薄別川が豊平川に合流する地点付近(定山溪の西南)までの間に道路を記していない理由が推測できるので、研究とは言えない粗末な内容ではあるが、喜茂別以北の本願寺街道について述べてみたい。

本願寺街道の研究者にすれば、この程度のこととは分かり

きったことだろうと思うが、十号で喜茂別以南に触れた関係上、以北についても、形だけでもその責を果たしたいと思う。

二、明治二十九年図に喜茂別・定山溪間の道がない理由

橋口文蔵は明治二十年、壮瞥に橋口農場を開いた人物で、当時は北海道庁理事官兼紋電製糖所所長であった。農場があったのは長流川と壮瞥川にはさまれたところで、旧胆振線の東側にある紫明苑は当時建てられた壮瞥小屋である。

彼は留寿都や仲洞爺にも農場を開設しており、死亡は明治三十六年八月十日である。(壮瞥町史より)

ここに引用する「本願寺街道」は、明治二十九年六月二日に発行された「橋口文蔵遺事録」に収められている。発行者は橋口兼清(東京市麴町区麴町七丁目二十番地)・皇居

の西側)、印刷所は帝國印刷株式会社(東京市京橋区築地三丁目十五番地)JR新橋駅の東側)で、非売品と記されているから私家本のようなものであろう。

この原稿の執筆時期は分らないが、内容的には明治二十年代前半のものと考えられる。当然のことながら原文は歴史的仮名遣いで、漢字は旧字体、そしてルビは付されていない。引用は原文通りにすべきとは思ふが、読み手の便を考へて、常用漢字表にある漢字は常用漢字に改め、読みやすくするために私が現代仮名遣いでルビを加えた。ただし、本来異なる文字(例「輩」と配、潑と発など)については改めていない。また、古文書によく現れる「丁」(こと)は片仮名に改めた。これらの点、御了承願いたい。

予往年胆振国有珠郡紋竈村ニ在リ、春夏ノ交一日後山ノ奇勝ヲ探ラント欲シ、同人五六輩ト糧ヲ裹ミ騎ヲ聯ネ、長流川ニ沿フテ浜リ、晴光ヲ弄シ風色ヲ賞シ、斜傾數里ノ路、馬足ノ進ムヲ覺エズ、暫時ニシテ壯瞥ニ至レバ、瀑布前ニ当リ、直下十數仞、(中略)

一行モ亦タ探奇討勝ノ思想益々其度ヲ高カメ、以テ後方羊蹄山ニ向ヒ、疎林ノ間ヲ過ギ、馬ニ任セテ進ム。(中略)既ニ湖上ヲ離ル、六里許、草原曠濶分ケテ八区トシ、第一号ヨリ第八号ニ至ル、第八号ハ即チ後方羊蹄山麓最近ノ地

トス。(中略)既ニシテ路ヲ東北ニ取り、札幌ヲ望ンデ進マント欲スルモ蹊路荊棘茂草ノ鞠スル所トナリ、行クベカラズ、奇勝ヲ探討スルノ念勃如タルモ、亦タ奈何トモスルナシ。一行之ガ為メニ呆然落胆、天公何ンゾ不仁ナルノ怨言ヲ出スノ外アラズ、始メテ馬足ノ重キヲ覺ボユ。(中略)

紋竈ヨリ後方羊蹄山下第八号草原ニ至ル、十二里ノ蹊路ハ絶景奇觀皆路線ノ左右ニ伴隨セリ。只ダ第八号草原ヨリ札幌ニ至ルノ間ハ、道路荒蕪行クベキナク、其跋涉ヲ欠キシヲ以テ、何等ノモノヲ包蔵シ、既ニ遊覽スル所ノ奇觀絶景肥壤沃土ニ勝サル万々ナルモノアルモ、亦タ知ルベカラズ。仰(抑)モ後方羊蹄山東北ノ奇觀沃土ハ山神仙翁ノ惜ンデ人間ニ秘スルモノナルモ測ルベカラズト雖ドモ、予ガ経ル所ノ蹊路ハ紋竈ノ北方ニ接続シ、紋竈ヨリ札幌ニ達スル直道ニシテ、世俗本願寺街道ト称ス。明治四年頃、東本願寺ノ僧允准ヲ受ケ、其寺力ヲ以テ林藪を刈伐シ、道路ヲ開通セシモノニシテ、(中略)

今茲予事ヲ以テ居ヲ札幌ニ移セシニ、本願寺街道探奇ノ念復タ禁ズル能ハズ。乃チ公暇ヲ偷ミ、平岸ヨリ豊平川ニ沿フテ浜リ、真駒内ヲ経テ定山溪ニ至ル、緑樹青嶺路ヲ挟ミ、疎林草原往々參錯シ、路傍ノ川流岩石ニ触レ激シテ雪花ヲ散ジ、或ハ紆余騎回シ千状万態極マリナシ、行路平坦車馬

往還、行人ヲシテ、神氣爽快ナラシム。又、溪中温泉アリ。浴客四時絶エズ、四望林巒連環、溪水潺湲、奇岩怪石散乱、清趣超絶人ノ心思ヲ悦バシムベキモノ備ハラザルナシ。因リテ尚ホ奥区ノ奇勝ヲ探ラント欲シ、進路ヲ求ムルモ、荒蕪識別スベカラズ、亦奈何トモスルナシ。予宿志ノ遂ル能ハザルヲ憾ミ、低回去ルニ忍ビズ。西南遙カニ後方羊蹄山ヲ雲際ニ望ムノミ。札幌ヨリ定山溪ニ至ル概ネ七里許、定山溪ヨリ後方羊蹄山下第八号草原ニ至ルノ間、蓋延袤六里許、本願寺街道二十五里ノ行程、僅々六里ノ蕪莽ニ遮断セラレ、道ノ通ズルナク奥区ノ奇勝絶景廻旻兩ノ占ムル所トナリ、人間ノ觀覽ニ供スル能ハズ。且ツ山水社会ニ向ヒ活潑ナル運動ヲ為シ、其力ト其權トヲ以テ社会ノ利用ヲ試ムル能ハズ、山水の不幸モ亦タ真ニ想フベシ。(中略)

今本道ヲ開通スルモ、亦巨額ノ費用ト多数ノ日子ヲ要シ、然ル後其竣功ヲ見ルニ非ザルナリ。何トナレバ當テ寺僧ノ林樹ヲ伐採シタレバ、道數尚ホ存シ、荊棘茂草ノ鞠スル所トナルニ過ギザレバナリ。乃チ多少ノ人夫ヲ使役シ、荊除ニ從事セシメ、些少ノ修繕ヲ加ヘシムレバ、容易ニ行道ヲ復スルコトヲ得ベシ、

一ページ余りにわたって引用したが、ひと言でいえば、後方羊蹄山麓最近の地・第八号(八ノ原)から定山溪に至

る六里ばかりの間の小道(本願寺街道)は、イバラや草を養う地となり、荒れ果てていて進むことができないという内容である。しかし文末で、道路の跡が存するのだから、この道を開通させるのに巨額の費用や多数の日時は必要なく、イバラや草を刈り取って多少の修理を加えれば容易に修復できると述べている。

ここに登場する第八号は、北海道殖民地撰定報文(明治二十四年刊)では八番原、現代の地区では八ノ原となっており、橋負山(大和ルスツスキー場のある山)の南麓付近をいう。ついでに述べると七ノ原は留寿都市街地である。

なお、橋負山は尻別岳と尾根つづきの山だが、羊蹄山とは尾根つづきではない。

ところで、橋口文蔵未定稿は第八号(八ノ原)から定山溪までの間は本願寺街道を進むことができないと述べているにもかかわらず、明治二十九年の仮製五万分図では尻別岳西側に留寿都・喜茂別間の道が記されている(伊達の風土二十号挿入図参照)。橋口文蔵がいうように、本願寺街道は短期間に修復可能であることが確かであれば、この間は短期間に修復されたと見ることができるとは。

留産のやや下流から、尻別川に架かる国道の尻別橋のやや上流までの間は、アブタとウスのコタンの人たちのサケの漁場がいくつもあったところで、尻別岳の西側はもとも

とサケ漁に通う道があったところだから、道路跡が分からなくなっていたとしても、アイヌの人たちの協力があれば容易に修復できただろうと思われる。

明治二十九年図は喜茂別から北にも小道を記している。

この道は現在の喜茂別町・京極町の境界付近を北北東に進み、中山峠の北西にそびえる喜茂別岳（二一七メートル）の西側の屋根で消滅している。現在の国道二三〇号とはまったく異なる経路の小道である。喜茂別岳は札幌・喜茂別・東川知安（現・京極町）三市町の境界に近い山頂であるが、大正六年図は、この山頂から喜茂別・東川知安の境界に沿って約四キロ下ったところに群馬団体という団体移住地名を記している。

また、定山溪から豊平川上流に向かって道が延びているが、この道は今の豊平峡タムの手前で消滅している。

これらが本願寺街道の道筋をなぞったものなのか、あるいはまったく異なる用途で明治二十年代に新たに作られたものなのか、今の私の知識では推測するのが難しい。

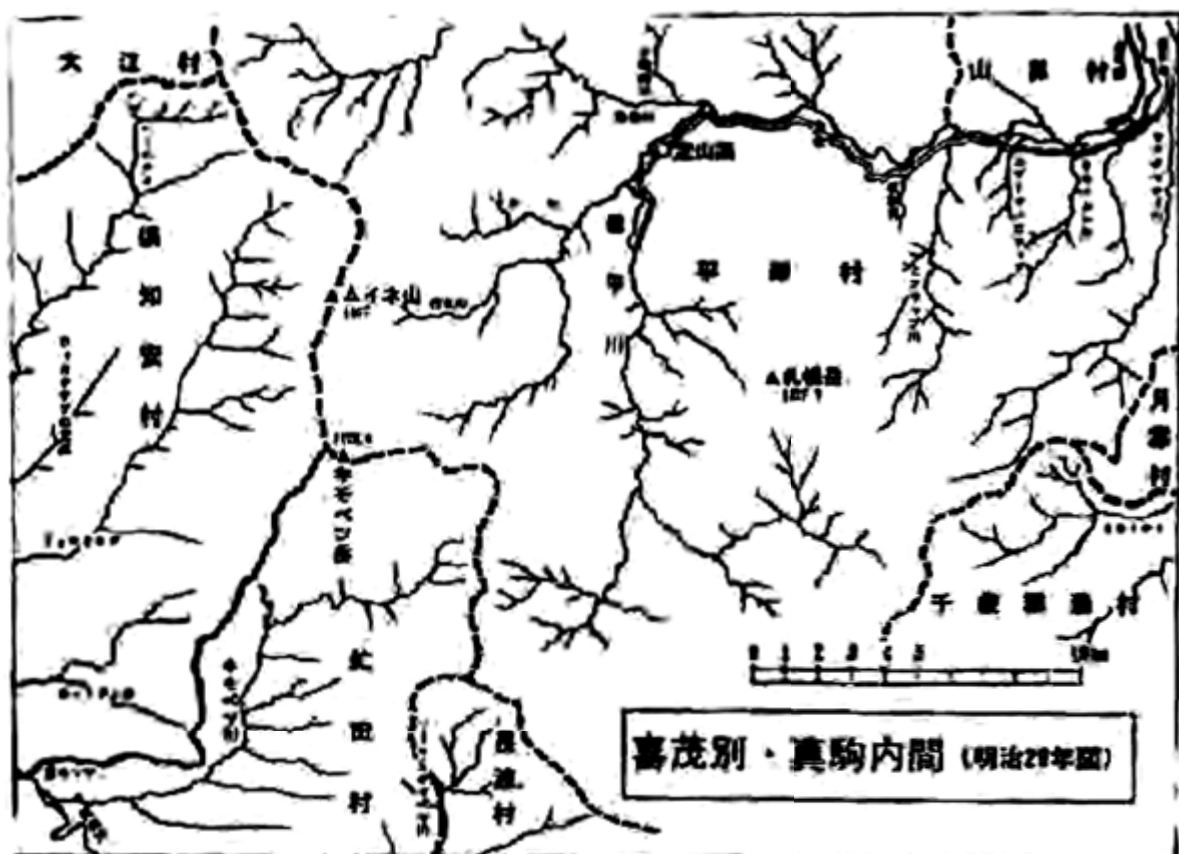
「伊達の風土」第十号の「東本願寺街道の変化を地図で読む」に挿入した留壽都・喜茂別間の明治二十九年図を見て頂くと分かると思うが、民別岳の西側に設置された最初の道は、今の喜茂別市街地を通っていない。現国道二三〇号線の原型となる民別岳東側の道路が記されるのは明治四

十二年図からである。

陸地測量部の五万分図に、喜茂別・定山溪間の道路（国道二三〇号線の原型）が記されるのは大正六年測量図からである。ただし、陸地測量部の明治四十二年測量図は、喜茂別の東側（伏見付近）まで新道を記入し、そこに「軽定山溪至札幌」と記している。この東側の地図は明治二十九年の仮製五万分図のままである。喜茂別から定山溪にかけては、その後詳細な測量が完了していないために、明治四十二年はこの付近の五万分図が作成できず、すでに修復の終わっている本願寺街道も地図に載らなかったということが考えられる。

そうであったとしても、喜茂別・定山溪間については、明治二十九年図に途中までではあってもまったく異なる道が記されていることや、明治二十九年図からさらに二十一年を経て、はじめて喜茂別・定山溪間を直接結ぶ道路が地形図に記されたことなどから、確かな資料が見えない限り、本願寺街道を修復したものらしいと言いつける気持ちにはなれない。

仮に大正六年図に記されている喜茂別・定山溪間の道路が本願寺街道を修復したものとしても、昭和三十年代から四十年代前半にかけての改修工事で、かなりの距離にわたって経路が一変していることは多くの方が御存知のこと



と思う。喜茂別から中山峠までは現国道で約二十一キロあるが、このうち、喜茂別町栄の北約五キロの地点から中山峠手前までの十五キロは新道である。また、中山峠から薄別川と豊平川の合流点までは現国道二三〇号線で十八キロはあると思われるが、このうち、中山峠から薄別温泉の約一キロ手前までの十三キロは新道である。

三、定山溪・平岸間の道路のその後の変化

定山溪・平岸間は五万分の一地形図を引用すると、「伊達藩の領土」のB5版では三ページ使っても完全には収まらないので、明治二十九年の仮製五万分図と、大正六年の五万分図を二十万分の一に縮小コピーし、これから道路をトレースしたものを上と左に示す。次ページ下段の現在の二十万分図をトレースしたものと見比べて頂きたい。

これで見ると、国道二三〇号線は、定山溪のやや南から石山分岐点までの間は、ほぼ明治二十九年図の本願寺街道の上を走っていると読み取れる。ただし、釧路・藤野間の二キロ余りは改修によって道路を直線化した部分が国道になっており、本願寺街道ではない。旧本願寺街道は石山で国道二三〇号線に別れる。今の馬駒内通り・中の島通り・平岸通りが本願寺街道の名残の道らしい。石山・平岸間は国道ではないが、札幌市の主要道路として健在である。



↓次の図は、前記三図から明治大正昭和の道筋を编者【引用者 打田】が統合表示したものである。※明治図では定山溪～喜茂別岳間に道筋がない



現・国道二三〇号線の石山から札幌都心までは本願寺街道とはまったく異なる道である。

四、十号の記述の訂正

ここで十号に発表した「東本願寺街道の変化を地図で読む」の内容の一部を若干訂正させて頂きたい。十号で、現在の道路と本願寺街道が重ならない箇所として、(2)伊達市と壮瞥町の境界から壮瞥町苗圃付近までの間」を挙げたが、この説明は舌足らずである。

壮瞥町関係については「壮瞥町史」の八四八ページをそのまま紹介する方が間違いなさそうである。

【壮瞥町史】

すなわち、本町内の（本願寺街道の）通過経路を辿ると、伊達市長和町国道と道々の分岐点丁字路から、道々（平成五年に 国道四五三号に昇格）を東進し町界を過ぎながら、旧柳原の町道（旧準地方費道）から、現在は隆起のため通行出来ないが、昭和南山麓丘陵斜面および旧フカバを経て、現町道建部線を通り滝之町市街を経て、滝之町（旧星野部落）四四二番地元長崎甚作商店（現阿野照男宅）西側より町道（現在は通行が出来ない状態であるが昭和三十年頃までは通行が出来た）に至り、左折して草刈山に達し、元仮隔離病舎のあった附近から、草

刈山を北東斜めに登って峯に達し、壮瞥墓地、壮栄寺裏山の峯を東進して、東湖畔二三六番地岩倉清一宅裏山の落葉林西側斜面の中段（現在も旧道路型がある）を通り、岩倉清一宅附近に下り湖畔に達し、字東湖畔、字仲洞爺の道々を通して洞爺村岩屋（丸山）の町村界に至る間である。

十号では「伊達・壮瞥境界の東約五十メートル付近から壮瞥町苗圃付近までの間を長流川沿いに迂回させた」と簡単に記したが、これでは今の国道四五三号（旧・道々伊達洞爺線）を、伊達・壮瞥境界付近から苗圃付近までの間だけ迂回させたように見えるし、苗圃から滝之町丁字路（壮瞥町滝之町二六一番地付近）までは本願寺街道と読まれても仕方がない。厳密には、伊達・壮瞥境界の東約五十メートル付近と、壮瞥町の今の町道「建部団地一号線」を結んだ線が旧本願寺街道である。従って、伊達・壮瞥境界の東約五十メートル付近から、道々伊達洞爺線が壮瞥市街地で壮瞥川の橋を渡るところの丁字路までの間の約四キロは旧本願寺街道ではない。

また、洞爺村財田から墓地の下までの道を伊達の風土十号では「現在は農道」と記したが、現実には農道でも、ここは実延長一・二五五キロメートルの村道で、「財田美沢線」

という立派な名称がついている。

不十分な説明をお詫びし、訂正する。

五、おわりに

現在、本願寺街道そのもの、またはこれにもっとも近いところにある幹線道路を拾うと、国道四五三号線（伊達市長和町・杜智町渡之町間）、道々伊達洞爺線（杜智町渡之町・洞爺村市街間）、道々岩内・洞爺線（洞爺村市街・洞爺村大原間）、国道二三〇号線（洞爺村大原・札幌市石山間）、真駒内通り・中の島通り・平岸通り（石山・平岸間）となる。この距離は、道路地図に記されている数字で判断すると、一一五キロ前後になる。このうち、本願寺街道と思われる道と異なる箇所が、長和・喜茂別間に二七キロ前後、定山溪・平岸間に約一二キロ余りある。また、喜茂別・定山溪間は陸地測量部の五万分図に最初に現れる道路が本願寺街道なのかどうか明確な判断を下しにくい。仮にこれが本願寺街道をなぞったものとしても、現在の道路地図に示されているこの間の距離四一・六キロのうち二八キロ前後は昭和四十四年十月三日に開通した新道である。従って、全長約一一五キロのうち、どう見ても六七キロは本願寺街道とは重ならない道ということになる。大正六年図に記されている喜茂別・定山溪間の道路が本願寺街

道を修復したものだとしても、この項の冒頭に挙げた現在の幹線道路で、本願寺街道と重なると考えられる距離は四八キロ程度にしかない。全行程一一五キロの四二パーセント弱ということになる。

この中には、軍社会に对应しやすいように通んだ土木工事によって経路を変えられた喜茂別・定山溪間のような箇所もあれば、馬が交通の主力だった時代に、車馬の通行困難ということで経路変更に至ったと思われる杜智町の草刈山や、洞爺村の村道洞爺大原線のような例もあるし、昭和新生の生成で道路が破壊され、迂回工事をせざるを得なかった箇所もある。幹線道路からは外れても、沿道に馬鈴薯原々種農場のある道々留寿都喜茂別線や、農道として生かされている洞爺村の村道財田美沢線・洞爺大原線などは、存在価値を認められているだけに希少な方かもしれない。

とは言っても、本願寺街道として生まれたと推測される道の約四十二パーセントは今も幹線交通路として健在である。幹線道路ではなくても生き残っている道もある。中には洞爺村の村道「財田美沢線」や「洞爺大原線」のように普通車での通行は見合わせた方がよいという道もあるが、余暇をみつけて、地図を片手に本願寺街道の跡をたどってみるのも、おもしろいのではないだろうか。

C. 山鼻より発垂別までの6 Kmの新道

札幌の藻岩山に近い山鼻（札幌管刹所：現・真宗大谷派札幌別院）より発垂別（現・南区川沿町・ハッタリとは淵の意）までの古道は道幅三尺程で、距離は1里半の道として新規開削する直営工事であった。

金額等については記されていない。

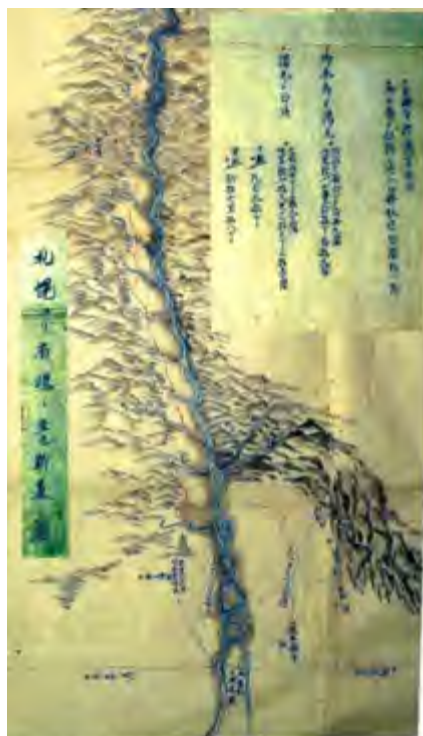
註1. 現・札幌市中央区南七条七丁目 屯田兵村で有名だが、人植については、明治4年の本願寺移民が先である。
現在は中央区と南区とに分かれている。

註2. 川沿町（豊平川沿いの意）から北ノ沢・中ノ沢南ノ沢が八垂別で、八垂別とは8号の沢までであったのでそのように呼称した。

註3. 明治2年の地図や、高見澤樵之丞の地図には“ハッタリベツ古道”などの名称がある。

右は、高見澤樵之丞が「有珠新道」全体を描いたものであり、長尺な絵図である。依つてに下記は、札幌『ハッタリベツ』部分を拡大した

札幌ヨリ有珠ニ至ル新道ノ図
北海道大学北方資料室蔵 図類225-1.2



明治4、5年頃に作製された
「札幌ヨリ有珠ニ至ル新道ノ図」

D. 鶉山道の改修工事 76Km

函館・大野方面の人々は鶉山道を普通“江差山道”という。一般的には函館側の呼称である。現在の国道 227 号線の源流をなすもので、区間は現・大野町市渡から江差町までの約 64 Km という。しかし、工事や改修に関しては当時の生活圏から考えて、現・厚沢部町本町付近までと考えてよいであろう。

この“コース”の工事は概ね、五期に分けて考える事ができる。元米アイヌの人々は毛無山山頂部を通行していたが、漁業の盛行と共に江差・熊石方面の人々が、箱館方面に出稼ぎするようになると、



小滝の沢 (出会いの滝)
S 60.11

Googleで↑ 出会いの滝 で検索



1. 安政 1 (1854) 年 市渡大悲庵 (現・円通寺) の道仙と木間内の麓長吉が地元から開削する事として“小龍の滝” (= 出会いの滝) で再会する事を約して着工したが、賃金難で中断。
2. 安政 4 (1857) 年 呉服商であった鈴鹿甚右衛門 (土木工事者としても有名) と長坂庄兵衛による開削。
3. 本編での本道における“最初の改修工事” (全線) である。
4. 明治 18 (1885) 年の初の官費による大開削工事で函館県によって起工され、難所であった“鼻コクリ” (鼻がつかえる程の急坂) や“黒ハゲ” “赤ハゲ” “台場山” “天狗岳” 等々の難所もほぼ解決し。今回の国道 227 号線の基礎が形づくられた。
5. 尚、現代のような近代的 (直線・緩勾配・・・) 道路となったのは、北海道開発局函館建設部によって、昭和 41 (1900) 年に始まり昭和 45 (1970) 年に完成した。

鶉山道の工事は他の 3 コースと異なり、木間内の旅館経営者で鈴鹿甚右衛門の元・奉公人であった麓長吉に依頼したもので、工期やコースは不明、新史資料は発掘されていない。麓長吉は加賀 (能登) 出身で前記鈴鹿家に雇用され主人と共に各地で道路開削に従事した人物で、つまり土木技術に秀いでいた為に委託されたものと考えらる。

ここに、昭和 38 (1963) 年に鶺小學校に勤務していた加藤秀夫氏の著した、『郷土誌・鶺地区』の四、入植当時の回想・五、鶺山道開通まで、から当時の道路状況を探ってみたい。

～函館に於いて先づ腹ごしらえをし、「草畦」を一足履き一足は腰に付け荷物を背負って大野山道よりてくてく歩き出す。道路は左右竹やぶや大木、その中はなかなかの「ぬかり道」多少金銭のある人はダンコ馬に～ 19 頁

～甚右衛門の没後は、道路の維持もおろそかになり、洪水による破損に加え箱館戦争等で荒れ放題、開拓使が置かれた時は人がやっと通れる「ふみ分け道」と化していた。～ 26 頁

と記されており、又、この状況を裏づけるかのような記録が明治 18 (1835) 年^{※4} 函館県で鶺山道工事が起工され翌年開通したのである。この風景画 38 枚は「鶺山道図巻」といい、巻頭語の著者、石山良助（後・開拓使事業報告第七巻の編者の一人）の語によれば、

～ 自函館至江差有路、称鶺山道、古萬山之間。剋市渡村行程凡十六里。最為險惡。攀臨深谷、九折百轉。行路皆魚貫而過、一步一喘其勞果如何也。遇其淫雨連綿、冰雪融解之候、則泥水溢焉・土石崩焉、人輒馬斃者歲不絕・上下以為患既久矣。～

要旨は「函館から江差に行くのには鶺山道という道があり、市渡から行程は約 64 km でひどい悪路である。険しい山を登り深い谷に沿っての悪路だ。だから休み休みの行程で大変な苦勞ある、だから雨が降ったり雪どけにでもなれば、泥水があふれ土砂がくずれ、人馬の被害は毎年の事で役所や住民もこまりぬいていた、

従って明治 3 (1870) 年の時でも同じ様な状況であった事は言うまでもない。ましてや^{※5} 戊辰・己巳の役や文中の融水・洪水での荒廃を考えると言語に絶する。

次いで「鶺山道」については、山中峠（御境）以東では下記の 3 コースがあった。

1. 旧々道といわれる毛無山、(アイヌ語で「緑ゆたかなの意」^{※6} 山頂部を通行するコース。(下川汲沢～上川汲沢～山頂部～山中峠北側)
2. 毛無山山頂より^{※7} 台舘山方向に下り、大野川北岸を通行するコースである。
^{※8} 山頂部通行の理由は大野川北岸に通称「赤ハゲ」と呼ばれるコース最大の障害物を回避する為であった。
3. 市渡から障害物を回避しながら大野川北岸を通行するコース。

※ 3 については後記する。（本道最初の改修近路）

また、昭和 36 (1961) 年 8 月 9 日の “北海タイムス” の記事によれば「道南の動脈本格整備へ二級国道江差線 鷗山道の凍害防止など、40 年ぶり…本道初の全線改良などの見出しがあり、殆んど人手の入ってない事が知れる。 **と書かれています。**



※ 上は北斗市のHPからですが
道立図書館HPでも閲覧できま
す。49 ページ参照



菅佐伯の台場山見取図
当時の地形を知る事ができる。

大野町教育委員会蔵

次に明治 42 (1909) 年 9 月 4 日の^{※9}「北海道新聞」＝大谷派本願寺光法主
歓迎号・第二十三号・(八) の関係部分によると。

- 三、鷗入口から「イナクライシ峠」を切開いて大野毛無峠に出る
十一里半の新道路である。これは江差旧街道で、本山は麓長吉な
るものに命じ、金一千両を投じて開削せしめたもので、
人家の漸く建つようになったのは、これ以後の事である。
 - 四、蛾虫から鷗峠の脇まで七里の道路。橋四ヶ所ある。本山は
金一五百両を投じて幅九尺に修成したのである。
 - 五、オサカイから一ノ渡まで七里の道路橋五ヶ所、これも幅九尺で
あるが、出資金は不明である。
兎も角、以上各通の道路開削に就て、各人夫三十人、賃金一日
四貫文、約五ヶ月宛を費した。
- ※ 因に、此際使用した開削道路の図面が江差佐平次町 (山ノ上)
鈴鹿善右衛門方に所蔵せりと伝えられている。



現如上人御屋敷の地 (下二股) S 62.10



現如上人小休の地
(上二股附近)
S 62.10



台場山(現如上人御通行之地でもあり
土方軍戦勝の地でもある)

次に札幌本府で管利地所検分後の 8 月 13 日に大野村大郷寺に宿泊後、鶉山道の検分と松前街道も含めた教化普教に出発したが、そのコースは

四日、晴、下二股、善右衛門御屋(鶉山道の難所)上二股、笹小屋小休、川四ヶ所有各々歩行御渉り木間内、麓長吉御泊、但江差御坊より持出御馳走。

五日、雨、鶉、庄次郎、蛾虫、八郎兵衛御小休。土橋上戸長五郎え、但江差同行中御馳走、目名、三郎右衛門、泊、中川屋利右衛門御小休。江差御坊順正寺御泊。

(大野より鶉山道越えて江里迄まで十六里余)

六、七日、江差御坊御遺留。

八日、晴、五勝手、柏屋嘉右衛門御小休。上ノ国、専念寺掛所、清浄寺御屋、塩吹、加賀屋長吉、羽根差、利兵衛御小休。石崎、専念寺掛所法香寺御泊。六里半。

九日、晴、小砂子、倉吉、原口、富次郎御小休。江良町、伝次郎御屋但松前専念寺持出御馳走。清部、権右衛門、茂草、忠吉、札前、専念寺御泊。(十一里、松前候より一小隊を以て立石野まで御出迎ありたり)

十日、専念寺遺留。

十一日、荒谷、依田有右衛門御小休、吉岡、専念寺掛所御屋。福島、原田治五衛門御泊。(五里)

十二日、一ノ渡、佐渡甚左衛門、湯之尻、権兵衛御小休。知内、鶴岡屋忠吉御屋。木古内、與之介御小休。札刈、昌源寺御泊。(十里半)

十三日、雨、泉沢、笠島屋伝兵衛、三ツ石、市松、茂辺地、池田長右衛門、富川、田村長次郎御小休。有川、東光寺御屋。七重浜、久兵衛、亀田、岩井屋政吉御小休。函館御坊浄玄寺酉刻過御着、御泊(九里半)(本府より函館まで百三十五里余)十四より十八日まで、函館御坊遺留。

東本願寺北海道開教史

本編では“本願寺道路”と限定しているので、江差管刹所までであるが、当時の松前半島は海岸線に人口が分布している“フンドシマチ”である事を記す為、延長して、記した。

鶺山道は、中山峠までは大野川の北岸を中心に、鶺川は左岸を中心に障害物をさけ、左岸・右岸を回避した事はいうまでもあるまい。一番の低費用の道路は田沢村より江差までの海岸線であろう。又、道路全般は、郷土史・鶺地区1963や右の写真右側の斉藤ハナ氏の回想「鶺山道は人一人がやっと歩ける程度だった。」がよくこれを物語っている。



山道や 麓長吉 について語る。
斉藤ハナ氏（89右） 菊地ミヤノ氏（遠成寺前坊主・77左）

S 54. 9

（時間的に 20～30 年の差があるが。）

註 1. 麓長吉 文政 9 (1826) 年～明治 9 (1903) 年 行年 78 歳

能登国鳳至郡（能登半島）の農業・仁左衛門の 4 男。24 歳頃江差の商人鈴鹿甚左衛門に仕え本業の呉服行より主人と共に土木業従事。34 歳頃鶺村で仙人となる。安政 1 年と 6 年新道開削に従事。明治元年“土分”となる。此頃主人の勧めで木間内で旅館業を営むが、主人より家号 久と鹿を拝領し 久と鹿を用いる。

註 2. 鈴鹿甚左衛門 文政 2 (1819) ～文久 1 (1861) 年 行年 42 歳。

旧福山藩士 近江（滋賀）出身で父と共に渡道・江差で呉服商質屋を営む。父と長坂庄兵衛と共に“太田山道”開削するが父が急死、当人（甚助）が後をつぎ、“狩場山道”本編の“鶺山道”を私財で開削し、函館奉行より苗字・帯刀を許可される。屋号は 今 店名は橋本屋 顕彰碑は姥神神社にあり従五位を追贈される。

註 3. 長坂庄兵衛 文政 9 (1826) 年～？

津軽（青森）の漁家に生まれ 天保 14 (1843) 年江差に店を出す失敗し、鈴鹿（初代）のすすめでともに山道を開削し、援助を受ける。

註 4. 函館県・明治 15 年 2 月 8 日 開拓使廃止後、北海道に設立された 3 県（函館・札幌・根室）の一つで県令は時任爲基、明治 19 年 1 月 26 日廃止され北海道庁を置く。

註 5. 戊辰・己巳の役、干支順位で明治 1 と 2 年の戦争。

註6. 古来よりアイヌ人が通行しており、冬は硬雪・夏は虫がいないという最大の利点があった。

註7・8 菅佐伯・元南部藩士、弁天台場長で、台場山麓に旅館を建立する爲の願書の添付地図。 地図によれば

1 毛無山よりの道 2 赤ハゲをよじ登る道がある事が知れる。

註9 北海道新聞は“東本願寺北海道開教史(80、100年)” や北海道開教要覧などの“底本”となっている。又、北海道林業試験場道南支場の図書室には。“東本願寺蝦夷地切開之事。大正1年12月7日 函館支庁長の照会により大沼寺院鈴木信雄師の回答書”がある。

(大沼寺院とは真宗大谷派・景雲寺の意)
その他に“東本願寺開道移民記念碑建設之趣意書”が 大正71年7付で大沼公園景雲寺開基住職・鈴木信雄師等の資料ある。



東本願寺 開道移民記念碑
当時より30m東側によっている。
七飯町大沼・景雲寺

S 54.7

※ 編者追記「鶉山道図巻」は、
道立図書館HPで、沢田雪溪画
の39枚が閲覧できます。





市ノ渡園城寺付近 (厚沢部町)



市渡神社 (大野町)



俄虫大橋付近 (厚沢部町)



ホイド穴付近 (厚沢部町)



10. 駒ヶ岳の噴火と本願寺道路

国内には“駒ヶ岳”という名の山は、11か所もあるという。

道内では秀峰“駒ヶ岳”が内浦湾西岸に位置し、古くは“内浦嶽”ともいわれアイヌ名では“カヤベ：ヌプリ”（＝茅部の山）と呼称されていた。火山帯としては、那須火山帯に属する。



“渡島富士”ともいわれる駒ヶ岳（大沼から）

駒ヶ岳は剣ヶ峰 1,140m と砂原岳 1,141m とからなり、スケッチのように山の内側には南北に走る 1.8 km の亀裂がある。

（次頁の駒ヶ岳に於ける本願寺道路）

景観としては山麓に樹木が少なく全山岩石に覆われて、部分的には 33 頁のように高山性植物にも恵まれ、南面には“大沼” “小沼” “葦蔡沼”などの堤止湖によってよりよい景観を形成している。明治 38 (1905) 年～道立公園 昭和 33 (1958) 国定公園



寛永 17 年（1640）噴出の溶結凝灰岩
鹿部町役場前 S. 63.10

駒ヶ岳は元来円錐形（＝富士山型）の活火山であったが、洪積世から沖積世（約 1 万年前＝新石器文化期）の括動期に、山頂部は崩壊し現在の型となった。大噴火の記録としては、一部次頁と重複するが下記の通り。

最古の文献としては、（寛永 17＝1640 年）^{*4} 新羅之記録がある。
6 月 13 日 津波が起こり、昆布漁の船約 100 余艘。700 余人が死亡し、
山麓一帯降灰堆積 1.2～2.0m～

亀尾町の命名者としても有名な庵原 菡 斎によれば、

8 月 26 日 軽石噴火で鹿部：本別は大被害 留ノ湯の
湯治客 22 名圧死～ 函館奉行は活動におおわらは、……

とある

三度目の噴火は、昭和 4 (1929) 年で、新聞記事によれば、

6月17日軽石噴火で噴煙は、約13,000mにも達し軽石は約10時間にもわたり、火口から四方に流出し、鹿都村は降灰の厚さ154cmで壊滅状態であった。

被害は2郡8ヶ町村に及び、農林・漁協の被害は甚大であった。

と報道されている。

右の写真が堆積地層で噴火の回数等を知る事ができる。最上層の堆積灰が和昭和4年の噴火の灰で資料にある150余cm。本編の“本願寺道路”は完全に埋没した。其の後、生活の必要上おおよそ復元し、砂原町字彦濶の青木老人は少年期を回想し、よく「本願寺道路の草刈だ！」と言われ動員されたという、場所は“チャプチャプ川”の上流（明神川）あたりという。コース等については前編を参照されたい。

此の秀峰駒ヶ岳・別名“渡島富士”は最近、周辺住民の間では、「そろそろ噴火の周期に入っているのでは」など噂がしきり。気象庁が周辺5活火山の常時観測を指定しているうちの一つ。

“森観測所”（昭和 12 年設立）が担当している。職員は 3 人と小規模ながら、24 時間の勤務体制である。年間 3 回の火山情報を中心として駒ヶ岳の観測に従事している、昭和 62 年 5 月下旬の現地観測では、

大きな変化はないが噴火したら怖い山、油断できません。

北海道新聞 S62. 6. 11



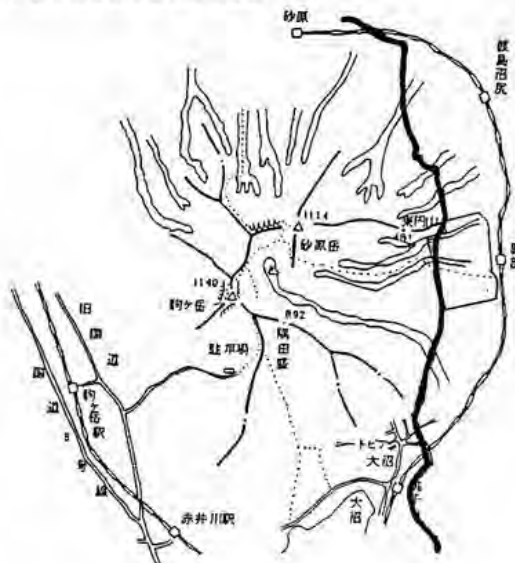
噴火の回数を示す地層
鹿部町本別

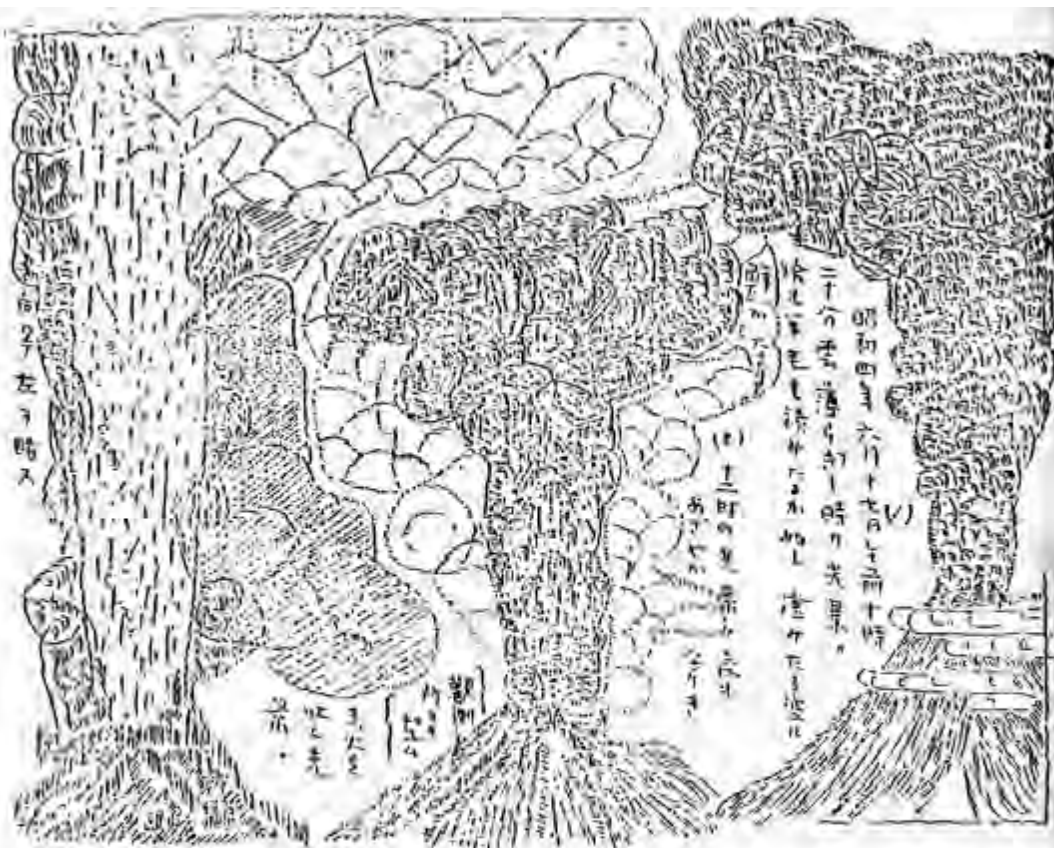
S 63. 10

A、駒ヶ岳略図と登山道



B. 駒ヶ岳における本願寺道路





G 駒ヶ岳噴火の状況

(配元2589年・西暦1929年) 昭和4年6月17日

箱野辺尋常小学校校務日誌

駒ヶ岳 中村正勝氏蔵



昭和4年6月17日夕刻 森町棧橋より噴煙と尾白内浮石流の流出を望む

森地方史研究会蔵

● 駒ヶ岳噴火の略史

- 寛永17年6月13日（1640年）松前の奥内浦岳（駒ヶ岳）にわかに崩れ、その勢いに潮水動揺して津波起り、百餘隻の舟人引かれて溺死。（中略）続震の灰降りて空に満ち、一日一夜日月の光影を見ず、天地の振動ひま無し。

＜新藤之記録より＞

- 天明4年1月19日（1784年）詳細不明
- 安政3年8月26日（1856年）大石当り氣絶する者多く、人々櫓をかぶり鍋釜を笠にして逃げ、斃死する牛馬數知れず。

＜箱館奉行支配下庵原出資の巻より＞

- 明治14年10月25日（1881年）小噴火
- 明治21年4月4日（1888年）小噴火
- 明治38年8月19日（1905年）中噴火
- 大正8年6月16日（1919年）小噴火
- 大正11年5月22日（1922年）噴煙
- 大正12年2月27日（1923年）噴煙
- 大正12年3月15日（1923年）噴煙
- 大正13年7月31日（1924年）小噴火
- 昭和4年6月17日（1929年）大噴火
- 昭和12年3月17日（1937年）噴煙
- 昭和17年11月16日（1942年）噴煙

森地方史研究会絵葉書

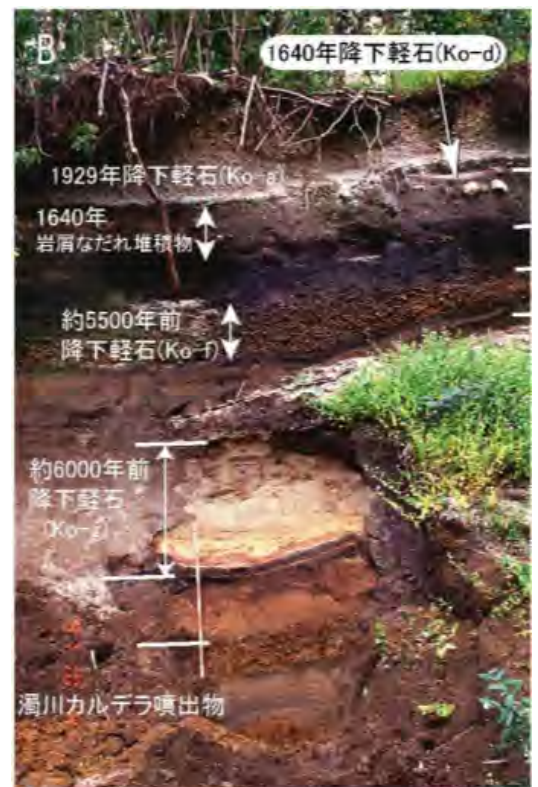
註1. 駒ヶ岳の名称は本島に1カ所。
他は本州（三省堂・地理サイエンス）

註2. 他に「渡島富士」ともいうが、
駒ヶ岳の名の由来については、
a、馬に似た山容から。
b、相原周防守がアイヌ娘30余名を
人身御供とした事により、アイヌ軍
に攻撃され、愛馬を山に追い上げた
事による。

註3. 開拓長官・黒田清隆の命名、

註4 寛永20(1643)莫命により松前藩
（松前景広）編纂の歴史書

註5. 昭和58(1983)年より町制施行。



歴代の降下軽石堆積物と
濁川カルデラの噴出物

※ ↑ 編者追加

11. 桔梗野の開拓

莫府は北方防備を中心の策に、蝦夷地の再直轄化（＝後期幕領時代）を計り、それに乗じて、仏教界の各宗派も蝦夷地の開教及び教化に積極的態度を示した。特に西本願寺は、安政4(1857)年 小樽・箱館の寺院建立に次いで、箱館郊外の濁川（現・上磯町清川）に、55万坪の開拓が許可され、他に曹洞宗・日蓮宗なども同じような動きを示した。このような状況に対し、東本願寺は蝦夷地に関しては、専念寺にまかせる方針を変更し、本山自身が開拓・教化にのりだした。本山使僧として、齊聖寺の徳善が派遣され、種々の交渉にあたった。時恰も後期幕領期で、政経の中心地は、箱館であり、本山としては専念寺の掛所

“浄玄寺”がある。徳善が交渉の結果、年額50両で「本願寺箱館御坊」となった。安政5(1858)年12月の事であった。直轄化した箱館御坊は一寺九坊を有する蝦夷地に於ける中心機関として、下記の事業（＝国策）に進出していく事となる。ここでは、函館郊外における“桔梗野の開拓”を中心に考えていきたいと思う。



国道5号線、函館市桔梗町～七飯町字峠下までの14.3kmに並ぶアカマツの並木。それが「赤松街道」です。日本の道百選、歴史国道、土木遺産に選定されています。

桔梗野の開拓は、岩内御功・小樽御坊の建設予定など、先の徳善の踏査によるもので、その前進基地としての性格が強く打ち出されている。

桔梗の開拓は、東本願寺21世法主・巖如上人（人谷光勝）の命によるもので安政6(1859)年2月に、箱館御坊・開明が現地踏査し、4月齊聖寺徳善が箱館奉行・堀織部正に出願し、同奉行役人・坪内幾之進の世話にて許可となり「東本願寺開発場桔梗野」（＝六郷安寧村）として開拓に着手した。入植者は主に能登・南部・越後の檀信徒など19戸で、翌万延1(1860)年には21戸となり人口は62名を数えるにいたった。住居は比遅里<ヒジリ>神社の北側に位置する池見石油のスタンド（現・函館市桔梗23番地）の地に、3間×15間（30坪）の長屋2棟を建設し、本山より今後3ヶ年にわたり、男子 玄米7合・味噌30匁・女子は 玄米5合・味噌20匁、子供には女子と同量を支給、他に鍋・釜・手桶・耕牛馬各1頭・農具を無償給与した。又、彼等の住居先には右のような表札を配布した。

桔梗野御百姓に御取立候事
年 月 日
函館御坊
㊦

開拓の規模は現在の桔梗駅 (2.7 Km) より軍川境 (20 Km) まで、耕地 700 坪・秣草場 (含・牧場) で約 566, 000 坪である。また、開拓の指導・教化の機関として、同年 7 月に桔使野別院 (出張所) が建立され、木山より “御本尊・聖人御影” が下付されたが、箱館奉行・小出大和守秀実より広大寺の名称が將軍と同名であるのでとの勧告により、現在の “宝皇寺” と万延 1 (1650) 年に変更した。



本願寺用水 S 63. 1
北海道林業試験場道南支場前

開拓地は高台の爲、水利に不便をきたし供給する必要から、建築用材を切りだした障子山付近の念仏沢・タタラ沢より、幅 5 尺 (1. 5m) 深さ 3 尺 (90 cm) 距離 1 里半 (6 km) の用水路と共に、農道をも開削した。その時期は万延 1 (1860) 年 8 月から約 2 ヶ月間で費用は 390 両を費やした。その結果、農業用水・飲料水の他に製粉・製米用にも利用されるようになり、戸数・人口には多少の増威はあったが、着実に繁栄した事は後記の資料により明確と思う。給水路と同期に、開拓地と七重浜 (福山街道＝国道 2 号線) とを結ぶ連絡路の必要から、用水路と同時に、先の比遅里神社西側より七重浜間の直線 800 間 (1. 6m) 幅 5 間 (9m) の砂利道と両側に側溝として幅 6 尺 (1. 8m) 深さ 4 尺 (1. 2m) さらに中国式に柳を 1500 本移植した。この地域は湿地帯 (谷地マナコ) で人馬も埋没するので 1. 2 m の排水溝を設置し、柳を植樹すると云う配慮は、地形的 (=地形図的) にも大きく湿地帯を意識したと思われる。費用は 2840 両を要し、翌 2 月完成した。地元の古老は用水路付随の農道と共に “本願寺道路” と呼んでいる。しかし、現在は用水路付近の道路闊辺は、すっかり住宅地化し “旧国道” と呼び、七重浜間の道路を “30 km 道路” (市道・亀田上磯 1 号線・2 号線) と愛称で呼んでいる。

いずれにしても、先の発展ぶりは

「桔梗沿革誌」昭和 33 年 9 月・桔梗開期百年記念協賛会編) によれば、

・万延元年 (桔梗野耕作取調)

一、家数	二十八軒	一、田	一万三千坪
一、人数	九十五人	一、畑	六万五千坪
一、馬数	七十六疋		

・明治四年七月 (能登寺より開拓農政役所への報告書)

一、男女人別	百二十四人	内男	九十六人	女	五十五人
一、馬	七十三疋	牛	ハ無之候事		
一、秣草場	凡五十六万八千坪	但谷地共			
一、神社	一ヶ所	但聖徳太子			
一、寺	一ヶ所	等山掛所			

と記されている。

しかし、明治4(1871)年の廃藩置県に関連し、上知令に際して5月14日付で、箱館御坊・能登寺の元輩より開拓使に対して、「桔梗村」としての一行政村として認可して欲しい旨申し出た結果、同月18日付で、「願之趣聞届以後桔梗村相唱〜。」と認可された。今日でも地元で生れた80才以上の古老は、住宅地化された“函館市桔梗町”を昔懐かしい「桔梗野」と呼ぶが、それは“初夏に美しく紫色の花を風になびかせる台地”であり、それを今日の我々に伝えているのではなかろうか。本山は、一ヶ村とし独立を認可された桔梗村に対して、村内の整備基金として500両を下付した。



また、開拓奨励の機関としての桔梗野別院（函館御坊の出張所）現・宝皇寺は、明治11(1878)年10月に、“寺院明細帳”の更正に際し、一般末寺となり函館別院の間瀬徳温師が、住職を拝命するに至った。宝皇寺は明治5(1882)年に旧道より現在地に移転（資料参照）したが、昭和22(1947)年に御本尊を残し全焼した。開教に関する重要資料は焼失し、現在のところ詳細は不明である。現在の堂宇は昭和46(1971)年の建立による。昭和63年3月に建立130年の大法要が行われた。

12. 資料編

（転記に際しては新字体で横書きとした。）

1. 「北海都^{みやこ}新聞」

明治四十二年五月四日（土曜日）第二十三号

大谷派本願寺光演法主歓迎号 市立函館図書館蔵

目次 ○彩如上人を迎ふ

○総論

○彩如上人略歴

○前法主略歴

○学館時代の彩如上人

○北海拓殖回想記

○北海記聞苦屋の夢

○明治十四年前法主本道巡教誌

○第三回の巡教

○本道と大谷派

○本道と大谷派の布教

○本道と大谷派の教育

○本道と大谷派の慈善事業

○大谷派と本道各監獄

○大谷派と拓殖事業

○北海津梁日乗

○俳人としての句仏上人

○諸規則

○北海道拓殖回想記

○結論

○北海道拓殖回想記——鷺田至誠氏直話

※ 関係部分のみ転記

○北海拓殖回想記——鷺田至誠氏直話

※ 関係部分のみ転記

(三) (要旨のみ)

材料採取の史資はすでに散失し、現如上人一行の総数は一百八十余人だが九割は故人となっている。残ってる人も病人や老人性痴呆症の人々が多く困難である。幸に当年三十二歳で右筆として列した鷺田至誠<シジョウ>氏、大阪の勝光寺前住職・足立師、京都の樋口氏等の記憶や記録によって当時の状況を記述する。

(十三)

新開削の道路 此間に於ける新道開削の概況は次の通りである。

(一) 軍川より佐原に通ずる六里半の新道 所謂、駒ヶ岳の半腹を通ずるものである。

鷺田氏は家老宇野三右衛門氏と共に、遠州金谷の西照寺住職並同行某等を一行に加えて、此道路開削を命ぜられた。

七月の十日に皆々乗馬で函館御坊を発足、此夜大野泊り、翌日の昼、軍川に着、山中案内者を雇入れて進んだ。草深く樹の多い荒野の騎行は頗る困難であった。止むを得ず馬を戻して歩行したが、霧深くて方角を失い、山中で遂に夜に入って仕舞った。おまけに数頭の狼に出喰はした。用意の鉄砲を放って苦戦多時、夢中に草を分け、樹によじ、溪を渡って丑の刻に佐原へ着いた。(※江戸絵にここの事が出ている) 翌日佐原で人足十数人を傭入れ、切開きを取掛った。皆は狼の為に鉄砲を離さずに仕事をしていった。切り開いた要所には「東本願寺切開新道」若しくは「勅賜東本願寺管刹地所」の標柱を、数本立てゝ進んだ。現に鷺田氏も四五本執筆した事を記憶して居るとの話である。

八月三日に佐原から乗船して室蘭へ着いた。旧幕府当時の室蘭は相応に繁昌した駅であるけれども、此の時分は寂寥たるもので、当所第一の旅宿というに投じたが、雨もりの傾きかけた家であった。ここから佐原に引返して、八月中旬に函館に着いた。

(二) に山鼻から発足駅に至る一里の新道、当時旧道の根跡があった。

即ち屯田が山鼻に開けて新道が設けらるゝ様になって人跡を絶つに至ったものである。これを幅三尺強に開いた。

(三) 鶺鴒入口から「イナクライシ峠」を切開いて大野毛無峠に出る十一里半の新道路である。これは江差旧街道で、本山は麓長吉なる者に命じ、金一千両を投じて開削せしめたもので、人家の漸く建つ様になったのは、これ以後の事である。

(四) 俄虫から鶺鴒峠の脇まで七里半の道路 橋が四ヶ所ある。本山は金一千五百両を投じて幅九尺に修成したのである。

(五) オサカイから一ノ渡まで七里の道路 橋五ヶ所、これも幅九尺であるが、出資金は不明である。

兎も角、以上各通の道路開削に就て、各人夫三十人、賃金一日四貫文、約五ヶ月宛を費した。

(六) 札幌から尾去別に至る二十七里余の新道路、最長路の随一である。
測量方、大浜和助。 会計方、村上義有、人夫取締には土入頭の「リキリウタ」
「ヲワツカ」等さえも備入れて、伊達家の人夫五十人（当時、伊達藤五郎なるもの、家臣多数を従へて移住して来たもの、殆んど衣食の道に困窮して居た矢先で、之を備入れたのであるが、彼等は之で大に活路を開き、喜んで服役したのであった。）それに和田人夫五十人（これも移住民で、中には大工等の職人が多数を占めて居たので使用に多大の便宜を得た）是等が、笹藪の荒野を、道幅九尺、伐木は三間づ刈剪削したのである。竹や木の束を道に横たえて拓くのであるが、一日かゝってやっと一町程しか進めなかったというのだから、其困難はけだし予想外である。それで人夫の給金は笹刈一人一日賃金一分、伐木人夫一両二分（但し、伐木周囲一尺のものは特に二十八文を給し、五寸以下は人夫持と定められていた）。

工事は約一ヶ年半で竣功したのであるが人夫一日に、ざっと百人として一ヶ年半で五百五十日、この人夫五万五千三百人になる割合である。で、会計掛に人夫賃として下付した金額のみで、四千両と記されてある。此工事が竣工するや否や、官から「石山」を下賜せられる特旨があったけれども東本願寺では固く辞して受けられなかった。

因に、此際使用した開削道路の図面が江差佐平次町（山ノ上）鈴鹿善右楯門方に所蔵せりと伝へられている。

※（十三）とほぼ同文の資料として、「東本願寺蝦夷地新道切開之事」の題に依り、元渡島支庁林務課長・弘中徹世氏が、大紹寺院（真宗大谷旅景雲寺）に照会の結果の大正1年12月7日付で回答したものが、北脱道立林業試験場道南支場の図書室にある。

※続く○北海道拓殖回想記（十四）は、83 ページに掲載されています。
なおこの都みやこ新聞のマイクロフィルムが道立図書館にあり、プリントした目次が次のもので、**北海記聞** **苦屋の夢**とありますが、マイクロからのプリントでは鮮明に読めないなので、HP で検索の結果 **国立国会図書館デジタルコレクション** 000000465678 がありましたので、キャプチャしてその一部を**追録1**として掲載してあります。

○ 彰如上人を迎ふ	○ 彰如上人略歴	○ 前法主略歴	○ 學館時代の彰如上人	○ 北海拓殖回想記	○ 北海拓殖苦屋の夢	○ 明治十四年本道巡教誌	○ 第二回の巡教	○ 本道と大谷派	○ 本道と大谷派の布教	○ 本道と大谷派の教育	○ 本道と大谷派の慈善事業	○ 大谷派と本道各監獄	○ 大谷派と拓殖事業	○ 北海津梁目録	○ 俳人としての句佛上人	○ 諸規則	○ 結論
-----------	----------	---------	-------------	-----------	------------	--------------	----------	----------	-------------	-------------	---------------	-------------	------------	----------	--------------	-------	------

2. 「田村新九郎の嘆願書」

明治三年七月函館市佐藤任氏蔵

謹上再拝胆振国之附有珠郡ヲシャルヘツ川筋ヨリ石狩国札幌郡江新道相
開候ハバ東西地通路頗ル便宜ヲ可得申越先年ヨリ見込有之尤土人等敢テ
往行致候綴モ有之、哉二付其道筋探索為仕候処僅二数里之山陝ヲ開候ハ
ハ大抵平担二十余里ヲ不出シテ道路出来日] 仕且有珠港ヨリ森江渡場相
開候ハハ風波之便り至テ宜ク函館表ヨリ石狩本府江海陸四十余之住還二
モ罷成頗ル駄程人馬之費ヲ省キ当時御開国第二之御利益ト奉存候今般御
門主様北佃道御切立之儀御委任被為蒙御道々御踏渉開国日新之御盛業御
賛成被成上候俵ト奉伺早雲寛ヲ竿ム力如ク奉欣勤歛感候依り奉候ハ右新
道速ニ御切開被成下人馬傭役休泊所造架橋物而之土木当郡江御委任被成
下度奉存候伊達藤五郎隼当春先以家来男女二百五十人移住仕勉強開墾罷
在候処今般改テ室蘭郡会所元増支配被仰付両郡ニテ傭役可仕丁之男児和
人土人取合三四百人相減不申尚来春ハ大人移住モ為仕屹度開拓之実効可
奉奏ト上下一同励精尽力罷在候折柄ニモ有之既ニ農業漁業闡隙之籠ニモ
御座候、 } ハ早速取付申候ハハ人馬傭役之便宜ヲ得格別御入費相威候事
ニモ可罷成候右新道路落成之御入費年月之遅速等ハ別而見込モ口] 申上
候得共尚亦候向方御探索之上至急御詮議罷成御委任被成下度府仰奉墾願
候衷謹言。

明治三年七月

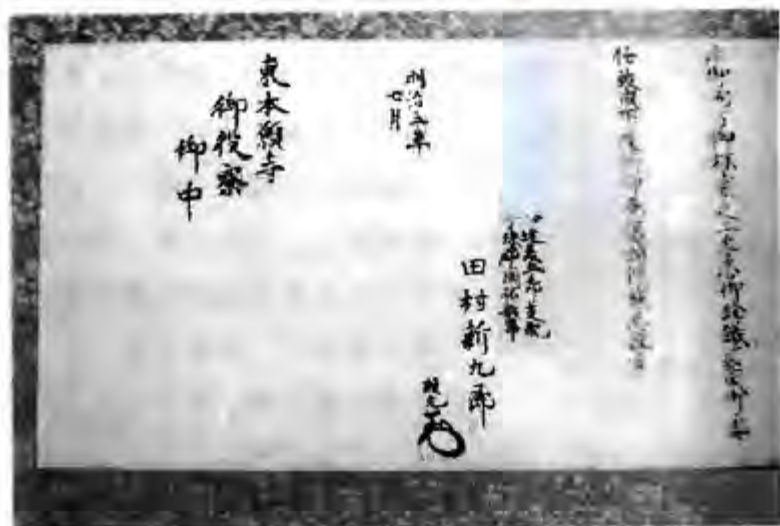
東本願寺 御役寮 御中

伊達藤五郎支配
有珠郡開拓執事
田村新九郎
頻允 花押

※左記の書は元・函館市
立旭中学校長・佐藤任氏の
所有のもので、祖先伝来の
書（亘理藩士）という。現
在は瀾間額として保存され
ている。

撮影

昭和 56 年 5 月 21 日



亘理の本山に対する嘆願書

3. 「東本願寺開道移民紀念碑建設之趣意書」

但シ碑文起草ノ資料趣意書二代用ス
七飯町峠下長川清悦氏藏

王政維新ノ初、明治天皇都ヲ東京ニ遷シ、万機ヲ親裁シ賜フヤ、天下既ニ
平シ海内統一ス、然レトモ幕末ノ遺臣、順逆ヲ誤リ、北海ノ一隅妖雲尚ホ
未タ去ラス、乃チ官軍大挙函館附近ニ転戦シ、遂ニ叛徒ヲ欺定ス、皇風蝦夷
ニ光被シ、開道移民ノ氣運頗ニ熟ス、實ニ是レ明治ニ於テ二年月也、是ヨ
リ先、北辺ノ警備益ス多事、異船外船領海ニ出沒シ、動モスレハ土人ヲ懷柔
シ我力版図ヲ如キ亦タ其残余タリ、上下人心洶々トシテ定ラス国家ノ安危
亦測ルヘカラサルモノアリ、切チ、聖上陛下哀襟ヲ悩マサセラレ、明治元年
三月九日、太政官代ニ出御シ、重官ニ向テ蝦夷地開拓ノ事ヲ諮ハセ賜フ、同
二年五月、詔シテ日、蝦夷ハ皇国ノ北門ニシテ山丹満州ニ接シ、經界アリト
雖モ中外雜居ス、方今ノ要務ハ禍ヲ未然ニ防クニ在リ、夷ニ施シ人民繁殖ノ
域トナサントス、函館平定ノ後ハ速ニ開拓教導ヲ蝦其利害得失各々意見ヲ陳
シ忌憚ス我東本願寺嚴如法主、夙ニ勤王ノ志厚ク、維新ニ国帑ノ疲弊ヲ慨
シ、軍資及ヒ根米若干ヲ獻シ、今又タ蝦夷開拓ノ聖旨ニ感激シ、報國ノ忠誠
ヲ證サンカ為メ、重臣下問大藏卿ヲ東上セシメ、蝦夷地新道切開、移民獎
励、教化普及ノ三ヶ条ヲ具シ、奏請セシム朝廷之ヲ嘉納シ給フ、同年八月廿
五日、現如法嗣（当時ノ新門主大谷光蛸伯爵）東上参内天機ヲ奏伺シ勅旨ヲ
賜ハリ、尋テ兵部卿ノ宮、及ヒ三条、岩倉、坊城、久我、廊堂ノ諸公ヲ訪テ
開拓殖民ノ意見ヲ陳ス、八月二十九日、太政官ヨリ蝦夷地新道切開ノ御沙汰
書ヲ受ク、九月十八日太政官ヨリ各府藩県対シ、東本願寺開道ノ事及ヒ移民
奨励ニ応スヘキヲ布告ス、是ニ於テ蝦夷地開拓ノ大命ハ我力本願寺ニ下レ
リ、国家ノ重事、開山奮テ必成ヲ誓ハサルヲ得ンヤ、本山テハ全国門徒ニ布
告シ、奉公ノ大義ニ某キ勤王ノ忠誠ヨリ懇念ヲ運フヘキヲ論シ、諸代ノ重
臣、及ヒ役僧数十名ヲ撰ミ、開拓御用掛ヲ命シ大ニ準備ヲ進ム、九月五日、
加藤徹雲ニ命シ、実地檢分トシテ先發セシメ、尋テ用掛主任松井逝水以下五
人ニ調査ヲ命シ、九月廿日開拓使御用船昇平丸ニ搭シ、横浜ヨリ北海ニ航
ス、明治三年二月十一日、松井逝水調査ヲ了シ、道路開削ノ設計ト寺院創立
地十五ヶ所ヲ撰定シ、歸山復命ス、要ニ日蝦夷地ノ鍛ハ周廻ノミ道路アリ、
山中一切道路無之、差当リ新道切開キ、石狩、久摺、十勝ノ深山モ、追々開
通ハ達ノ域ニ相成候様可致云云、嗚呼是レ開道剪頭ノ理想ニシテ、大局ヲ達
觀シタルノ斷案ナリ、本道五十年ノ歴史ト今回ノ發達ハ、恐クハ此ノ理悲ニ
胚胎シ實現シタルモノニ外ナラス、即チ開道ノ最大ノ急要ハ、函館ヨリ中央
政庁ヲ置クヘキ札幌ニ達スルノ、幹線道路ヲ開削スルニアリ、例テ先ツ函館
ヨリ軍川村ヲ經テ駒ヶ嶽ヲ横キリ砂原ニ至リ、渡航ヲ以テ室蘭ニ涉リ、海ニ
沿テ有珠ニ出テ、虻田ヨリ峻山九腸ノ道ヲ越テ、札幌ニ達スヘキ新道開削ノ
計ヲ立ツ、蓋シ文化年間、近藤煎蔵初メテ之レヲ祓涉シ、安政年間、松浦武
四郎ノ再踏ヲ經テ、未タ着手セサル予定道路ナリ、當時松浦武四郎ハ、開拓
判官トシテ職ニアリ、本願寺開道ニハ参同候モ深カリシ、是即チ函札間ヲ一
貫スル幹道ニシテ、後年到ル所ニ斷続セル旧跡シ、口碑伝フル所ノ本願寺道
路又ハ札幌街道ト称スルモノ是ナリ、明治三年二月十日、現如法嗣ハ年齢十

有九二シテ、北海開拓ノ大命ヲ奉シ、重臣僧侶一百八十余名ノ随伴ヲ率ヒ、勅書ヲ奉持シテ、堂々タル儀烈ヲ整へ、京都本願寺ヲ出発ス、途次近江、美濃、尾張、信濃、越後、羽前、羽後、陸奥ノ諸国ヲ、經由シ、其間曲陸具サニ行路ノ難ニ遭遇シ七月七日青森港ヨリ、庚牛丸、環嬴<カンレイ>丸ニ分乗シ、函館管利ニ到着ス、官民ノ歡迎熾烈ヲ極ム、翌日、現如法嗣ハ開拓使長官東久世通禧卿ニ会见ス、此ニ部署ヲ定メ、法嗣ノ一行ニ從ヒテ札幌ニ赴クモノト、新道開削ニ從事スルモノトヲ分チタリ、斯クテ法嗣ノ一行ハ、七月十二日函館ヲ発シ、桔梗、大野、落部、長万部、黒松内ヲ経テ、歌棄、磯谷ヲ過キ、騎馬ニテ雷電ノ險ヲ越へ、岩内、余市、小樽ヲ過キ、同廿四日、札幌本府ニ到着ス、当時札幌ハ広漠無人ノ原野ニシテ、熊鹿ノ生息スル外ニ部落ト見キ人家モアルナシ、法嗣ハ十文字大主典ノ役宅ニ仮寓ス、本府ト雖モ実ニ狭少ナル仮屋ニシテ、一行ハ之レ宿泊ス、当時ノ困苦察スルニアリ、然レトモ爰ニ長途遠来ノ目的ヲ遂ク、開道拓殖ヲ督励シ、移民教等ノ実ヲ挙ンカ為、札幌管利ヲ創建シ、勅賜本願寺管利地所、開拓山浄土真宗院拝領地ノ柱杭ヲ建テ、用掛若干ヲ留メテ後事ヲ任シ、法嗣一行ハ歸路ニ就ク、札幌新道開削ノ起点ハ、亀田郡七飯村字軍川ニ在リ、古米、藤城越ト称シ、僅カニ樵徑ノ通スルアリ、本開削ニ囚テ、軍川ヨリ留ノ沢ノ險阻ヲ越へ、佐原彦潤ニ至ル、九尺幅六里半ノ新道ヲ開ク、里数短縮スト雖モ困難ヲ極ム、此開削主任ハ家老、宇野三右衛門、鷺田至誠並ニ金谷西照寺ニシテ、工事ハ区間請負ヲナサシメ凡ソ一年余ニシテ竣工ス。鷺田至誠ノ日記ニ曰、新道見分ノ為七月十日函館ヲ発シ、翌日軍川ニ至リタルモ、密林鬱蒼トシテ騎行スヘカラス、馬ヲ戻シ徒涉セシニ、濃霧ノ為ニ方向ヲ失ヒ、山中ニ迷テ狼群ニ襲ハル、即チ鉄砲ヲ以テ防戦シ、草ヲ分チ、樹ヲ挙テ、溪ヲ涉リ、辛シテ佐原ニ至ルヲ得タリ、共要所ニハ東本願寺切開新道ノ標杭ヲ建タリト記セリ、

第二開削ハ、有珠郡伊達村長流ヨリ、札幌ニ至ル廿七里余ノ新道ナリ、測量方大浜和助、会計方村上義有、人夫取締トシテアイヌ土人酋長、"リキリウタ" 及 "ヲヤワッカ" ニ命ス、伊達家ノ人夫五十人、和田ノ人夫五十人、都合百名ノ人夫ヲ使役シ、約一年半ヲ以テ竣成ス、此延人員五万五千三百人トス、

第三ノ開削ハ、本郷一ノ渡ヨリ江差ニ至ル、廿三里ノ江差旧街道ニシテ、鶺鴒稲倉石等ノ險阻アリ、橋梁最モ多シ、麓長吉ヲ案内者トシ、鈴鹿甚右衛門等ニ区間受負ヲナサシム。



中山峠東側の駅跡
オゾ（一位の木）は2世。宗教部員と大野町文化
会員（佐賀・花巻・木下の各氏） S 57.7

第四開削ハ、札幌山鼻ヨリ発足ニ至ル、一里ノ新道ナリ、以上数線ノ道路ハ、今日ニシテ之ヲ見レハ里程幾許モナク、土功亦タ易々タルヘシト雖モ、創始時代ニ於テハ、車馬通行ノ道ナク、駅通郵便ノ便ナク、食糧器具等、物資ノ運搬ハ人肩馬背ヲ以テセルヘカラス、而モ到ル所、險崖溪谷アリ、密林沮洳アリ、山ニ梯シ水ニ浅シ、斧鉞鋤鍬ノ工ヲ施シテ辛シテ、一路ヲ通ス、其困難想像モ及フヘカラス、本願寺道路開通以來、石狩以南ノ交通ハ専ラ該道ヲ利用シタリシモ、物代リ星移リ、漸ク車馬鉄道ノ便開クルニ及ビ、或ハ改修セラレ或ハ廢道ニ歸シ、今日ニ至テハ殆ント原形ヲ失ヘリ然レトモ當時二年有余ノ年月ト黄金總計四十万兩ヲ費シテ竣成ヲ奏シタリシハ、維新後未曾有ノ大事業ニシテ、官民共ニ驚歎セシ所ナリ、後年ニ至リ其功績ニ對シ、朝廷本願寺ニ重賞ヲ賜ヘリ、斯カル顯著ナル開道ノ歴史モ、時世ノ變遷ニ依リ、漸次世ニ忘却セラシ、五十年後ノ今日ニ於テ、此ノ史実ヲ熟知セルモノ果シテ幾許カアル、真宗末徒タルモノ豈ニ浩歎ニ堪ンヤ、爰ニ大正七年八月、開道五十年ニ際シ、札幌ニ於テ記念博覽会ヲ開催セラルヽニ方リ、拓殖ノ先驅者タル本願寺ノ門末、焉ンソ今昔ノ感起ヲサル得ンヤ、蓋シ一派ノ貢獻ハ、固ト王法為本ノ宗是ニ基クモノニシテ、独リ真宗ノ隆昌、他ニ卓越セルハ亦タ偶然ニ非サルヲ覺エ、仍テ、奉勅開道ノ史実ヲ叙シ、風教ヲ神益センカ為、全道ノ門末ヲ代表シ、開道起点ノ地タル軍川村大沼公園ニ、紀念碑ヲ建設シ以テ鴻業ヲ不朽ニ伝ヘント欲ス、本案ハ、建碑委員会ノ囑託ニ因リ、起草セシモノニシテ、惜哉、資料散逸シテ収集スヘカラス、然レトモ編者ハ敢テ、当代ノ重臣タリシ、下間頼世、栗津元享、川邦辺図書、石原源在衛門、及ヒ加藤徹雲（後ニ加藤九郎ト称シ成嶋柳北ト共ニ新聞事業ノ創始者ナリ）等ト親交アリ、余談ノ間ニ聞知スル所少ナカラス、依テ断片的旧記ト、当事者ノ談柄ヲ綜合シ、本案ヲ認ム、而シテ冒頭年月ヲ記スルモノハ、皆正確ナル典拠アルモノニシテ推測ニアラス、今碑文撰定ノ材料トシテ之ヲ提供スルト同時ニ、一派門末ニ於テモ、當時ノ事狀ヲ回想セシメンカ為、活版ニ附シ、建碑趣意書ニ代ヘテ之ヲ配布ス、読者深リ不文ノ罪ヲ責ムルナクンハ幸甚ナリ



明治二己巳年十一月迄札幌之図 / 高見澤權之丞

この時代アイヌ2~3軒と和人は二軒【7人の住人】

大沼公園景雲寺住職

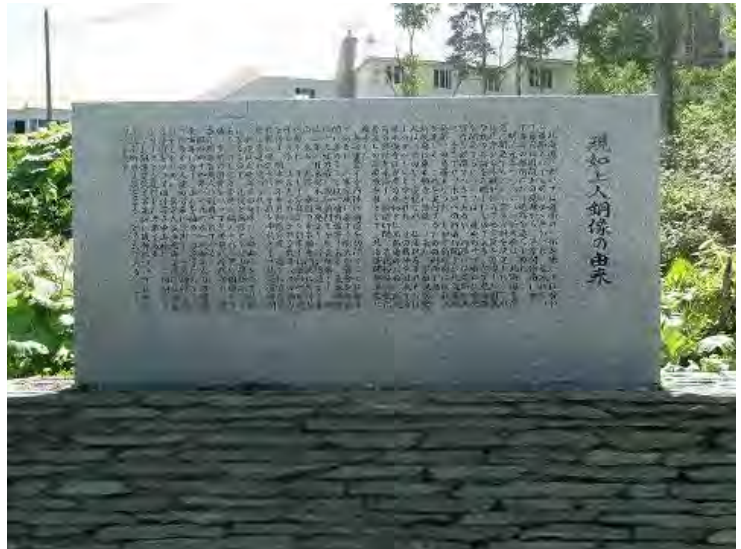
鈴木 信雄 数白 大正七年七月

4. 「現如上人銅像の由来」

虻田郡喜茂別町＝中山峠



銅像の手前が由来碑



碑文

北海道に於いては道南の一部を除いては昔から道路というものは全く無かった。幕末になって幕府は国防上の見地から、漁業関係者に命じて海岸の難所だけ道路を造らしめた。明治元（1868）年 新政府は、北海道を早急に開発するという基本方針を決定した。これは北方から外国が侵入する危険を憂慮した国民多数の与論を反映したものである。さて北海道を開発するには、道央のサッポロに中央官庁を設置すべきであるが、内陸には道路がない、そこでサッポロへの新道切開きが北海道開発第一の急務となった。

しかし、新政府には収人が乏しくこれを実行する為の財源が無い、新政府は東本願寺に懇請して来た。宗祖親鸞聖人は「世の中安穏なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべし」と申された。その精神を継承する。

東本願寺は世界の平和と仏法弘通のため、新政府の懇請を承諾し「新道切開・農民移植・教化普及」の三要項を柱として北海道開発事業に着手した。

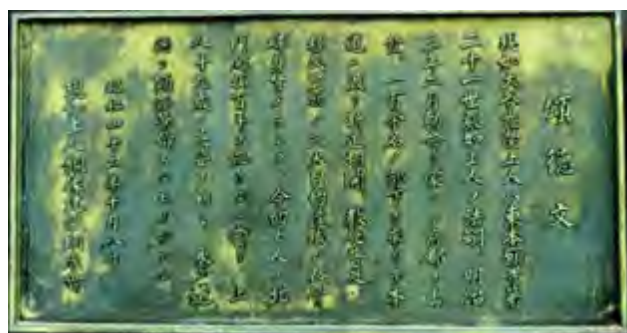
山岳重畳たる内陸に新道を切開くことは難事であるが、工事完成に要する膨大な資金を短期間に集める事は一層の難事である。東本願寺は十九歳の若い現如新門主を総責任者とし、明治三年二月京都本山出発より一行が通過する東海道 東山・北陸・奥羽の東本願寺門徒に寄付を依頼した。

そして京都より引率した僧俗一百数十名の外、仙台支藩の武士や多数の人々の協力を得て、明治四年七月新道完成直ちに官庁が札幌に開設され、それを中核として北海道の開発は急速に進められた。新道は太平洋の有珠から中山峠を経て札幌に至るもので、札幌と結ぶ最短距離である。

のち地方費道に編入され、更に国道に昇格、多額の国費を以って大規模に改修され、現在年間数百万人に利用されている。

昭和 44（1969）年 現如上人の渡道開教百年に当たり、上人を始めこの工事にたずさわった多くの人達の労苦を感謝し、その功績を顕彰せんがために、真家大谷派北海道教区は僧俗の浄財を以って囚緑深き中山峠に、この銅像とレリーフを建設した次第である。なお銅像建設工事並びに護持については地元喜茂別町の支援を蒙ること多大である。記して謝意を表する。

次のように刻まれています。



「頌德文」

[illegible]

昭和四十二年十月八日
現如上人銅像建設期成會

5. 「鶉山道図巻」の巻記

石田柏陽（良助）著

市立函館図書館 蔵

龍山遁園叢記

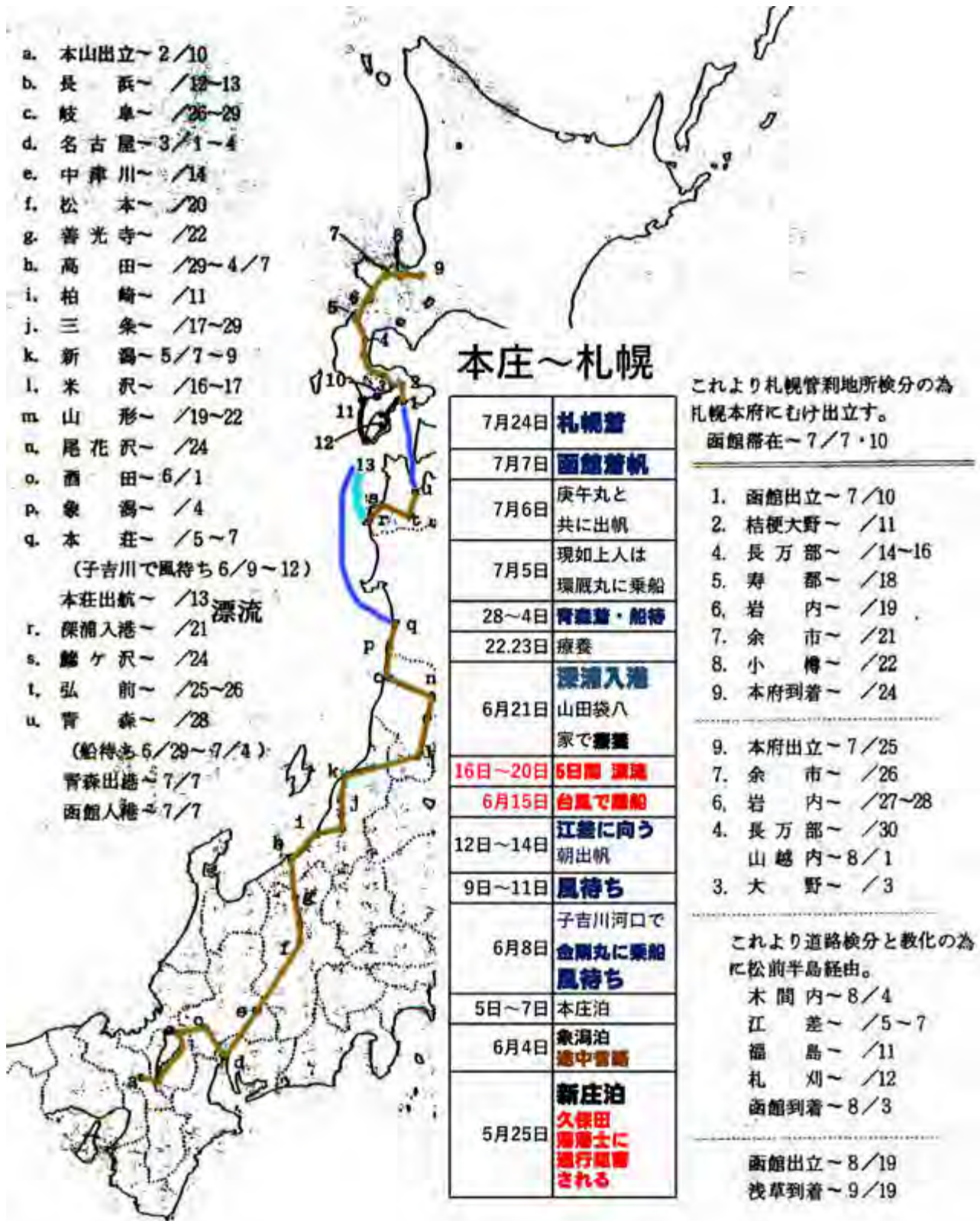
州邑之通縣實稱人身之脈絡以導人而脈絡既通氣血州而為政望塞何以期戶曉廢故古今治郡者必先務此蓋為治必有路猶如山有車馬山之向背布治何從凡十餘里最為險阻舉峻峯位河谷大折西轉行輪皆重而運一步一喘其勞果如何也蓋其害兩連保水壘斷群之機則決水滔區土石崩為人轉為壑者幾歲不絕上以居民既久矣城即棄寬政奈何江蘇南東側月能相倚天殆無出必館之選而為然然勢奪奔厥唯推源係由之而去未得往來之便出於元吉甲寅夏六月市渡打備道仙者與臨村人黃長告謀之所遂遂以自南長告有此期以中央小港沙面切逆不諳而翼至東延後街之者為兵起時可知也夫西鎮江差之匪賊名可以以此而愈久之遠太極漸相見及諸部水陸相連百江差法人聚多物皆虞自受劇計其法都正領陳當江差之術補層密相顧聯絡相通且逢商春時漁會以集俗蹈以儀點是為之理察既知縣豈可期其防禦乎以是開始使所試其重所令使處而帶製明治十八年巡防駐紮某邑觀工向半而難擅廢非海道應亦不其後若金刑官修低塘川樓卷之時至今茲而成十一月工全了其程如砥可直如矢車馬可暢行負載可闊步於是乎往來之便如運無塞物者可乘生靈可以安舒抑且迅速課費極神交快如昔之始可期其休養也讀者聞曰甯院閉工業之狀斯以傳雖代列庭之佳例於法世余習其十數年耳取身先確證一即泰切萬要永亨居海之觀之射今當云捷速運子所之是其價值哉言與否不覺森森若刺紙

明治元年七月

76
77

石田真動記

6. 現如上人巡教行程図



道内御休泊所一覽

北海道開教日誌

一七〇日之間御逗留ニ從テ蝦夷地ニ御發達相成	御昼 法皇寺	御泊 大郷寺	御小休 八郎兵衛	御昼 茶屋總安衛
------------------------------	-------------------	-------------------	---------------------	---------------------

3

是より先に入
る民を多
くをりた
るをりた
念仏唱せ
る心ハ
お通一もの
お供の
御休の
御休の
御休の

ヲコツナイ	ユヤツ	フイタナイ	クハユワ	クハナイ	クニナイ	長万部 ワラビタイ
--------------	------------	--------------	-------------	-------------	-------------	----------------------

5

御小休 本屋長門	此處ニ駒ヶ嶽ニ高山有義經公之旧跡	御小休 本芝部	御小休 本内之濱	御昼 東流寺	此處ニ大出向ニ御酒被下由着献上	此處ニ御供方不残由馬ニ山越内
---------------------	-------------------------	--------------------	---------------------	-------------------	------------------------	-----------------------

4

ニ俣川高水ニテカチ渡リ

フタミタ

志行人家者寺跡ヲ餘^{九斗五里同}ノ故郷ニ

黒松内

チトセ

カンカンチ

ウタスツ

蝦夷人 コシブツル

従是後忘ノ國

イワヤ

精進川船渡

ノツト

是ヨリ雷電越の危難高山ナリ登リ六里ナリ

馬^ハ谷^ハ底^ハ落^シたり

御泊

岩内

知恵光寺

此處大湊也人家凡三千五百アリ

中ノ川

御手作場

根ムロ

ウツニルイカ

峠ノ下

余市山中

ナニカリ

シカリヘツ

トカフリ

峠ノ下

此市

フクベ

ラムシミサイ

朝の日に出御馬ニ御通行

此處人家有湊也

此處の磯端ニテ

忍路

會斗方田御敵ニ海へハル蝦夷人見ラ居

御泊一日御逗留

山内

量徳寺

此湊ハ人家凡五千アリ

熊取ミナ

アカキト云者が出テ御仁導ラ家ニ

チャラツナイ

此間、カコタニト云岩ノ切板道有ル
此切板ヲ

即馬ニテ通行之時其外、莫不數知

セニハコ

利分眼

ヤ一ナカ

栗の木盛

ヲイハケ

從是石將別札親郡本府此處凡百八十里

10

余鈴木之原也、勅賜東本願寺治所、割地所
拜之地、開拓山浄土真宗院、即建立之地、庚午
七月廿六日、平旦、西三聲アリ、聞テ土人は
佛法島ナリト云

新地建立ニ分

本府長官東久世殿出張

御泊、支那大主西役邸、於テ役人所ニ分

乙名

一サカレ

イタキミ

11

右此人大勢ヲ召テ御盃ヲ奉戴、御法主様ヨリ
名号ヲ被下、設御請仕候

キメイサン
ビンゴ

ベツカラス

銭箱

ヲタル

高島

汐谷

モノナイ

ラムシナイ

ヨイ片

峠ノト

クルルイカ

子モリ

ヲテサクバ

13

12

フカハハ

ユハナイ

後めの越

精進川

イフヤ

ノツト

ウタスツ

シカタヘツ

14

観音越

クニツナイ

フタミタ

ヲシヤミベン

クニフイ

オロナイ

漢小屋

フイタヲミナイ

15

ユワツ

ヲコツナイ

ヤミコレナイ

ヲトシベ

モハナイ

後ハミキ

ライワケ

宿ノ邊

小浪田

ヲハノ

下ニ候

上ニ候

キハナイ

ウスラ

俄虫

土橋

16

從是ウヅラ越

17

目名

泊り

江差ノ湊

御泊 二御逗留

専念寺 檄所

此湊人家凡五千餘有

順正寺

御小休

柏屋嘉多門

御昼

専念寺

御小休

藤四郎

御小休

加藤長吉

御泊

理音衛

御泊

専念寺

御小休

名主倉松

御小休

富田源市助

御昼

治郎助

御小休

権右工門

御小休

幸吉

19

18

政吉

御辰御着 浄玄寺

當山御堂十八間四面大蛇大湊也當山境内

ライスト云唐人普請仕住居仕申候旧東御門跡御

堂在末之分

福山専念寺 箱館淨玄寺

桔梗野法白寺 大野大郷寺

落部東流寺 岩内智恵光寺

御小休 普吉

御泊 昌源寺

御小休 善四郎

御小休 市松

御小休 長右工門

御小休 田村長治郎

御昼 東光寺

御小休 久兵衛

21

-82-e

20

政 告

御成、御着 一十四里 箱館市街 浄玄寺

當山御堂十八間、四面大地大漆也、當山境内

ライスト云唐人普請仕住居仕申、舊東御門跡御

堂在末之分

福山 専念寺 箱館 浄玄寺

桔梗野 法白寺 大野 大郷寺

落部 東流寺 岩内 智慧光寺

小樽 量徳寺 江差 順正寺

上國 専念寺 石巻 念寺

吉岡 専念寺 札苅 昌源寺

有川 東光寺 一拾三寺有

新御法王様、度新地建立之分

札繰 寺 寺都 寺

古平 寺 浦河 寺

余市 寺 木府 寺

纒泉 寺 一七寺

箱館縣大漆人家凡八千、有午八月九日

箱館御所、陸奥之國、御渡海

御着 集 谷姓 寺

御小休 奥戸 小谷七左門

御晝 大同 淡路屋長門

御小休 蛇浦 木下八兵衛

御泊 一十三里 易玉間 廣谷孫助

7. 「北海都^{みやこ}新聞」(資料1の続き)

○北海道拓殖回想記

(十四)

桔梗野の開墾 此に新道路の開削に間接の関係ある、桔梗野の開墾に就て、是非一言して置く必要があると思う。

桔梗野は明治三年新道御開削より余程以前、安政6年の2月24日に東本願寺は特に使僧を派遣して、開墾の実地検分を命じた。当時函館御坊の留守職であった本多開明氏は、実地検分の一人である此の開墾に就ても東本願寺は、幕府の命を受けて着手したのである、鷲山霊峯氏の編する「北海教礎」には、唯単に函館奉行堀氏よりと記して居るのみである。尤も幕府の命といった所で、其实該管轄内に居する函館奉行所から受達するのであるから、差し支えはないものゝ事実を明瞭に記述する場合には、矢張り幕府の命に依ると書いた方が隠当であるまいかと思はれる。そればかりも、東本願寺が正しく桔梗開墾役所というを設けて、附属せられた谷地等の耕地の開拓を、公然と創めたのは翌安政7年の3月、即ち万延元年からである。本山は此開墾地に別院を置いて、勤番僧侶に農民一切を監督せしめたのである。然し、前にもいう通り、安政7年は公然的であって、其前年即ち安政6年には、已に多数の移住民があつて、草を刈り、地を平げ、所々に小屋などをも建てたりしたのであるから、実際となると安政6からという分が妥当かと思う。で、安政6年から通算して、明治4年の5月、始めて独立の一村となつて、本願寺多年の扶助を離れた迄は、実に13ヶ年を費して居る。移住民の多くは、越前、加賀、能登等、所謂北陸の門信徒に対して、其生国から函館までの船賃はいう迄もなく、上陸後の農具、世帯道具等一切の人費をも救与されたものである。移住民が漸次増加した事は勿論であるが、初年の移住民の戸数は6~70戸、7歳以下の小児を除て、一戸3人として約200人許りである。これ等の一人づつに、一日に玄米、男七合、女五合、七歳以下五合、味噌、男三十目、女二十目、七歳以下を二十目づつをも本山は給与して居たのである。それでも、初めの内は、逃亡者が、総員の二割乃至三割あつたというには、些か驚かざるを得ない。

それで、未開墾地を初めて開拓するには何処でもある事であるが、此等の総取締り方の全権は僧侶に一任されていたので僧侶は時には裁判者ともなり、警官ともなり、乃至病人の為には、医者ともなつたりした。で、取締の一法として、移住民の各個人に右の様な鑑札をも下付されて居たのである本山は又、万延2年の2月に桔梗野から七重浜に至る道路800余間(幅6尺、深4尺)の堀を其両側に堀った、人夫1間の堀賃3朱宛、此の費用922両余と記されてる。

桔梗野御百姓に御取立候事
年 月 日

函館御坊

⑨

其他、その新街道の両側に、柳 1,500 本を植付けたり、牧場の土塁を築いたり、悪水除けを造ったりした。工事費などを数え来たならば、実に莫大の費用を投じて居るのである。

桔梗野開墾当初は、そこを仮に安寧村と名付けていた。それが明治 4 年の 5 月 18 日に一村に取立てられて、初めて桔梗村と改称するに至ったのであるが、本山は此年にも、更に金 500 両を下付して開墾事業の進捗を促した。勿論此種の入費金の一部は或は御坊の三日経とか、無尽頼母子講等にも依て、随分補はれて居た最後に、今は故人となったのであるが、此桔梗村の事蹟に実地通曉して居る主なる人は、左の通りである。参考迄に列ねてみよう。

小樽	岡	崎	元	肇
函館	武	井	義	観
落部	藤		探	道
札刈	小	野	固	林
余市	間	瀬	徳	温

手宮	本	多	正	開
同	西	郷	順	教
寿都	旭		円	秀
余市	亀	谷	自	聞

8. 「桔梗開基百年の碑」

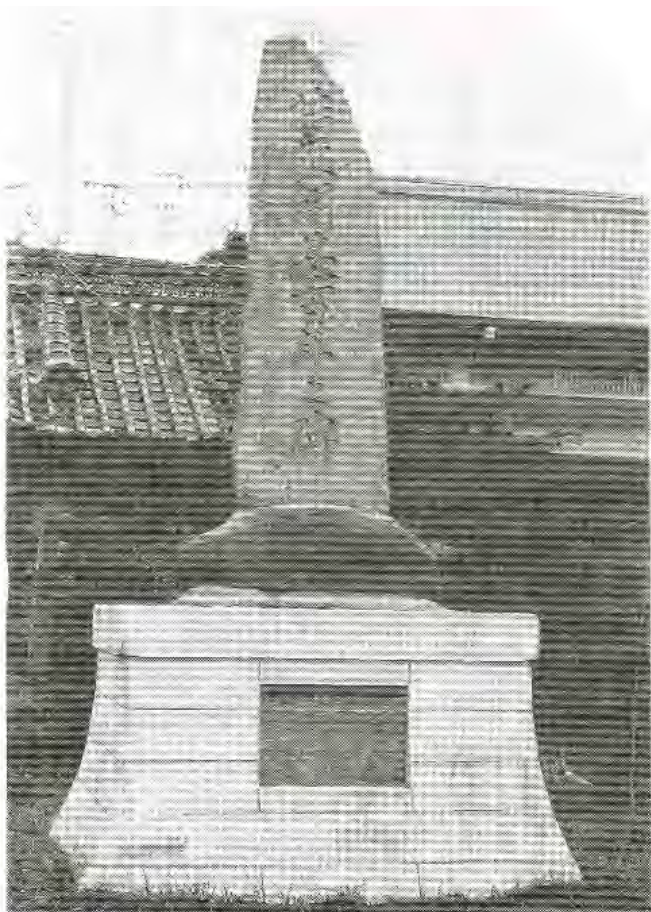
桔梗町真宗大谷派・宝皇軸物

桔梗村は昔熊族の跡絶えざりし地 安政6年4月報国のため東本願寺廿一世大谷光勝上人齊聖寺徳善を派遣し箱館奉行に申立間口1,500間奥行軍川村に至る土地の附与を受け一字を創立能越地方の信徒21戸63名を移住せしめ米味噌日用品農具馬等を給与し蝦夷国箱館莊六条郷安寧村東本願寺開発場桔梗野と称して開拓せる土地である現在479戸2891人に発展せしめた先人の労苦とこの偉業に対して深く敬意と感謝の誠を捧げ其の功績を讃える開基百年記念に際し住民挙げてこの碑を建立し永く顕彰せんとす。

昭和33年9月

桔梗開基百年記念協賛会

会長 上野金吾 書
現石 佐々木善松 氏 寄贈



S 63. 5. 3。

桔梗開基百年之碑

「真宗大谷派宝皇寺の変遷」

安政六年四月 箱館別院 广大寺と称

して建立。

万延一年五月

箱館別院 宝皇寺と改
称す（箱館奉行 小出
大和守の差図）

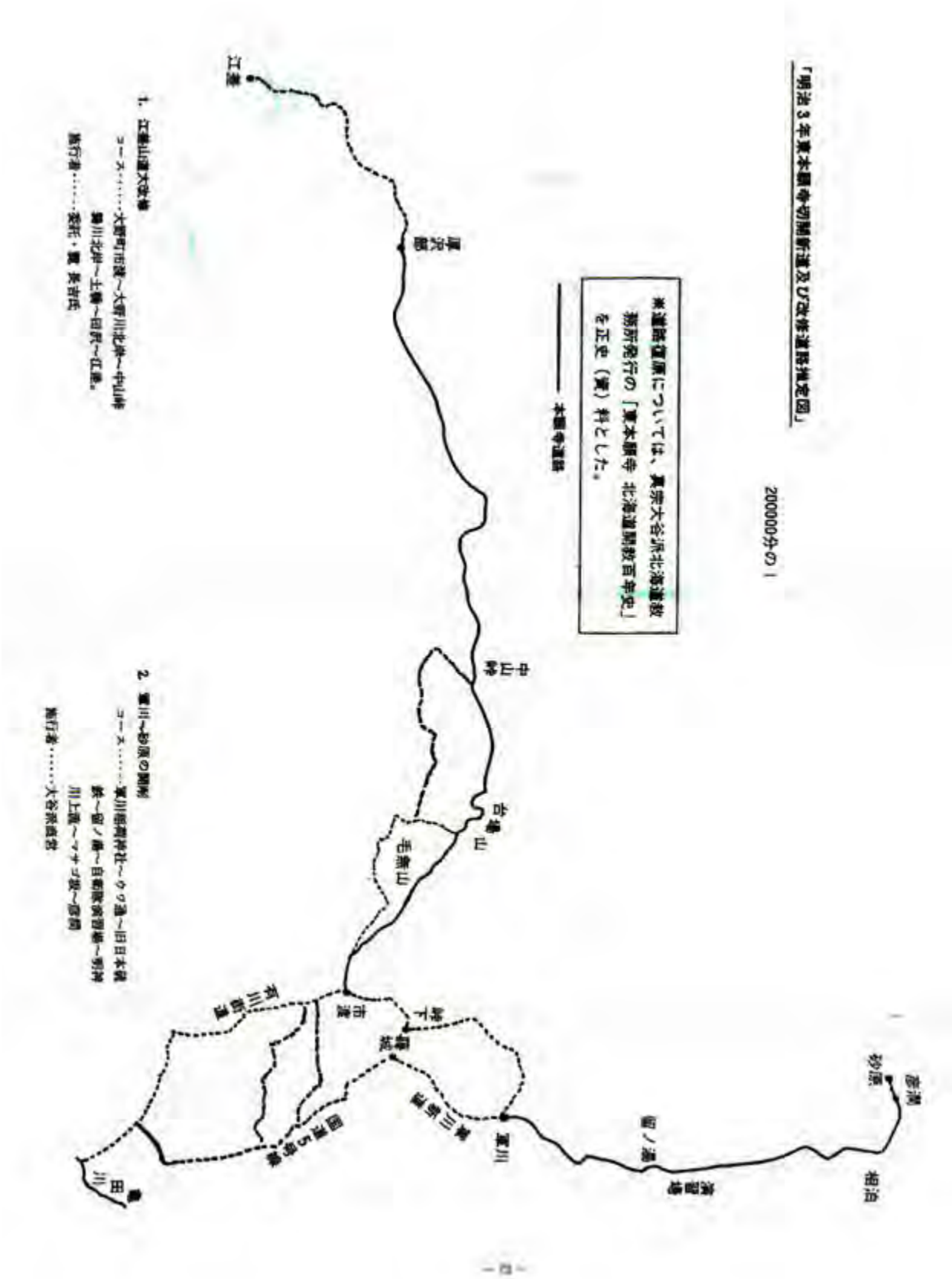
明治十一年一月 末寺に降格

明治十五年五月 現在地に移転

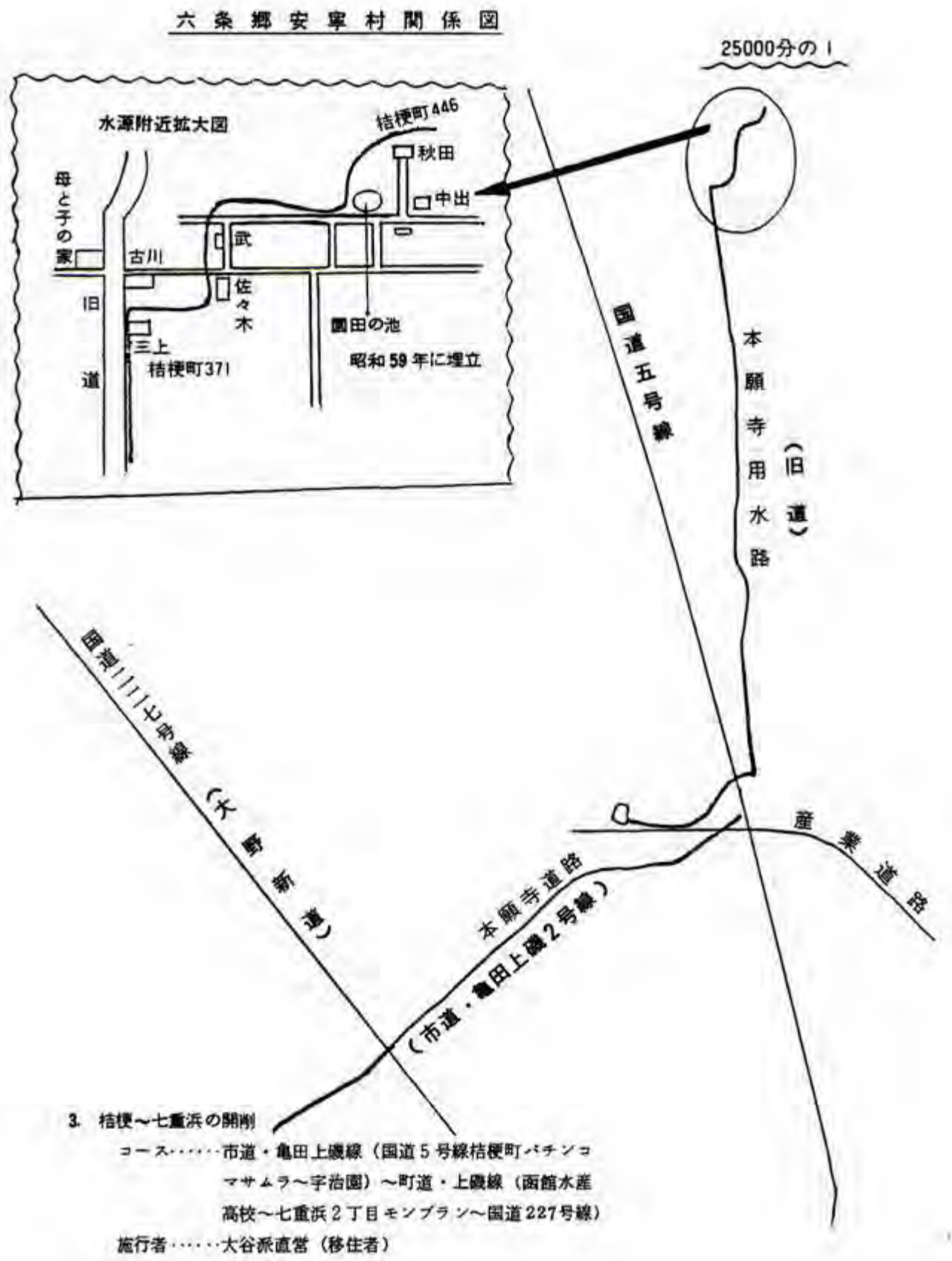
9. 幕末東西本願寺の道南の開拓



10. 東本願寺街道 開削 改修 推定図



1 1. 六条郷安寧村関係図



『現如上人北海道行化之跡』

本題における現如上人の業績は、明治5（1873）年東京の甘泉堂より、17組からなる錦絵として一般に紹介された。内容は写真のように開削作業や当時の風俗を伝える貴重な資料でもある。又、各組には北海道名や支庁名などの名付け親である松浦武四郎が「北海道人」の号で和歌を読んでいる。

本山や札幌別院・教務所などでは、大きな行事ごとに甘泉堂版17組のうち、下記に紹介する6組（毎回同じ組）を発行している。現在のところ題策などはっきりとしているものは4種類判明している。

- 昭和 4年4月 大谷派本願寺彩色（現如7回忌）
- 昭和 12年7月 東本願寺北海教務所彩色（法主巡化）
- 昭和 44年7月 北海道教務所単色（開教100年）
- 昭和 44年7月 北海道教務所彩色（開教100年）

以上の4種類であるが、他に、葉書版や大錦版（甘泉堂版と同じ）等もあり版は統一されていない。

また、表題も統一はされていない。古書目録では「現如上人錦絵」と記されているのが一番多いようだ。 ※ 以下 省略

絵師は、札幌本府. 落部村 / 一陽斎画. 北海道新道切開 / 立斎広重画. 本府御酒被下之図. 札幌本府(其二), 山越内 / 一曜斎国輝画. 雷電越の危難 / 一鮮斎永濯, 一立斎広重画. 渡島帰帆 / 国輝画. 歌棄 / 一曜斎国輝画. 新道切開(其二) / 一鮮斎永濯, 一立斎広重画. 余市早発 / 一立斎広重画. 余市小樽之間求捷徑到海岸難処 / 国輝画. 小樽ゼニバコ紅魚の奇異 / 一曜斎国輝画. 訓縫 / 一陽斎画. 訓縫(其二) / 一曜斎国輝画

以上は、早稲大 古典籍総合データベースの内容等 Notes から
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/chi05/chi05_04216/index.html

※ 編者追記

次ページからは **アイヌ民族差別に関する学習資料集**

「共なる世界を願って」2008.9.30 初版 2012.5.15 2912.
第2版 真宗大谷派宗務所出版部(東本願寺出版部)発刊
〔資料52〕89ページ～掲載の読取文と函館市中央図書館
像のカラー画像を組合せたものです。

「東本願寺北海道開拓錦絵」

● 渡島州函港着帆

御召船箱館の湊近くなりけるや海を狭しと曳引数百千艘の舟の印幟を立て先をあらそひ御攬を曳んと漕より陸には道俗男女浜辺より山々の崖まで迎奉るかかる蝦夷が千島の果に産れ都の土をも今に踏得ざる賤までも善知識の御姿を拝し奉ることかやと泣悦ぶ其声に岸うつ浪もおのつから称名念仏の声とそ聞ければ

北海道人 海の音浪の響も御仏の御名をとなふる心地こそすれ



● 落部村

落部村と云は渡島の国なる茅部郡に在て従箱館十七里斗常に昆布にしんくさくさの魚また鹿熊など取て世わたりなしける里なるに
今は此辺りまでもかしこき御方々いらせられ御済度なし玉ふと聞て

北海道人 いさなとり獣とりくふえみしらも 仏の法に逢ふそかしこき



● 山越内

蝦夷地の寒国なることは皆人のしる所なるが冬春は雪深くて漁事農業もなり難きゆえに夏の間に夜を日につぎて海山に出て其稼をなすに
今度善知識の御渡海と聞てそれぞれの事さし置て御供申上しに其至らせ給ふかたいづれも大漁にて有しと実に不思議の事なりけれ

北海道人 むくつけき姿にも似ず御仏の道にはやくもたどりつくとは



● 訓縫

蝦夷人は雪深き比山に入りて穴こもりせる熊の児を捕へ米りて是を籠に入養ひ置けるが訓縫といへる処にて是に向ひたまひて称名念仏唱させ給ふや心ありげに頭を低しと聞て

北海道人　こころなき獣といへとみほとけの　御名はとふときものとしるらん



● 訓縫其二

蝦夷人の住る家といふは如图床もなく間仕切もまた畳建具もなき所へあらし趨をしき炉一つを切て夏冬ともに其所にて煮炊き其食料は多くは干魚獣肉草の根等喰ひ実に太古の風俗にして有けるわひしき住居までも立よらせ玉ひて御教化あらせられしぞ御開山聖人の北越の御難にもかなとおもふまに

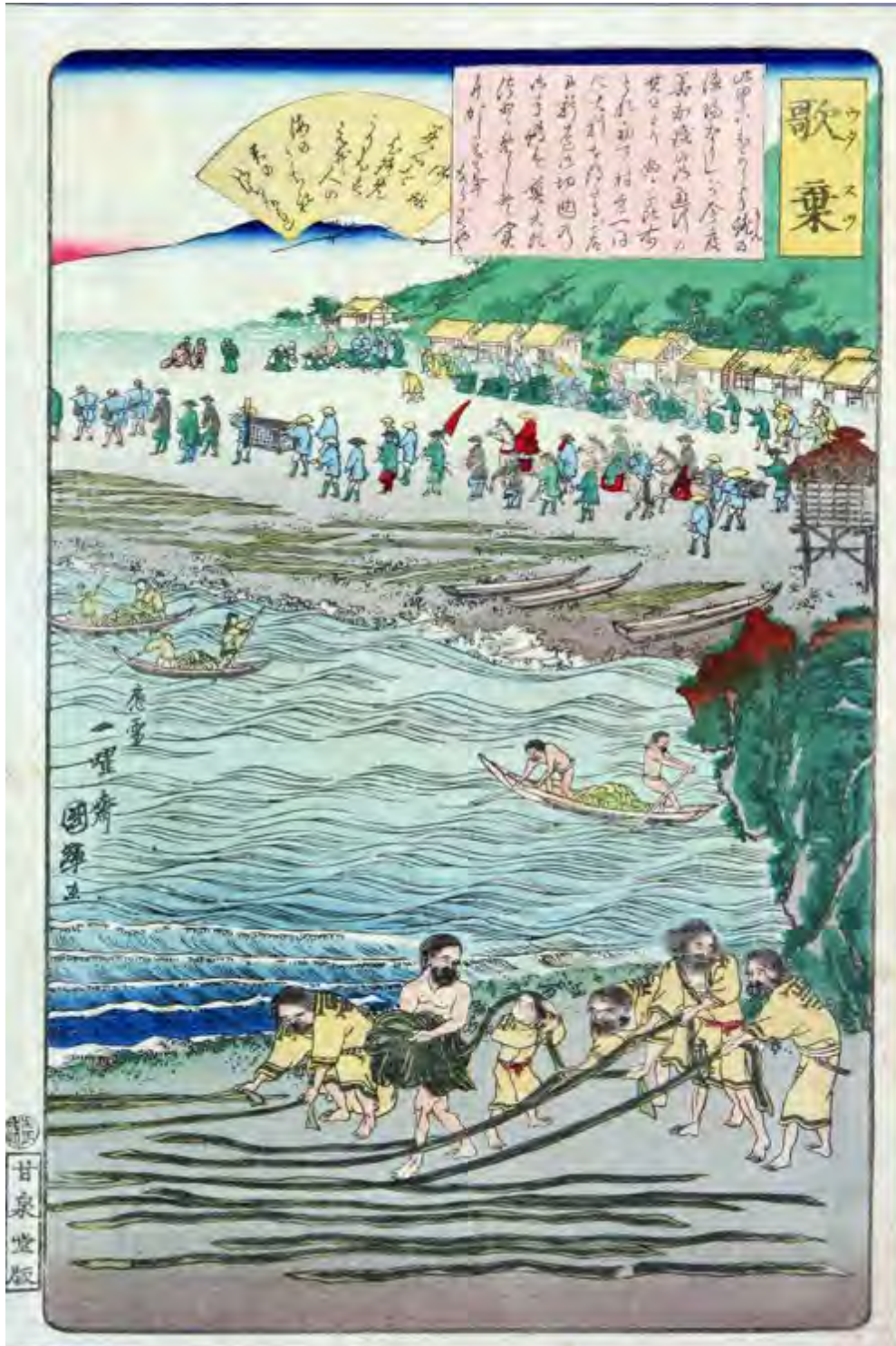
北海道人 御仏の道ぞかしこし玉敷の庭も わら屋もへたてなければ



● 歌棄

此里はむかしより緋の漁場なりしが今度善知識の御通行の其日よりふと昆布とれ初て村方一同に大利を得たるが故に新道御切開の御手伝を莫大につとめしそ実にかしこき事ならずや

御詠 み心をひろめかりほすえぞ人の 海のさちこそ君のさちなれ



● 雷電越の危難

雷電越は西地第一の険山なるが此所も新道開け今度此栈道にて荷負える者過て谷底に転び落たりしが何の怪我もなかりしかば忝さのあまりに

北海道人 いかつちの峰も谷間も御佛の みな光明のうちにぞ有ける



● 余市早発

みつき船ひまなくつとふ余市の海 里の名しるきほともしれける 北海道人



● 余市小樽之間求捷徑到海岸難処

荒浪の巖手つたひ一すぢの つたかつらこそいのち成けれあら膽を浪にとられてまたも世に立かへるとは おもはさりけり



● 小樽ゼニバコ吸の奇異

北海道人 蝦夷の海千尋の底のうろくづも 仏の道のたふときぞしる

箱館御渡海の時御船の傍に大なる虹魚付そひまゐらせ人々奇異の思をなせしが又小樽内カモイコクフシといへる怪岩絶嶮の地に至らせ
たまひけるや再ひその魚浮出たりと彼の竜の御教化を請奉りしも宜なるかな



● 札幌本府

蓮如上人北国御教化のおり加賀の国河北郡なる乗先坊の家に御滞留ましまして御法談ありけるに其二日と云より日日夜陽の西山に沈まんとの時晩輝の其法筵にさし入る頃佛法僧といへる鳥来りて三声四声つつ鳴たりと

昔より権者明師の徳あきらかに顕れます時ハ此鳥出聖主賢入出れば麟鳳舞ふとかや日本国中にても纔に高野山比叡山醍醐松の尾富士白山立山何れも名だたる名山霊地ならで住まず 又善知識達弘法の時ならで出ざると聞しが今度此鳥札幌府に顕はれしと聞て忝さの余りに

北海道人 此里もみな御仏のちかひには もれぬか法の鳥もなくなり



● 札幌本府

北海道人 御仏のすかたはたときものとしり 猛き獣もなれなれてく



● 札幌本府 其二

弘法大師偈

閑林独坐草堂曉三宝之声聞一鳥
一鳥有聲人有心聲心雲水供了々

蓬窓月落天將曉歌枕

閑聽念仏鳥唱名此地

豈無由法統東漸原了

了
松浦弘和韻

夜に入ホッホッホッホッホと啼鳥あり土人はをアヲタコダンチカウ
と云其訳黄泉鳥也其声仏法と聞ゆ土人云昔し最上ニシハ此鳥を聞
て内地にも有之尊き高山に住ふ仏法僧と云るよし語られしと依て
始て仏法僧なる事をしる此地にて黄泉鳥漢土にて
羅漢鳥また唐草蟾が詩に静聴林飛念仏鳥等とあり

庚午七月廿五日平旦
兩三声を聞て土人
是を仏法鳥なりと云

札幌本府 其二

弘法大師偈

閑林獨坐草堂曉三宝之聲聞一鳥
一鳥有聲人有心聲心雲水供了々

蓬窓月落天將曉歌枕
閑聽念仏鳥唱名此地
豈無由法統東漸原了
了
松浦弘和韻

勅賜東本願寺管創地所
明治三年庚午七月



夜に入ホッホッホッホッホと啼
鳥あり土人はをアヲタコダンチ
カウと云其訳黄泉鳥也其聲
仏法と聞ゆ土人云昔し最上ニ
シハ此鳥を聞て内地にも有之
尊き高山に住ふ仏法僧と云る
よし語られしと依て始て仏法
僧なる事をしる此地にて黄
泉鳥漢土にて羅漢鳥また唐
草蟾が詩に静聴林飛念仏鳥等
とあり

庚午七月廿五日平旦
兩三声を聞て土人
是を仏法鳥なりと云

一 確 齋
國 澤 忠

廿六 版

● 北海道新道切開

渡島国茅部生草川ヨリ砂原マテ凡六里半膽振国有珠郡室蘭郡ヨリ後志国小樽郡石狩国札幌御本府マテ凡廿七里半枝道十七里

北海道人 荒かねの岩切通し木の根伐 ひらけぞゆくは御仏の道



● 新道切開「其二」

札幌にて同行ともの新道を切開きいたる処に狼多く出来りし時に

北海道人 おそろしきたとへにもひく獸さへ 仏のさまはとふとく見るかも



● 本府御酒被下之図

明治三十二年北海道新道墾拓かせられ物の哀もしらぬ蝦夷人を濟度したまわんとて竜飛自神の暴き瀾を凌ぎ雷電黒松内の險き路を冒し玉ひしは祖師聖人の北陸東海の御化導も思合せられまいらせていと畏きあまりに其片端をたに諸人に見せて遊樂舞村にて土人ともに六字の名号を賜ひしさまをかくは写しおくにこそ

大通弁宇吉

役土人四ヶ所分

乙名 マサレン

イタキミシ

ビンゴ

キメサン

小使 ヤエト

ニサン

エナシベ

カムイノ

ノイタク

トサンロフ

シルシカ

ヲヤラツ

アチヤマウエ



● 渡島帰帆

驚だにも渡りわひたるわたり島雲の上人のわたるかしこさ 北海道人



「東本願寺北海道開拓錦絵」〔一九二九（昭和四）年発行東本願寺版〕復刻趣意書

明治二年の秋、現如上人は要りあり「北海道を開拓し、移民を奨励せよ」との内諭を蒙られ、翌年二月十日御歳十九歳の上人一行百八十餘人を率ゐ

勅書

開拓御用本願寺東新法主

「上は、探礼を先頭に京都を御發足、名古屋より本營路を越へて信濃に入られ、更に越後に進み、七月五日青森より御迎へ、軍艦に乗り、函館へ御上陸。この間時に、薩長、追寄を忍びつゝ、至り所門未の教導を命ぜられ、また、薩長、復志、北見、日高、釧路、天塩、十勝、根室、石狩、そして人路、掃部、木戸の地に入つて土民を帰服せしめ、道を拓き、橋を架け、或は説教場を設け、等々、少くも、手始めに、昔の俗に、翌四年十月北海道開拓の大事業を終り、帰京し給ふ。やう我國、名譽有り、壯舉、如何に當時の人心に異常に感激を興へ、又人々に贈答せられ、その頃、東京に於て一主、斎藤、重一、湯齋、國攝等の筆に、二十枚、錦繪の美譽なり、錦繪の發賣を見、廣く世に流布せられ、なにより、之を、之を得べし。

今回、現如上人七回、御法要の最中、上人一生涯の御事、旁を備寫し、そのを、北海道開拓錦繪中より、數景を選び、茲に、之を、複製し、之を、有縁に、上人の御遺徳を追慕し、奉一湯に供することあり。

昭和四年四月

大谷 源 本 願 寺

東本願寺街道年表

年号西歴	教化関係	新道切開関係	一般事項
(1501) 文亀元年	弘賢、浄願寺を上ノ国に 建立		
(1514) 永正11年	浄願寺奥州に撤退		
(1792) 寛政11年			ロシアの使いラックスマン が根室に来て交易を願う願う
(1799) 寛政11年			高田屋嘉兵衛が 千島に航路を開く
(1800) 寛政12年			伊能忠敬が東蝦夷地を測量
(1806) 文化3年			9月、露米会社オストフ海軍 太尉樺太上陸、露国領土たる を宣言せる銅板を掲げる
(1808) 文化5年			問宮林蔵が樺太を探検、 間宮海峡を発見する
(1853) 嘉永6年			4月15日、ペリー函館入港
(1854) 安政1年			函館奉行を置く
(1855) 安政2年			函館開港、五稜郭築城
(1858) 安政5年	箱館御坊 浄玄寺（能簸寺）設立		5月西本願寺、 蝦夷地の開拓を始める
(1859) 安政6年5月20日		桔梗野開拓21戸、62 名	
(1859) 安政6年4月	イワナイに御坊建立		
(1860) 万延1年3月9日	松前専念寺を御功とする		
(1861) 文久1年11月			西本願寺、 函館の疎水工事を竣工
(1868) 文久2年6月22日	蝦夷諸道よりの木仏、 寺号下付願を許可		
(1862) 元治1年5月5日	巖如、将軍家茂の 猶子になる		
(1864) 明治1年5月5日			

(1868) 明治1年1月5 日	嚴如、現如、 朝廷憑奉の誓書を出す		
(1868) 明治1年9月8 日			I明治と改元し、 一世一元制を制定
(1868) 明治1年9月15 日			
(I 86 9) 明治2年			東京遷都、 札幌本府を作り始める
(I 86 9) 明治2年2 月19日			函館戦争。 榎本武揚、七重村周辺の 土地をプロシア人ゲルト ネルに99 カ年貸与
(I 86 9) 明治2年8月15 日			札幌人口7人 蝦夷を北海道と改称し、 11国86郡にわけ
(I 86 9) 明治2年8月29 日	北海道開拓につき大政官 弁官より呼びかけがある		
(I 86 9) 明治2年9月			増上寺に北海道を開拓させる
(I 86 9) 明治2年9月3日	政府から北海道開拓が許 可される。 摂光院嚴性を改1潤役と し、下間頼世を退ける。		
(I 86 9) 明治2年9月5日		北海道潤在の為、加 藤徹	
(I 86 9) 明治2年9月6日	下間頼世ら復役す。		
(I 86 9) 明治2年9月18日		太政官より東本願寺 開道	
(I 86 9) 明治2年9月20日		調介団、開拓使、御 用船	
(I 86 9) 明治2年9月21日	現如上人東京浅草別院を 出発し、千葉県下を巡教 東海道を遊説、移民を勧 める。		
(I 86 9) 明治2年11月31日	北海道開拓について諸国 へ廻状。		
(1870) 明治3 年1 月17日	北海道における道場取立 候補として16ヶ所を太政 官に出願。		

(1870) 明治3 年2月10日	現如上人出達	松井逝水 北海道調査を終り、	札幌人口13人。
2月11日	愛知川泊		
2月12日	長浜泊		樺太開拓使設置
2月13日	〃 泊		
2月14日	美濃泊		
2月15日	美濃泊		
2月16日	〃 泊		
2月17日	神戸泊		
2月18日	〃 泊		
2月19日	房島泊		
2月20日	大垣泊		
2月21日	〃 泊		
2月22日	押越泊		
2月23日	高須泊		
2月24日	〃 泊		
2月25日	嬰俣泊		
2月26日	岐阜泊		
2月27日	〃 泊		
2月28日	〃 泊		
2月29日	岐阜泊		
2月30日	中屋泊		
3月1日	名古屋泊		
3月2日	〃 泊		
3月3日	〃 泊		
3月4日	〃 泊		
3月5日	犬山泊		
3月6日	美濃泊		
3月7日	近江泊		
3月8日	近江五村御坊泊		
3月9日	美濃泊		
3月10日	鵜沼泊		
3月11日	兼山泊		
3月12日	久田見泊		
3月13日	大久保泊		
3月14日	中津川泊		
3月15日	信濃泊		
3月16日	須原泊		
3月17日	福島泊		
3月18日	奈良井泊		
3月19日	洗馬泊		

3月20日	20日松本泊		
3月21日	青柳泊		
3月22日	善光寺泊		
3月23日	須坂泊		
3月24日	越後泊		
3月25日	除戸新井御坊泊		
3月26日	〃 泊		
3月27日	〃 泊		
3月28日	〃 泊		
3月29日	高田高田御坊泊		
3月30日	〃 泊		
4月1日	〃 泊		
4月2日	〃 泊		
4月3日	〃 泊		
4月4日	〃 泊		
4月5日	〃 泊		
4月6日	〃 泊		
4月7日	〃 泊		
4月8日	土底泊		
4月9日	柿崎泊		
4月10日	中浜泊		
4月11日	柏崎泊		
4月12日	妙法寺村泊		
4月13日	長岡泊		
4月14日	〃 泊 北海道への通行を柏崎 県始め東北諸県で妨げら れる。		
4月15日	下条泊		
4月16日	見村泊		
4月17日	三条三条御功泊		
4月18日	〃 泊		
4月19日	〃 泊		
4月20日	〃 泊		
4月21日	〃 泊		
4月22日	〃 泊		
4月23日	〃 泊		
4月24日	〃 泊		
4月25日	〃 泊		
4月26日	〃 泊		
4月27日	〃 泊		

4月28日	〃 泊		
4月29日	〃 泊		
5月1日	加茂泊		
5月2日	新律泊		
5月3日	水原泊		
5月4日	〃 泊		
5月5日	肋屋、樺太より帰途の上 田外務大録、現如上人に 樺太出版を乞う、		
5月6日	五十巖泊		
5月7日	新為泊		
5月8日	〃 泊		
5月9日	〃 泊		
5月10日	新発田泊		
5月11日	五十公野泊		
5月12日	金子新田泊		
5月13日	下関泊		
5月14日	羽前・小国泊		
5月15日	手ノ子泊		
5月16日	米沢泊		
5月17日	〃 泊		
5月18日	宮内泊		
5月19日	山形泊		
5月20日	〃 泊		
5月21日	〃 泊		
5月22日	〃 泊		
5月23日	楯岡泊		
5月24日	尾花沢泊		
5月25日	新庄泊 久保田藩藩士に通行阻害 される		
5月26日	廻館泊		
5月27日	鶴岡泊		
5月28日	〃 泊		
5月29日	酒田・浄福寺泊		
5月30日	〃 泊		
6月1日	酒田・安祥寺泊		
6月2日	〃 泊		
6月3日	吹浦泊		
6月4日	象潟（きさかた）泊		
6月5日	本庄・蔭応寺泊		

6月6日	本庄・超光寺泊		
6月7日	本庄・広誓寺泊		
6月8日	子吉川河口で金剛丸に乗 船風待ち		
6月9日	船風待ち		
6月10日	〃		
6月11日	〃		
6月12日	朝出帆、江差に向う。		
6月13日	朝出帆、江差に向う。		
6月14日	朝出帆、江差に向う。		
6月15日	渡島半島がかすかに見 える所迄来たが台風で難		
6月16日	船		
6月17日	〃		
6月18日	〃		
6月19日	〃		
6月20日	〃		
6月21日	陸奥国深浦入港、泉竜寺 発病重態、弘前、正蓮寺 檀徒総代山田袋八家で療 養		
6月22日	〃		
6月23日	〃		
6月24日	鰺ヶ沢泊		
6月25日	弘前泊		
6月26日	〃 泊		
6月27日	浪岡泊		
6月28日	青森・船待ち		
6月29日	〃		
6月30日	〃		
7月1日	〃		
7月2日	〃		
7月3日	〃		
7月4日	〃		
7月5日	現如上人は環廐丸に乗船		
7月6日	函館より御迎えの庚午丸 と共に出帆		
7月7日	函館着帆		
7月8日	函館御坊		
7月9日	〃		
7月10日	〃	宇野三右衛門、鷺田	

7月11日	七飯、大野泊(大郷寺)	山中で夜になる。鶉	
7月12日	鷺ノ木泊(塩越 平吉家)	開削はじまる。	
7月13日	落部泊(山追 治兵衛家)		
7月14日	長万部泊(越後屋 右衛門家)		
7月15日	〃 泊		
7月16日	〃 泊		
7月17日	黒松内泊(通行屋 宿屋 利右衛門家)		
7月18日	歌棄泊(孫四郎家)		
7月19日	岩内泊(知恵光寺)		
7月20日	余市泊(通行屋)	尾崎半左衛門、鷺田	
7月21日	〃 泊(平蔵家)		
7月22日	小樽泊(量徳寺)		
7月23日	〃 泊		
7月24日	札幌泊(十文字 役宅) 東本願寺管刹地所検分、 境内地2 千坪下賜される		
7月25日	小樽、十文字役宅で 帰敬式、松井逝水、下間 敬友札幌詰を命せられ、 仮堂建立着手		
7月26日	余市泊		
7月27日	岩内泊		
7月28日	〃 泊		
7月29日	野津登泊		
7月30日	長万部泊		
8月1日	山越内泊		
8月2日	鷺ノ木泊		
8月3日	大野泊		
8月4日	鶉山道木間内泊		
8月5日	江差泊		
8月6日	江差泊・泉竜寺山田儀 八宅で68 オで死亡		
8月7日	〃 泊		
8月8日	石崎泊		
8月9日	松前泊		
8月10日	〃 泊		
8月11日	福島泊		
8月12日	札幌泊		
8月13日	函館御坊泊		
8月14日	〃 泊		

8月15日	函館御坊、会議で心海寺 随念寺、間瀬徳温、古田 直右衛門む、札幌管刹詰 決定。食堂衆議、有珠街 道について検討		
8月16日	〃 泊		
8月17日	〃 泊		
8月18日	〃 泊		
8月19日	函館出帆、佐井港着船、 御家老御納戸集会		
8月20日	易国間、松井逝水、東京 に出発		
8月21日	田名部泊		
8月22日	横沢泊		
8月23日	野辺地泊		
8月24日	三本木泊		
8月25日	八戸泊		
8月26日	一戸泊		
8月27日	沼宮内、泉竜寺、弘前で 病死の届出		
8月28日	盛岡泊		
8月29日	郡山泊		
9月1日	花巻泊		
9月2日	金ヶ崎泊	軍川より砂原に到る	
9月3日	→関泊		
9月4日	陸前、高清水泊		
9月5日	仙台、松島泊		
9月6日	仙台泊		
9月7日	岩沼泊		
9月8日	盤城、白石泊		
9月9日	岩代、桑折泊		
9月10日	幅島泊		
9月11日	二本松泊		
9月12日	須賀川泊		
9月13日	盤城、白河泊		
9月14日	下野、川原泊		
9月15日	宇都宮泊		
9月16日	下総、古河泊		
9月17日	武蔵、越ヶ谷泊		
9月18日	東京浅草御坊着		
9月19日	浅草御坊泊		

9月20日	〃 泊		
9月21日 ～29日	現如上人參内開拓報告。 浅草本坊に於て僧侶門徒 への報告。		
	10月札幌管利仮堂落成 心海寺、了海、徳温留守 居越年。		
10月1日 ～13日	浅草御坊在院者浄興寺、 浅井湊、松井逝水、仏性 寺、仏願寺、皆演功。		
11月30日	下間頼一、北海道開拓に つき不正あって終身蟄居		
(1870) 明治3年12月10日			プロシア人、ケルトネル に62,000万ドルを交付、 北海道七重村を回収、 桔梗野を整地して、政府に 上納する。（道行政資料室）
(1871) 明治4年4月7日		本願寺道路完成 （道行政資料室）	
6月15日	輪番、唯乗坊、越後より 募集せる移民、40人を 連れて、札幌へ到着		廃藩償県、アメリカ艦隊 朝鮮江華島占領。
6月17日	本願寺用移民40人新湊 より到着の届出を本府へ 提出 管刹、隣接地へ移民入殖		札幌人口624人桔梗野 33戸124人。
6月24日		東久世長官、東本願	
7月5日		東久世長官、平岸よ	
7月14日		管刹本堂建立着手。	
7月15日		有珠新道見分、	
7月16日		〃	
7月17日		〃	
7月18日		東久世長官、モロラ	
8月24日		西村権監事、大村新	
8月25日		高見沢権之丞、有珠	
8月26日		有珠出立、トウヤ	
8月27日		トウヤ、シゲコタン	北海道開拓使東永出張所 を芝増上寺に移す。
8月28日		シゲコタン	
8月29日		〃	
9月1日		〃	

9月2日		〃	
9月3日		〃	
9月4日		定山コタン	
9月5日		札幌着	
9月22日		坂本少主典、有珠新	
9月25日		管利本堂、上棟式	
10月1日	坊官制を廃止し、 寺務所を開局。	新道開通	本山年収4万円に対し、 借金80万円
10月3日	闕彰院暗殺		
10月11日	現如帰山		
10月20日	管利本堂遷仏式		

東本願寺街道年表

年号西歴	教化関係	一般事項
(I 873) 明治5年11月9日		太陽暦を採用、明5・12・3を、 U月6.I . 1 と改定の旨布告される。 札幌本道（札幌～函館）つくる。 札幌人口916人。鉄道開設（横浜～新橋） オランダ、スマトラ品占領。
(1873) 明治6 年		征韓論。6・23屯1B兵制度設定0 フランス、ベトナムのトンキン地方侵入。 札幌人口396人。
(I 87 4) 明治7年		台湾出兵。 旧清・天津条約。北海道屯田兵制。
(I 875) 明治8年		5 月 ロシアと千島、樺太交換条約。 9 月 江華島事件。第1 回屯田兵 200戸が琴似忙入る。 札幌人口2766 人。
(I 876) 明治9年		日鮮修好条約。 小笠原品日本所属を承認。 札幌農学校開く。 西南戦争。 札幌人口2615 人。
(1877) 10年3月10日	函館に北海道寺務出張所を開設。	イギリス国王、インド皇帝国成立。
(I 87 8) 11年10月	間瀬徳温、桔栢野宝皇寺の初代住職 となる	札幌祝人11 2761人。
明治14 年1月27日	函館寺務出張所を廃し、札幌に寺務 出張所を設置	
6月21日	現如上人、北海道発展を視察の為、 京都出発	
6月23日	東京浅草別院	
7月9日	東京出発	

7月10日	横浜より船で出発	
7月11日	函館着	
7月14日	函館別院泊	
7月15日	森泊	
7月16日	落部泊	
7月17日	長万部泊	
7月18日	寿都泊	
7月19日	島古丹泊	
7月20日	岩内泊	
7月21日	余市泊	
7月22日	小樽泊	
7月23日	札幌別院泊	
7月24日	〃 泊	
7月25日	〃 泊	
7月26日	〃 泊	
7月27日	〃 泊	
7月28日	小樽泊	
7月29日	小内港出帆	
7月30日	江差下船	
7月31日	江差別院泊	
8月1日	〃 泊	
8月2日	松前泊	
8月3日	福島 泊	
8月4日	札幌泊	
8月5日	福島 泊	
8月6日	函館別院泊	
8月7日	函館港より出帆	
8月10日	横浜港着船 浅草別院	
8月17日	横浜港出帆	
8月19日	神戸着船 京都着	
(1882) 明治15年6月11日	札幌監所に説教所を設け	
8月16日	札幌寺務出張所を廃する	
(1884) 明治17年		本山収入14万4千余円 負債3百余万円
(1886) 明治19年	厳如、彩如北海道を巡化	I・26北海道庁設設
(1887) 明治20年7月10日		本山収入39万3千余円 負債3百30万5千余円

(1888) 明治21年11月	六和女学校 (函館大谷高校前身) 創立	
(1889) 明治22年2月5日	北海海む青森で応請説教をなす者は、北海海布教主務の試験を受けるべし	
5月9日		大師堂上棟式
10月7日	現如、本願寺第22世を継職	
(1890) 明治23年	函館に私立忠似小学校設立	
2月12日	函館に寺務出張所を設く。	
(1891) 24年10月1日	函館別院に北海道慈善会を創立する	
(1893) 明治26年	禍大谷壘場設立、 雨竜本願寺農場設立	
(1894) 明治27年7月2日	北海道慈善会を本山直轄とする。	
(1895) 明治28年9月20日	函館本山事務所扱所を北海道寺務出張所に併設する	4・15 両堂落慶
(1897) 明治30年12月	北海道布教拡張の為、 説教所在勤者 40名を募集	
(1897) 明治30年3月25日	北海道事務出張職制改定	
(1905) 明治39年1月31日		本山負債 4百20万円
(1905) 明治39年4月	私立北海女学校 (札幌大谷心校の前身) 創立	
(1909) 明治42年9月24日	北海道正副組長選挙規定制定	
(1910) 明治3年2月	北海道大谷派所属学校取締規則制定	
(1920) 大正9年10月2日		闕彰院50回忌法要を伏見西方寺で勤める
(1921) 大正10年2月18日	樺太に樺太組を置く	
(1923) 大正12年2月8日		現如没
(1923) 大正12年3月	帯广大谷女学校 (帯广大谷高校の前身) 創立	
(1934) 昭和9年10月4日		北海道御廟現如遺骨納骨塔完成

(1948) 昭和23年	札幌、函館、帯広に大谷高校開校	
(1950) 昭和25年7月23 ～24日		札幌別院にて、北海道開教80周年記念法要
(1955) 昭和30年7月25日	札幌市に大谷ビル完成し、還仏式行われる。	
(1958) 昭和33年4月	北海道室蘭大谷高校開校	
(1959) 昭和34年7月	北海道三笠大谷高校開校	
(1960) 昭和35年4月24日	札幌大谷会館竣工	
5月1日	帯广大谷短期大学開学	
(1961) 昭和36年3月	札幌大谷短期大学開学	
(1963) 昭和38年4月	函館大谷女子短期大学開学 稚内大谷高校開校	
(1967) 昭和42年4月21日	登別大谷高校開校 北海道大谷学園（札幌・函館・帯広 大谷学園、稚内、室蘭、登別、三笠 大谷高校）正式発足を定める	
10月8日		北海道開教百年記念、北海道中山峠に現如上人像完成
(1969) 昭和44年4月20日	北海道教区、開教百年記を念して、 テレビ伝道を始める	
7月21日 ～24日	北海道開教百年記念法要	
(1972) 昭和47年11月20日	北海道東本願寺青少年研修センター 完成	
(1973) 昭和48年10月26日	北海道教区、北海道教学研究所を設 立	
(1974) 昭和49年10月	「東本願寺北海道開教百年史」刊行	

1 3 詠 歌

われもまた 秋に淋しや 旅の袖
帰り来む日を 今よりぞ待つ

明治3年2月10日、19才の現如上人が、京都を出発する時、
父君厳如上人の詠まれた歌。

来む雁に ことづてもがな 旅衣
船の起ぷしを 問なく思えば

上に同じ。

わが道も ともにひろげる 札幌（諸人）の
ゆききもしげし 札幌が（の）はら

明治3年7月24日、札幌に到着した時に、現如上人の詠まれた歌。

信ぜずばと てもなことに 誇るべし
汚れぬものは 洗われもせず

明治3年6月6日、西目村出戸、西光寺より、本庄に向う途中、無礼を
働いた久保田藩、楠太郎に対して、激怒した宰制、下間法眼を制して、現
如上人が詠まれた歌。

1 4 移住奨励歌

「数え歌」

鯨ヶ沢の来生寺、宿泊時、一同行が喜びて歌う。

1つとや、開拓御用で蝦夷地までお下りなされしあなたさまやレ有難や南
無阿弥陀仏。

2つとや、御両親お側もいといなく、石狩場所まで御下向（以下はやし同
じ、略）

3つとや拝れば拝るほど有難い真の知識のあなたさま。

4つとやようようおん年花盛り雨にたたかれ日にやける。

5つとやいつも値れる知識じゃない不思議な御縁でこのたびは。

6つとや無間地獄でなくやつをこのたび浄土へお国がえ。

7つとや何もおぼえず知りもせずに沈む私を

8つとや山越へ野越への御下向このやつ一人の為なるぞ。

9つとやこういう知識がませばこそこのままいる弥陀の国。

10 とや時は末代機は下根知恵をみがいて来いじゃない。

（以下 20 まで略）。来生寺住職園村義忠師提供

15 「酔 歌」

第一 トトサンカカサン、ユカシャンセ、ウマイ肴モ膳斗アル、オイシイ酒モ膳斗アル。

エゾエゾエゾエゾエジヤナイカ（繰返）。

第二 兄サン姉サン、住カシャソセ、ミカドノ御恩ノ報、ジ時、ホトケノ御恩ノ報ジ時。

エゾエゾエゾエゾエジヤナイカ（以下これと同じ）。

第三 ウマレ来リシ其日ヨリ、ミンナ朝廷ノ御養ヒ、今コソ御恩ノ報ジ時。

第四 真ノ知識ニ逢フコトハ、難キガ中ニナホカタシ、今コソ御恩ノ報、ジ時。

第五 未来往生ノ親様ノ、蝦夷地ヘマデモ御苦勞ヲ、ハタカラ眺メテ居ラレウカ。

第六 エゾ松前ノハテ迄モ、親様ノ御手侮。ワシャ内ニ居ルコ、口無イ。

第七 片時モ早く御開拓、成就ナサレテ親様ノ、喜ブ御顔ガワシャ見タイ。

第八 此石ノケテ道開キ、此木ヲ斬ッテ家始め、心盟、ンノ御手傭。

第九 高キ所ハ薩摩芋、低キ所ハ麦ヤ米、心ノ儘ノ御開拓。

第十 女ノ始め男ノ始め、我日ノ本ノ神々ノ、古例ニマカセイロハジメ。

第十一 御前ヨケレバ、我レモヨイ、何ノ遠慮ガアルモノカ、ヤ、ガ出来タラ尚ヨカロ。

第十二 御前百迄ワシャ九十九迄、澤山ヤ、ガ出来タナラ、澤山家ヲ造リマシヨ。

加賀国松任町松本白華編「白華備志録」より

16 「蝦夷ヶ島音頭」

（この石のけて御開拓、光螢開きの蝦夷ヶ島、この木を斬って家始め、
心尽しのお手伝い、えぞえぞえぞえじゃな
いか）。

1 番 ～ 4 番は、前ページ音符付きを参照

昭和 43 年「東本願寺北海道開教百年」を記念して作った歌。

道内各寺の婦人会の大会や盆踊りに用いられた。

「人をして蝦夷に往くを楽しましむる四箇条」

農民移住を奨励する為に、末寺僧侶の中には渭月拓の瀬踏十三条」

「杖の用心二十六条」等移住心得書を製作し、流布した。

「人をして蝦夷に往くを楽しむる四箇条」も、その一つである。

仏門ではあるが、労働が激しいので、肉食が必要である。

人生は酒を嗜むべきで、その酒も豊富。

男女の性も寛にして性行寛恕であるから里心も起きはしない。

おわりに

一般的に本願寺街道又は、本願寺道路（＝有珠街道）とは、伊達市から中山峠を經由し、札幌に至る 103k の観光道路の原型を呼称している。

しかし、函館に生活する私達は、安政 6 年 (1859) に、現・桔梗町に入殖した大谷派の檀信徒が、物資供給の必要から開削した道路（比遅里神社～宇治園～函水高校～国道 228 号線）や、明治 3 年 (1870) に現如法嗣の命による 2 本の道路（市渡～江差・軍 III～砂原）を身近に感じている。

今日迄に部員と共に約 9 力年、上記の 3 ルートを踏査してきたが、長きにわたって踏査が受け継がれてきた理由は、本校設立者が真宗大谷派であるというだけではなく、部員一人一人が、3 ルートを身近に感じていたからであろう。

例えば、軍川神社の傍らの庚神塚や、鶉山道の戊辰戦争に関係した“佐藤安之助の墓所”等があげられるであろう。中には授業中の雑談や、兄の道路調査の話を聞いて入学入部した生徒等、様々な感覚で活躍の跡を残していった。某生徒は、

- (1) 明治 3 年ならどの様な「工具」で道路を開削したのか。
- (2) 何故約 1 力年で、あの複雑な地形に道路が作られたのか。
- (3) 何故“本願寺道路”が存在するのに“札幌本道”の開削が行われたのか。等々の疑問をいだいた。

又、調査そのものも非常に大きな障害にぶつかった。

- (1) 明治初期の仏教問題に絡み極端に資史料が少なかった。（新政府の神仏分離と関連した民間の廃仏毀釈運動...）
- (2) 道路に関係した言い伝えも少なく、古老の多くの方が鬼門に入った。
- (3) 郷土史家の間では道路を研究テーマとしている人々は少なく、
従って本願寺

道路に関しての情報交換の場がなかった。等々が記することができる。

しかし、調査の結果約 120 年経た今日では、予想以上に地域の人々の間で生活に密着しており、地域史の大きな頁を占めている。

有珠新道などはその好例で留寿都、喜茂別などはその最たるものであらう。

現在部員は“零”であるが、同好の志を募りその結果をむ三訂版”として、その発行を目標としていきたい。このレポートは卒業した部員に対しての報告書と思い記したものである。

昭和 63 年 7 月

参 考 文 献

1. 東本願寺北海道開教史 真宗大谷派 札幌別院
2. 大谷本廟史 真宗大谷派宗務所 藤島達朗
3. 明治維新の東本願寺 河出書房新社 奈良本辰也 他
4. 本願寺の歴史 法 藏 館 名畑 崇
5. 秋田魁新聞 昭和37年2月12日 (4頁・夷島淨願寺)
6. 北海都新聞 明治42年9月4日 ㍻23
(大谷派本願寺光演法主觀迎号)
7. 東京本願寺報 昭和50年10月10日 ㍻172 (東京本願寺史10)
8. 北海タイムス 昭和36年8月9日 (道南の動脈本格整備へ・2級国道
函江線)
9. 読売新聞 昭和52年11月2日 (道・132)
10. 伊達藤五郎(旧・亘藩主)嘆願書 明治3年7月 函館市・佐藤任
11. 休明光記 叢文社 羽太正義(箱館奉行)
12. (仮題)北海道開教史 京都(東六条)樋口津右衛門
(現如隊・宿割係——日記 真宗大谷派 北海道教務所蔵)
13. (仮題)東本願寺朝廷関係記録 文久2年6月ヨリ明治6年12月)
(旧・枳北文庫、現・真宗大谷派 北海道教務所蔵)
14. 古図から見た吉崎御坊跡 福井県金津町教育委員会
15. 西目村のはなし 秋田県西目町
16. 大野町史 北海道大野町
17. 喜茂別町史 北海道喜茂別町
18. 桜 鳥(下) 北海道厚沢部町
19. 郷土誌 鵜地区 1963 鵜小学校 加藤秀夫
20. 郷土誌 すみかわ 札幌澄川開基百年記念事業実行委員会
21. 札幌の歴史 ㍻7 「新札幌市史」機関誌
22. 太陽 平凡社 昭和47年6月12日 ㍻109 「親鸞」
23. 鵜山道図巻 澤田雪溪 筆 北海道大野町蔵

本願寺街道を克明に

函大谷高宗教部が「開教史」発刊
道南での布教の様子も

浄土真宗の教えを建学の精神とする函大谷高(南木寿校長、八百十五人)宗教部が、このほど小冊子「東本願寺開教史―特に本願寺街道を中心として―」を発



刊した。東本願寺門徒による街道造成のほか、函館市桔梗町開拓の様子などが、史料をもとに克明につづられている。

生徒会の外局である同部はここ十年間、門徒が明治維新(一八六八年)前後に造成、改修した七飯町軍川―砂原間十八きなど本願寺街道の調査を進めてきた。結果は昭和五十七年に同名

の小冊子として発刊したが、今回はその後六年間に延べ十五人の部員と顧問の高嶋章教諭が研究した成果を改訂版にまとめ、第二版と合わせて出版した。

改訂版は道路に関する記述のほか、道南での布教や桔梗町開拓の様子を収めたのが特徴。冊子によると、桔梗の開拓は東本願寺二十一世法主殿如上人の命によるもので、東北、北陸地方の門徒十九戸が安政六年(一八五九年)ごろに入植し、荒れ地にクワを入れたという。

同部の部員は一時ゼロになったが、今年は高嶋教諭の強い勧誘で二年生三人が入部した。高嶋教諭は「東北にまで調査に行くなど、ずいぶん苦労しました。これからも地道に活動を続けていくつもり」と話している。

B5判、八十二頁。四百部印刷しており、希望者は同校へ52・0228

函館



四百部印刷しており、希望者は同校へ52・0228

函館大谷高生徒らが「北海道開教史」

函館大谷高の生徒会の外局である宗教部が「東本願寺北海道開教史」をまとめた。

浄土真宗と本道とのかわりには五百年近い歴史があるが、とくに広く知られているのは維新後の開拓に貢献した本願寺街道の開削。渡島管内七飯町軍川―砂原間の十八き、伊達市尾去別―札幌市平岸間の百三きなども生活道路、観光道路として役立つ本願寺道路の建設史を中心に、同部の生徒と顧問の先生の十年にわたる調査の成果をB5判、百四十頁に収録する。関連史料や年表、地図、現況写真なども盛り込まれていて、資料価値は高い。

四百部限定。入手問い合わせは0138・52・0228同高。

改訂版 発刊の奥書

東 本 願 寺 北 海 道 開 教 史
—特に本願寺街道を中心として—

平成1年7月29日発行

発 行 者 函館大谷高等学校 宗教部
発 行 所 〒041
函館市鍛冶1丁目2番3号
TEL (0138)52-0228

海路の辛苦

話説 制宰松井を始め御供の面々には、久保田藩の難題に當惑し彼是評議の眞最中、函館よりは急使を以て、切角御渡遊ばすとも、寒氣の時節に向ひなば、御用御勤めも六ヶ敷ければ、一日も早く御着ある様申来りしにぞ、登途方に呉たる折柄、本庄の港に便船あり、直に江差に着する旨告ぐる者ありければ、人々は勇立、夫こそは屈強の使なり、是より久保田の管内を経て、土崎能代と順路を往かば猶幾十日を費やし、渉泡の則節と誤らば、千日に荏たる萱、悔やんで還らぬ、事なるべし。其便船にて往く時は、函館を陸路に江差に赴くより、遙かにまさりて便よからんと、許議は頓に之に決し、6月8日には本庄廣誓寺を御出立あり、小吉川の河邊より、傳馬船にて、本船へ御乗込となりぬ。

扱此の度御乗込の船といふは、加州小松の下郷屋長兵衛と云へる者の持船にて七百石積の和船なり。松井逝水は船頭文蔵、水主文次郎等を呼出し其の船の名を尋ねるに、金剛丸と聞わしかば善知識の御召船に金剛の名は由緒あり、如何なる大波高岩も打破り思ふ江差の岸へ到着あらんは瞬くひま、幸先よしと打興じぬ。9日11日の三日が程は風待にて船は港に繋ぎてあれば、本庄三ヶ寺の御門徒よりは御肴御菓子、米鹽味噌、思い思いに献納するにぞ濱邊はさなから市の如く、八十餘人の御供の人々此處に彼處に打集い、都の話、旅のさま、語るもあれば笑ふもあり、浪の助等も立まぢり、しばしが程は世の憂さも打忘れてぞ居たりける。

斯くて12日の味爽より、順風そよと吹出でければ、船頭文蔵は水土に命じ、碇を抜き帆を巻上て、海原遠く乗出しぬ、濱に集いし御門徒は、手をかざし聲を張揚げて、船出を祝ふぞ勇しき。船は順風に眞帆かけたれば、疾きことさながら矢の如く、三日三夜ひた走りに走りつゝ兼て難處と問れたる、尻屋の岬も難なく越して15日の暁には函館の山も徴に見えぬ。此の時文蔵は舳にあり、舵柄取て居たりしが遙かに空を打ながめ、あつととばかりに打驚き聲を限に呼ばわる様『此の雲行はたゞ事ならぬはやて颶風あつとが来るぞよ、水土ども油断すな、早く帆をまく用意せよ』と指揮の下に心得て水土は手に手に綱を繰り帆を五合まで下げたる頃、さつとと吹来るはやて颶風の勢、不意を打れて、二三人、帆に佛はれて伏顛びぬ、スワこそ大事と水土舵取炊夫のたぐひに至るまで、舳に走りみよしに騎り、専ら防禦為さんとす、見る見る一天墨を流し大雨は盆を覆すが如く、電神の聲すさまじく雲間裂く、雷光は水土の眼に燐烙あて、苦吹きめぐる風の音は人々の肝を寒からしむ、小山の如き高浪は、金剛丸を揺上げ揺下げ、揺上る其の時は、船人ともに非想非々想の頂に登るかと思はれ、揺下る其時は、生ながら八万奈落の底に沈むかと疑われて、打寄する女浪男浪の高くして山又山の間をば、船は往くかと思はれたり、帆柱は將に折れんとし舵は殆んど砕けんとす矢叫の聲は浪間に響き、積重ねし貨は船底にまろび我も人も顔色青褪め立たんとすれば後邊に倒れ、歩行んとすれば轄々と、顛つ倒つする様ばすさまじなんと云ふもおろかなり。



實に船人の世計は板一枚を地獄の堺との諺に聞なして、あな恐しの世渡やご物語りて過ごしつる都人が、今日の有様ましてきんしゅう錦とばりの中にに人となり、璽もる風をも厭ひたまひし、新御門主の御上を如何と氣遣ひ人々も己々がよ船い倒れたることなれば、御介抱申上げん様もなく、生きたる心趣もあらざりけり



船は次第に西北の方に吹流され、地方はさてをき山一つだも眼にさへぎらず、此の時、船頭文蔵は、水主文次郎と共によるばい船通つ、胴の間に来たり、『私共此の歲月船乗を渡世と致し、命をきりに大海を乗り廻して居ますが、此の様な難風に出ふたことは今度が始めて殊に世に例ない高貴御方の御乗船故、命を捨ていもどこぞの港へ船を入れたく思いますれど、此の雨風では退遷も自由ならず、唯この上は運を天に任せるより仕様仕方も御座りませぬ、此の旨申し上げます』と、涙ながらに申すにぞ、御供の人々顔見合せ、何と答へん様もなし、此の時、新門主は更に驚かせらる、御気色なく、静かに人々にのたまふやふ、生者必滅は世の習ひ死の縁無量は人々が過去世に定る業報なれば、仮令此のま、船は砕け身は海底の藻屑となるとも、彊陀回阿の信心だに堅固なれば、未来は同じ蓮のうてな□、何條恐る、ことやあるべきと、イヤ御暇の勤行せん、方々助音あるべしと、心静かに御持佛に向はせられ聾朗かに弥陀經正信偈三首引の勤行お遊さる、其の御強気に励まされて人々助音なさんとすれども、浅ましや聾出で

ず、多くの御供の其の中にて二三人を除くの外には助音なしたる者なかりしとぞ。

こゝに又船中一同の難儀おこりぬ、そは、本庄港御出船の時、多くの酒樽に飲料水を貯へしが、其の酒樽の新しまためにや、飲用水はのこらず廣敗て一滴も飲むことがならず、船中飢喝に追ると雖も之を救はん様もなし、潮を汲みて飲まんとすれば、鹽からくて口に入らず、酒にて飯を焚きたれと雖も其の匂烈しくて喉へ通らず、されば人々生米を噸み奉書紙にて酒を濾し、

酒の中より濃し分けたる一摘二摘の水を以て僅かに喉を漏すのみされどもこゝに幸なりしは、御茶瓶に入れたりし水の少々ばかりありければ、御門主には之を以て粥を仕立て上げたり、

嗚呼中流に船を失へば一瓢も値千金とか此の銀瓶の水ともて僅に新御門主の御命をつなぎ申せし其の時の有様は今語るさへいたはしき、多くの御供の其中にも取分けあはれに見えたるは、泉の坊にぞありける、京都御発足より此の方暫くも餌側を去らず、又今般開拓御用の御趣意をば演説し、無二の忠節を抽んでしが、老衰の身と云ひ殊に船には慣ぬ身にて、

船^{よい}は人より甚しく、夜に日に血を吐き、^{もたえ}轉^{おんみすから}苦しみ、命も今は絶々になりければ、新御門主は、御親^{おんみすから}泉の坊に向はせられ『余都を出でしより力に思ひしは、其方なるに、斯く病疲れては命の程も覺束なし、若佛天の加護によりて、此の船地方に着くならば、再千辛万苦を嘗めて必や蝦夷地に打渡り、軸命を全うし開拓弘激の大功を奏せんと思ふなり、さるを甚の方万一の事あらば、余が片腕を失ひしなり必ず必^{こころ}をたしかにして、風の衰える時を待つべし、ことに病疲れたる其の方が、生米を嚙まんは為あしからん、近習の者より、余にのみこと炊きめし粥の半を其方に分ちて興ふれば、之を食して身を養へと、いと懇ろに仰あるにぞ』泉の坊はさらにも云はず、80余人の御供の面々へ傳聞きつゝ涙に轉び、此の君にこそ我々の、命をさゝげ奉りても御奉公をなさでやは、といはぬ者こそなかりしとぞ。

老僧の臨終

傳へ聞く、菩薩十問向の修業を終り初地の位に昇る時は、覺如来に通ずるが故に、^{ひつけれ}□□じて佛果を得る、先相忽ら現るゝを以て、心に歓喜を生ずるが故に、歓喜地と申すとかや、實に茫々たる生死の大海に遊べる身が、始て善法味を得て^{せいだい}□大涅槃の彼の岸と見出したまひし時なれば其の嬉しさは如何ならん、それにも似たるは前にいふ、新門主の御召艦金剛丸は15日の暁より、三日三夜吹流され水主舵取も疲れはて、今は船人もろともに、海底の藻屑とならんか但しは満州朝鮮へ、漂着せんかと、今は早觀念しつゝゐたりしが、18日の暁より雨師風伯少しく静まりて、波も漸く穩に成りて往くにぞ、船人等は力を得て、帆を揚げ舵を繰りつつも、何慮をあてと定めはなけれど、東南の方を指し、ひたすら船を走らせしが、果たして20日の朝に至り、雲耶山耶と疑ひしは、これぞ津輕の磯山なりし、人々蘇生の思いをなし、喜び勇む其の様は、十向満位の菩薩衆が、初地に入りたる如くにて、拙き筆には寫がたかり、21日の午前には、御召船は恙なく、陸奥國津輕郡深浦の港にぞ入りにける。

抑此の地は加賀能登越中諸國より入船多き所なれば、御門主御着ときくとひとしく、30餘艘の傳馬船に、御召船に綱打懸け、曳々聾にて曳きけるは、勇ましかりきことなりき、又濱邊には老若男女打むれて、かかる変事のなかりせば、縦令一生経るとても、御門主様の御顔を拝まんことは思いもよらず、我等に取りては此の頃の暴風はこよなき仕合なりきとつつましげなく物語る、質朴疎野の氣風こそ可笑もまた殊勝なりき。

此地には浄念寺てふ御末寺あれど、俄かの事とて用意も更にとゝのわば、仮の御旅館として廣幡屋貞助方に御入となりぬ。斯くて薪御門主には、船頭文蔵水主文次郎を召させされ、汝等始乗組の者一方ならぬ^{ほねおり}尋^も力によりて、無事に此の地に着船したることなれば、褒美の品を取らすべしとして、御近習へ仰せ付けらるれば、御染筆遊ばれし、三十代の六字名号に、左の書付を添へられて、二人の者へ下されぬ。

金剛丸長 文蔵
同水主長 文次郎

今般御乗船中格別出精有之候段御感賞之上以思召御染筆被成下候間難有頂載 候 成 也
明治3年6月 御 納 戸

尚水土一同へは、金五十圓を賜りしかは何れも感涙に咽びつつ、深く喜び
申せしとぞ、23日浄念寺に御移りとなり24日は此の地御発足、

津軽弘前より青森を経て、再御渡海との御内定なりしが、こゝに哀れをとゞめしは、忠節無二と聞えたる一老代の當衆なる泉の坊にて、老衰といひ、殊に船路に慣れぬ身が、此の難風に出逢ひしより、晝夜に血を吐き、悶苦しみ目も當られぬ風情なりがしが、上陸の後、少しく心の落付きしより、吐血は止みしも身体は大に衰弱なし今は頼少なき身とはなりにき、御門主にも大に御心を悩ましたまひ、御附の医師小堀某に仰せて薬をすゝめられしかども更に功験はあらずして、津軽に御着ありし頃は病愈重りければ、御門主には泉の坊の枕頭に近きたまひ、いと懇に慰めたまふ御言に、泉の坊は尊容つくづくと打まもりば、ふり落ちる涙拂ひもらあわず、苦しき息ホッと吐き、世の変遷とは申しながら、金殿玉楼に成長り綾羅錦きんしやうを身に纏まとひ荒き風も厭はせたまひ、憂世の憂さを知しめさぬ、いとやんごとなき御身の上、國のため法のため、朝には、信越の峻嶺を蹴へ、夕には北海の波濤に漂ひ、千辛万苦をも嘗めたまふは御いたはしき申さんも、尚おろかに候へども、往昔開山聖人が越後関東にさすらゐたまひ、中興上人が越前加賀諸所を経廻したまひし其の前踏を思出せば、今の御辛勞も物の藪には候まじ、泉の坊つらつら世の有様を推測るに、今は廃仏毀釈の徒類全國に充満し、耶蘇天主の邪教も漸く蔓延せんとす、此より後は一トしほ御苦慮も多かるべし、されども佛法の統領たる御身なれば、其の觀難くわんなんを忍ばせられ、愈末世相應の佛法を興隆し、一文不致の尼入道を勧化して、往生浄土の本懐と達せしめたまひてこそ、法統を継がせたまふ御功勳とは申すべけれ、斯く思念する時は此の時ころ師弟諸共、佛恩報謝の時節到来せしなれど、心に勇み候ひしに、其の御先途も見届けず、空しく津軽の朝露と消さらんはいといと口惜しき事にはあれど、前業の所感なればせんすべなし、御先へ蓮の臺うてなに昇り、今日の御化導の御苦辛をば、開山聖人を始め奉り、代々の善知識に申し上げん、いつまで斯くてあるとても、御餘波は尽じんき申さじ。さらばさらばと眼を閉ぢ、遂に往生の来懷をとげき、御門主を始めとして、御供なせし人々も、嗟惜しきことしてけりと、さらでも露けき旅衣、しばらく者ぞなかりける。

※老僧とは、泉竜寺祐之である。

汽船の歓迎

光陰は矢の如く、足掻は早き暇往く駒、暑さにあえぎし夏も過ぎ、彼の中務親王が『浪によるみるめに秋はなけれども』と詠じたまひし古も思ひやらるゝ、外ヶ濱、知善鳥鳴くなる青森の蓮心寺に御逗留、函館よりの御迎船をひたすら待ちわびたまひける、是より先深浦にて御別を告げし金剛丸は、恙なく江差の港に着せしかば、船頭文蔵より御門主御難船の次第、一伍一什を還洩もなく彼の地の人に物語るにぞ、御門徒の面々は一方ならず心配し、何ともして御迎の汽船を仕立んと、東西南北に人を走らせも汽船を雇入れんとすれど、

まだ其の頃には定期航海の船は更なり、北海に運轉する汽船としては、官船の外あらざれば、ほとんど困じ果てたる所に、此の事開拓長官東久世殿の御聞に達し、長官には殊の外心を勞され、抑今度本願寺門主航海の儀は、私の旅行にあらず、新道開拓の勅を奉じ千辛万苦を厭はずして、遠く此の地に来るなれば、棄て置くべき事ならずとて、福岡藩の持船なる環濠艦を以て、遙々青森まで御迎にとて廻されける。

去る程に御門主には、7月5日申の刻蓮心寺を御立となり、同艦に乗込みたまひしが、翌6日は風模様穏かならず、猶も碇錨を見合せられしが、同日午の刻函館の方よりして、一艚の蒸汽船黒畑を中空に漲らせ、^{みよし}艦には五環の紋を染抜きたるフラフを翻えし一散に快走来つて港口に錨と下しぬ、こは是去る6月29日津軽表より御先発として、函館別院に赴きたる御近習手塚繁三郎が彼の地の門徒に論しつゝ、御門主御出迎の其が為に買切りて差越せし康午丸とて新造の蒸汽船にぞありける、又函館より御迎としては、唯乗坊、福順寺を始として、御門徒多く乗込みたり。

御門主既に環濠艦にて御出船あると聞き人々は大に驚き、彼の地藪千の御門徒より、態と御召の其の為に、船を買切り剩さへ御座の間等は金錢を惜まらずして、いとも美々敷く裝飾て、心蓋しの御迎なれば環濠艦は御斯り遊ばされ、此舟へ移らせたまひかしかと、異口同音に申すにぞ其志は切なれども、さりとて開拓長官より故に軍艦を廻されし、其が好意も黙止がたく、御門主を始め奉り、御供の人々もほとんど慮分に苦しみしが、さりとて別にせんすべもなければ、一度康午丸に御乗船あり、暫時にして環濠艦え御かへらせとなり御供の人々50餘人を康午丸に移し敷せられたまひぬ。

明れば今日ぞ、久方の天の河原を渡るてふ、彼の彦星のそれならで、環濠艦は錨を引き、機関の運轉を始めつゝ、蹴立つる浪も青森の倭武田流しの、錨鼓の繫を、あとに残して出帆しぬ、浪穏にして長えに白鷗の眠を載せ、風静にして徐ろに青帝の袂を翻す、60餘里の海上恙なく同日酉の半刻には、北誨道の咽喉たる函館の港にこそは近きぬ、斯くと見るより港内の道俗、スワこそ大善知識は、御安着遊ばせしとて、加州橋立、安宅の同行を始として、藪千艘の傳馬には、天神丸、榮壽丸、八幡、長福、幸仁等思ひ思ひの船印を押立て、船歌の聲朗らかに御召艦に漕寄せつゝ、御綱を引かんとする其の様恰も蟻の群るが如くにてさしにも廣き港口も、船もて之を埋めし如く、水のあいりも見えざりけり。

抑函館の港と聞えしは蝦夷ヶ島の西端にして、脊後に臥牛の山を負ひ、嘗別の岬を右に控へ遙に陸奥の大間ヶ岬に相對し、港の形状の巴字に似たるより人呼んで巴の灣と云ふ、往昔は松前侯の所領なりしが、寛政13年春3月幕府直轄の慮となし、其の後又外國交市の場とせり、さればこの地は蝦夷第一の要地として、維新の初めに府庁を開きぬ、此の年10月幕府の違臣榎本武揚大島綽章其餘の人々、府知事を襲ふて此に掛り勢甚だ狙拗なりしが、翌年5月の戦争に五稜廓陥りて、人々官軍の軍門に降り、天下太平の基こゝに定り、弓は囊に刀は鞘、枝もならさぬ御代とはなりぬ、其れより以来、土地開け物産は増加してをさをさ新潟、神戸に劣らぬ五港随一の趣と呼ばれぬ。

閑話は休題、今日しも本願寺御門主が着かせたまふと聞くからに、集ひて来る老若男女、其の藪幾千といふことを知らず、實に時なれやみるめ苧る蝦夷が千島のはてに住み、都の空は夢にだも、見る事難き人々が、大善知識の御姿を居ながらにして拝するなれば、其の悦はたとえんに物なく、磯にひれふし異口同昔に称名するぞ殊勝なる、さるからに、此の時供奉せし某が、口づさみに

海の音なみの響も御佛の
御名と唱なふるこゝちこそすれ

話説、孝子浪之助は海路陸路の辛苦の中旅寝の夢の^{うつ}幻にも、忘れぬは父興左衛門が往末、出羽奥州の街道筋、往来絶間の並木にも旅客非人の嬢なく、父に均しき年齢風俗の人にあれば、笠の中を差覗き村外の諸鉢小屋も、人の氣はひのありと見れば、立寄りて心を配り、道端に立てある行倒の人相書ももしやと思へば読で見る、人足の世間話、渡守の浮世沙汰も、聞耳たてる心遣ひ初の旅行故痕たとは知らぬ他人の當推量、されど、昨日までは内地の通中、今日ぞ正しく我が目ざす蝦夷地の始り、漕寄せる幾千艘の傳馬の船頭の其の中に、尋ぬる親……がと眼を配り、氣をあせる孝子の心中、知らぬことゝて役割が、脊背後から胴発聲『これ浪之助何をうろうろ眺めて居る、それ見ろ其所にもやつてある屋形船が、御勅書の迎船、早く御長悼を擔出さぬか……』

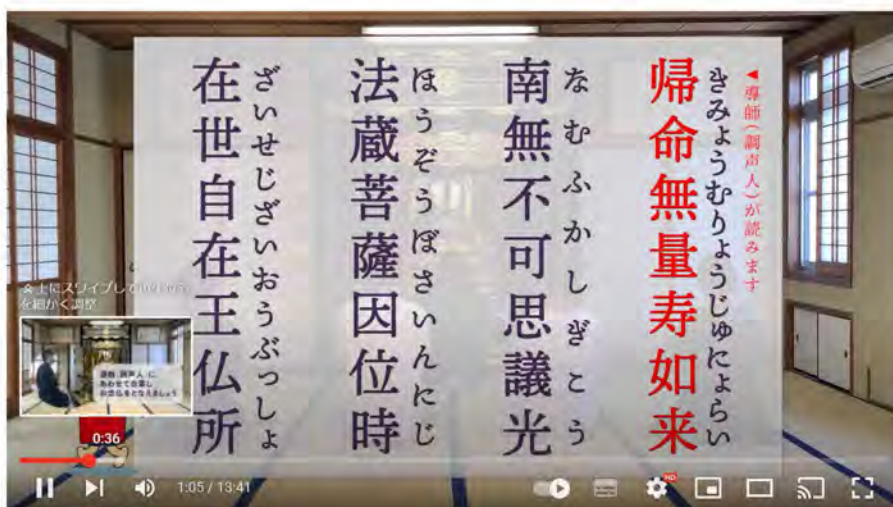
以下省略

以上は、国立国会図書館デジタルコレクション 北濤道東本願寺由来の第二章北海道大谷派史実 第十現如上人の渡道前の道中（北海道苦屋の夢）の第五回から第七回を引用し横書きに編集したものです。

なお、明治時代の印刷物のため旧字難字が多いので、未変換・誤変換等が多々ありますことご容赦ください。

国立国会図書館デジタルコレクション

URL: <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/822515>



【東本願寺】
正信偈のおつとめ

【初心者】【真宗大谷派】【東本願寺】正信偈のおつとめ 念仏・和讃・回向〈同朋奉賛式・ふりがなつき〉

<https://www.youtube.com/watch?v=jZELkbN7jvk>

追録 2

橋口文蔵遺事録

道立図書館蔵 から抜粋（横書）引用しました。

予往年胆振國有珠郡紋龜村に在り、春夏り交一日後山の奇勝を探らんと欲し、同人五六輩と糧を褒み騎を聯ね、長流川に沿うて遡り、晴光を併し風色を賞し、斜傾數里の路、馬足の進むを覺えず、暫時にして壯瞥に至れば、瀑布前に至り、直下十數仞、其の廣さ五弓許、白雲一帶天上より垂れ、明珠細辺大雨となりて降り、銀粉飛散岩上堆を為し、輕烟濛々山壑を蔽う、予が一行も亦く畫圓中に在る如し。既にして眼を轉ずれば高峯遙林迤邐屹立、頗る眺望の美觀を裝飾せり。且紋龜より此に至るの間、疎林蹊路を挟み、或は田野左右路線に逼り、瀑布は林梢に隱頭し、峰頭の烟山嶺の雪、遊思を牽禦して止まず、瀑布の下原野梢や廣潤、田畝既に拓け、蔽麥漸々人をして神氣清爽ならしむ、既にして同人と進行を議し、級路斜阪を踏んで行き、益々其眞景を賞せんと欲し、體軀の疲憊を覺えず、既に數百武、身は正に瀑布の上に在り、四望開豁一湖あり、周圍十餘里、直徑三里餘、舟洞爺に濟るべし、此を洞爺湖となす。湖中に三島あり、林樹森々、扁舟来往し、其の風色絶美なる幾んど名状すべからず。湖形圓滿水面悠々油の如し、綠林青草沿岸を圍繞し、恰かも新磨の銅鏡綠玉匣中に在るに似たり、鏡中山岳を倒映し、最大圓形の寫眞も啻ならず、眼を挙げれば、後方羊蹄山頭尚雪を敷き、北方に巍立し、綠衣の神仙白玉冠を蒙り檀上に立つ如し。遙かに西方を望めば、昆保岳ありて、一繡の綠髪を雲際に横わす。又南天一山あり有珠岳と名く、其状甚だ奇異、拓榴秋熟して口を開くに似たり、且淡烟一條其口中より噴出し、散じて海烟に和し、亦た痕を留めず、一望萬里物を見ず、東は即ち後別拔別天狗諸峰、遐邇眼界を遮り、三々五々佳人參差雲髻を理め、青薰を拂い、徐口に新粧を競う如く、實に壯觀を極めたり。奇なるもの益々奇、絶なるもの愈々絶亦た人間中の物にあらず。同人詩あり曰く、危峰如瘤裂け吹烟、飛瀑千尋岩石木穿、別有風光佳絶慮、笑容畫出鏡湖邊。と、一行傳唱、杜韓蘇陸の流亞となし、稱賛措かず、謂う所の瘤の如きものは、有珠岳、飛瀑は壯瞥の瀑布にして、笑容は即ち蝦夷不二と稱せられ、古来有名なる直立八千洋尺の高岳、後方羊蹄山とす、蓋し欧州瑞西の風景も之に駕するといえども能はざるべし。嗚呼我が國謂う所の三景も亦た三舍を避けるは論を俟たざるなり。南は中島開墾地を眺み、北は後方羊蹄平原を望み、西は虻田のヲフケシ草原あり、其の餘眞之助古丹、及び曲別原野等總て地質農耕に適し且水利至便水質清潔飲用に恰好せり。其れ如此し、満目の風物予が一行を迎へ、予が一行を誘い、慙々止まず、一行も亦た探奇討勝の思想益々其度を高かめ、以って後方羊蹄山に向い、疎林の間を過ぎ、馬に任せて進む。俚諺云う所の牛に誘れて善光寺詣でなるもの、一步は一步より、山水の風色奇態を呈し、予が一行をして送迎に暇あらざらしむ。既に濶上を離るゝ6里許、草原曠濶分けて八區とし、第一號より第八號に至る、第八號は即ち後方羊蹄山麓最近の地とす、每區幅員2,30萬坪許、最も廣きものは、大約100萬坪餘、地味沃饒頗る耕耘に適し、其の地たる平曠の草原なるを以って、洋法に倣い、會留幾洋牽を使用し開墾すること得べし。

風物を愛し、地質を相し、徘徊數時晷影の移る覺えず。既にして路を東北に取り、札幌を望んで進まんと欲するも、蹊路荊棘茂草の鞠する所となり、行くべからず、奇勝を探討するの念勅如たるも、亦た奈何ともするなし。一行之が為めに呆然落膽、天公何んぞ不仁なるの怨言を出すのみ外あらず、始めて馬足の重きを覺ぼゆ。乃ち馬を原頭に立て、西山を望めば、残日に已に春き、山頭を離るる、僅かに三竿、一行皆驚く。此の地紋龍を距る12里許、行程悠遠歸路に就くべからず。土人の草舎に投じ、行糧を開き晚餐に充つ。主人も亦野蔬を烹、溪魚を炙りてこれを餐す。食後出て散歩を試み、以って夜景を賞せんと欲するも、南風俄かに湿雲を吹き、雨師將に其職を行わんとす、故に暗黒物を見ず、乃ち憾を呑み眠に就く。

以下は省略した。

以上は、「橋口文蔵遺事録」 明治39年帝国印刷（株）発刊の一部〔本願寺街道〕を引用（横書かたかな）編集いたしました。

なお、橋口文蔵及びこの遺事録については、**追録4**においても掲載しておりますので、そちらもお読みください。

追録 3

東本願寺北海道開教（80年）史
昭和 25 年 宗大谷派本願寺札幌別院発刊から抜粋（横書）引用

「東久世開拓長官日録」抄

東久世通禧は天保 4 年京都に生る。文久 3 年政変の際三條實美等と長州に走る。世に之を七郷の都落といふ。明治元年 4 月議定に就任。2 年 8 月開拓長官に任ぜられ 9 月海路函館に着任。3 年正月上京、6 月函館に帰る。4 年 4 月札幌に移り 7 月上京、10 月侍従長に轉任。爾後諸官に歴任し、栖密院副議長に至る。45 年 1 月薨去壽 80。「日録」は明治 2 年 8 月より 4 年 7 月まで開拓長官在任中の日記にして原本は東京東久世家所蔵なり。茲には必要事項のみを抄出す。

○明治 2 己巳年

8 月 26 日開拓使長官被仰付

9 月 20 日明日英船テーレス出帆、函館へ出張、島判官岩村松本竹田得能其他
官員及移住民 200 人各乗込

同 21 日晴 8 時品海揚錨、11 時横濱入津、薪水食料積込、3 時出帆

同 25 日好晴如春、12 時函館着船

10 月朔日 休暇、市中巡見、沖ノ口運上所、五稜廓、拓魂場等（判官同行）、
市中一同へ酒肴被下

○明治 3 庚午年

開拓長官守正四位源朝臣通禧 (37 歳)

正月 1 日天晴、10 時出鋤、狩衣島帽子、乗馬、判官以下受禮、一同へ御酒被
下、12 時退散、岩村杉浦大伴遊斐、河野亮蔵入来、動春酒、春酒数巡

同 12 日英國蒸氣繭船パース號に乗、出発、豫船貨 90 弗、川口大主典随従 50
弗、家僕輩各 20 弗つゝ。今度上京趣旨は島判官在西地、専獨逞意見、
不應函館本府之下知、獨断本府建築、金穀共空乏、仍而資本金穀増額に相成
歟、島判官別段御所置有之か、伺定之為上京也

同 16 日横濱着

同 17 日出府

同 19 日参内、島判官御用召之事相達。得能判官明日函館へ歸、金子拾万参千
兩持歸。

同 22 日参内、樺太開拓使御引分之事申立

6 月 22 日品川灣にて庚午丸乗込

同 29 日函館着、昨秋着港の時に比すれば住民加増、家屋繁昌也

7 月 8 日日本願寺（昨 7 日光螢到着）入来、新道開設之件申談 (11 日本願寺小樽
へ獲足)

8 月 11 日為東西場所巡見函館発足、乗馬

同 15 日長万部着

同 18 日岩内に達す、岩内御親料也、柴田宗九郎、石原虎吉出迎、泊舟 40 艘
計、人口 1500、家數 300

同 19 日石炭山検分、少主典鈴木金吾誘引、行程 5 里、石炭山茅沼の奥趣、坑口迄 28 町の間鐵路を敷く、四噸積の車を以て石炭を運送す、坂路 3 ヶ所を経坑口に達す、坑口径 7 尺、底行 78 間、上級中級下級あり、満穴石脈充塞、役夫松明往来、其暗を照らす、以火葉纏之、石塊を車に盛り運送す、徳川政府英國人カアールを雇入役夫を董ス、一新後雇を解き開拓使にて諸事董之

9 月 2 日麗晴、ハッサフ晝休、辦當、一村落也、十年前移住人家 20 軒計、大小豆黍稷の類生長す、4 時札幌着、大少典已下出迎
本府経営甚廣大也、府前欄門新規落成、大道兩側役宅也、学校病院建設地割有之、長官判官邸宅地各幅 50 間奥行 60 間、本府之地割 3 町四方、道幅 3 間、昨年判官島田右籍門雪中所経営也、然而同人會計出入成算至て疎洩、不得止東上他管に轄任、共成績規模之廣大なる所慮感賞也

同 3 日陰夕雨、10 時後開墾地検分、慶應 3 年徳川氏移民存在せり、蕎麦黍稷熟せり、今年移住民伐木終功、蕎麦のみ生せり、離然既に 10 町餘開墾候也

新川開設シノロに通す、佐々木英三堀之、運輸之便を計り錢函のホンナイに達せん事を企つ、土人平七罷今年生の雛を持来る、又鹿牡牝 2 頭を銃獲して持参す、晚餐に供す

同 4 日晴、8 時出馬、豊平川幅 100 間、増水及馬肩、千歳郡界へケレケ晝餐、札幌より山路 7 里、深林樹々鬱蒼、谷地虚々、千歳會所着

……中略……

○明治 4 辛未年

正月 9 日岩村判官札幌出張申付る

3 月 16 日定額金 65000 両到着（内 15000 両東京残し）

4 月 19 日札幌本府へ移民に付午後 2 時函館発足

同 29 日市渡村峠之新道半は落成、六浦新左籍門願主也

同 21 日森より室蘭渡海

同 24 日千歳川丸木船乗込、シノロより陸行札幌着

同 25 日出勤

5 月 2 日鯰大量獲にて村々繁昌也、凡 42000 石ト云

同 9 日西村同騎札幌新村、庚午 2 村、同一の村検分

同 12 日札幌永住人凡 300 籠、一籠 3 人宛として 10 月より 3 月まで一人に付玄米一石六斗、凡 1440 石

6 月 8 日魯國疆界為談判副島参議函館頸着、月寒迄茂八誘引鹿獺に行、不獺

同 15 日豊平川新橋懸虚検分

同 17 日本願寺用移民 40 人新瀉より到着

同 20 日於圓山御宮地相撲興行、天津風雲右籍門、男山某大関、其他 30 人計

同 24 日東本願寺有珠新道急速取懸候事申達

同 25 日岩村判官有珠新道マコマナイ検分

同 27 日東本願寺へ地虚 3600 坪引渡

7 月 9 日副島参議、田邊外務少丞、留主少主典夕刻札幌着

同 10 日魯西亞談判當冬本國より東京表へ使節指出に付、今度は引取に相成、
一應札幌見物に表向巡見には無之由、副島入来直談也
副島参議同伴有珠新道旅行、室蘭より日進艦にて東京に着

「高見澤擢之函日記」抄

信州小諸の産（一説越後）文化 11 年生る。明治維新前箱館に來り附船を業とす。明治 2 年 10 月下旬島判官に従ひ函館を發し、11 月札幌に入り開拓使營繕掛手代を命ぜられ、職工人夫を督して官舎建築に功あり。後土木建築及び移民地の選定等に従事す。役職は低くかりしも本道、開拓殊に札幌の創建には功績相當多かりき。明治 3 年 7 月現如上人御來札の折には上人より歸敬式を受け又 4 年 7 月副島参議及び東久世開拓長官が本願寺開繫の有珠街道の通行して東上せし際には道案内を為せし事同人の「日記」に見ゆ。明治 7 年病の為め職を辭して閑居。13 年 2 月歿す。年 67。「日記」原本は札幌市大村耕太郎所蔵す。同書中、必要なる部分のみを左に抄出す。

- 一、明 2 年己の 10 月 22 日権之亟事箱館出立致、同 11 月 6 日夜に入錢箱村江着致、平山様御頼に付御供政
- 一、同 11 月 14 日錢箱村出立致札幌入
- 一、明治 3 年午の 6 月 15 日より 7 月迄相掛り、御門より御仮宮迄権之亟申立候虞、御聞濟に相成、札幌に而者初めて草茅を荊分、道を作、道幅 2 間 3 尺也、長 585 間 7 尺、土方人足 153 人半、土人人足 84 人、草刈人足共々 237 人半、但御役宅御玄関口迄惣々高間敷 685 間 4 尺也
- 一、明治 3 年午の 7 月 18 日東本願寺御地面 1000 坪、川部少主典林少主典、右御兩人に而御渡に相成、但 18 日 19 日兩日に御渡に相成
- 一、明治 3 年午の 7 月 24 日申の上刻、東本願寺様十文字大主典様御役宅迄御當着相成、御年當午の 23 歳に被為渡候由、御法名現如上人、御上下 27 人也、御本府御出立小樽湊江御立越 7 月 25 日
- 一、明治 3 年午の 9 月 2 日長官様同 4 つ半時御本府御着、未年役附
金穀御掛 十文字大主典
切刀小主典
金 □ 一

御法御掛 大島□之佐
佐野隼之助
一戸熊太郎
橋爪 次郎
清水 吉藏
吉田 岩吉

用度御掛 切戸小主典
永井権小主典
渡邊敬一郎
堀口 膳吉

開墾御掛 川邊小主典
松尾虎之助
川口龜次郎
佐々木貫藏

營繕御掛 永井権小主典
平野 使部
千代権之丞

- 右之通未の年御役附、前文之通昨午年より相定て日日出勤す
- 一、明治4年未の7月5日平岸村よりマクマナ井迄新道権之丞見立、同日東久世長官様岩村判官様御見分に相成、以今新道往来す
- 一、副島参議様明治4年未の7月9日晝7つ時御本府え御到着に相成
- 一、副島参議様東久世長官様、御家来4人宛都合8人也、明治4年未の7月14日御本府御出立に相成有珠新道御見分、右に付権之丞義御先立被仰付、モロラン迄御供致、人足20人、馬20疋、外に土人3人、牧馬より馬迫1人、右之御賄方共被仰付万事手配致、同14日之夜湯元定山宅え御泊
- 同15日之夜カシッ御泊
- 同16日之夜トウヤ沼土人小屋に御泊
- 同17日晝御休モンベツ藤五郎様御役所に而御休、同夜モロランえ御當着、御本陣に御泊
- 同18日之朝正5つ時御船え御移り相成、御順風に而御出帆に相成、権之丞義者右モロラン晝18日8つ時迄残御荷物手配致、是より幌別泊ニテ
- 同19日之夜勇佛泊
- 是より20日之夜、シマ、ッ泊
- モロランより本府迄當着す、但昼8つ半時の着、御状判官様え差上置
- 一、明治4年未の7月26日晝8つ時、長官様御屋敷より権之丞御用に付、罷出候虚極上々之鏝節5本被下置、右者新道御先立致候に付御下げに相成候由
- 一、西村権監事様有珠新道明治4年未の8月20日御本府御出立に相成御見分被為遊候に付、権之丞義御先立被仰付、同20日之夜湯元御泊、同21日夜カシッ御泊、同22日之夜トウヤ沼土人小屋に御泊、同23日夜有珠に御泊、同24日西村様大藤様御兩人様者同24日4つ時、有珠御出立に相成、権之丞人足並馬迫11人有珠に而跡取方付
- 一、参議様長官様有珠新道御見分之節、日々入費之外1日に金二百疋宛都合金四圓二分當御役所より御手當金被下置候也、並御書附被下置候也、明治4年未の7月29日
- 一、明治4年未の9月12日より有珠新道絵図面被仰付、東京行都合3度被仰付、右新道筋坂澤山故、大往下場ト相定候由

有珠新道里敷付

以下は省略した。

以上は、東本願寺北海道開教80年史 昭和25年員宗大谷派本願寺札幌別院発刊から抜粋（横書かたかな）引用しました。

なお、上記で省略した有珠新道里数は前記の絵図面と共に、本編合冊の説明において掲載しています。

追録 4

東本願寺北海道開教百年史 昭和 49 年真宗大谷派北海道教務所発刊
から抜粋（横書）引用しました。

「北海道百年」上巻の間違い

札幌市大通西 3 丁目の北北海道新聞社は、明治 2 年開拓使が設置されて以来、昭和 43 年が丁度百年になるので、それを記念して「北海道百年」上、中、下巻を発行した。同書は発行以来数版を重ね、ベスト・セラーの一になったのであるが、上巻（昭和 42 年 1 月初版発行）第八章「宗教道路東本願寺の新道開削」は、東本願寺が切開いた「本願寺街道」を紹介し、6 頁に亘って記述してある。所がその記述の中に重大な間違いが数多くあり、東本願寺は大変迷惑を蒙っておる。それで東本願寺北北海道教区の現如上人遺徳顕彰委員会は北北海道新聞社に対して間違いを訂正するように社長及び編集局長に嚴重申入れをしたのであるが、同新聞社は未だに訂正しない。この儘に放任しておく、と世間一般の人々は「北海道百年」に書いてあることが歴史的事実で、あれが本当のことだと思い込むであろう。それでは東本願寺は誠に遺憾である。よって茲に歴史的事実を明らかにし、「北海道百年」の間違いを指摘し、訂正する事としたい。

第一の間違い

東本願寺は明治維新の際に徳川幕府に加担して、朝廷に反抗したから、その罪の償いとして、維新後に新政府は東本願寺に対し北海道の道路切開きを命令したのだと「北海道百年」に記述してあるが、この記述は全く間違いである。その事由を説明しよう。

- (1) 東本願寺は維新の際に朝廷に反抗した事実は全く無い。この事は責任を以って断言する。
- (2) 東本願寺は朝廷から処罰を受けた事実も全く無い。この事も責任を以って断言する。
- (3) 東本願寺は維新の際、国恩報謝の為め忠誠を尽くした事実は数多くある（詳細前記の通り）。
- (4) 故東本願寺は忠誠を尽した事に対し朝廷から表彰された事実は数回ある（詳細前記の通り）。
- (5) 新聞もラジオもテレビも無い時代には、事件が勃発しても、原因や経過が迅速正確に報道されないから、いろいろの流言飛語が流布されることは数々ある。明治維新の際にも各趣にそういう事は数々あった。慶応 4 年（9 月明治と改元）正月 5 日東本願寺に関して事実無根のデマが飛ばされ、一部の薩摩兵がこのデマを誤信したという事はあった。然し山階宮晃親王が東本願寺を訪れ厳知上人に面会して真相調査の結果、それはデマであることが判明した。晃親王は急ぎ宮中へ戻り、事実無根のデマであることを説明されたので、薩摩兵が東本願寺を焼打ちするということは全く無かった。これだけのことが事実である。

(6)「北海道百年」は前記の間違った記述をするについては「河合善順談話」というものを証拠資料としておるので、「河合談話」は証拠資料とする価値がないという事を次に説明しよう。河合善順は慶応4年正月の頃京都に滞在していたのであるが、若年の軽輩であったから、複雑な維新の真相など正確に洞察出来なかった。「札幌区史」（明治44年7月発行）は伊東正三が独力で編輯したものであるが、伊東は資料を集めるために多くの人々から談話を聞いた。その際河合善順からも談話を聞いたのであるが、伊東は河合談話を信用しなかった。それだから「札幌区史」には河合談話を本文の中に引用しておらない。なお大正、昭和にかけて「新撰北海道史」を始め、多くの北海道関係の歴史書が出販されておるが、河合談話を信用したものは一つもない。

明治維新は非常に複雑であって、その真相は専門の歴史学者でも永らくの間、殆んど正鵠に把握出来なかった。明44年に維新史料編纂会が設立され、優秀な学者と多額の経費とを投入して、勤王と佐幕の区別なく、諸家に秘蔵する記録、書簡、日記等あらゆる資料を蒐集し、20余年を要して昭和13年に蒐集を一応終了した。次に蒐集した資料に基づいて「概観維新史」一卷、「維新史」六巻、「大日本維新史料綱要」十巻が昭和18年までに逐次発行された。

終戦後不敬罪が廃止されて以来、天皇や皇族に対する論議、記述はすべて自由になり、維新に属する研究は一層盛んとなり、最近に至って漸く維新の真相はやや正確に解明されるようになった。それゆえ若年輕輩の河合善順が、維新当時たとえ京都にいても、維新の真相を正確に把握出来ず、間違った観察をしていた事は止むを得ないと云うべきであろう。（昭和11年2月26日東京にいた青年が軍隊蜂起の現場を見たからといっても、2・26事件の真相が田舎から出て来た一青年に簡単に解るものではないのと同様である）しかし、昭和40年代になって明治維新関係の歴史を記述する場合には、間違いだらけの河合談話を何等の吟味もせずに軽率に引用し、間違った観察やデタラメの記述をすることは許されない。故に「北海道百年」の間違った記述は厳正に批判され、間違ったところは正確に訂正されねばならない。

第二の間違い

「北海道百年」は「東久世長官日録」の読み方を間違えておる。東久世通禧は長官在任中、重要事項を日記に記録しておった。道史研究の第一人者河野常吉は、明治42年5月資料探訪のため上京し、東久世通禧より直接その日記を借受け、道史に関係ある部分を書写した。「東久世開拓長官日録抄」と題し、北海道庁の所有に属して北海道大学付属北方文化研究室に寄託されておる。東久世がこの日記を記録した明治3年の頃にはペンもインキも洋紙も市販されておらず、和紙に毛筆で書いていた。河野の写本も原本を模して和紙に毛筆で書写してある。河野写本の明治3年7月8日の条は左の如くである。

8 日片倉小十郎 61 人室蘭へ移住、本願寺 昨 7 日半光螢到着 入来、新道開設之件申談 11 日本願寺小樽へ発足

右記事によって次の事が判明する。

- (1) 本願寺現知上人（光螢）が 7 月 7 日函館へ到着の事は 8 日の条に明記してある。それ故「北濤道百年」に「函館にいた東久世長官の日記には、上人が到着したことになにもふれていない」とあるのは、明らかに間違いである。
- (2) 「北濤道百年」に「本願寺入来、新道開設之件申談」とたった一行あるだけのそっけなさ」とあるが、「東久世日録」には前記の通り 2 行 31 字記されてあるから、これも明らかに間違いである。「北海道百年」は「日録」の原本も信頼出来る写本も全く見ないで、デクラメなことを書くから、このような簡単なことについても明日な間違いを犯すのである。
- (3) 「北濤道百年」に（新道切開の）「工事はいうなれば“冷たい歓迎”のなかで進められた」と書いてあるが、これも明らかに間違いである。
現如上人は秋田藩（久保田）の妨害で陸路通行が困難となったので、本庄港から深浦港まで小型の和船を利用した。ところが思い掛けぬ暴風雨に遭遇して九死に一生を得た。開拓使函館出弧所にいた東久世長官はこれを聞くと、早速特別に配慮して福岡藩所有の軍艦を上人渡海のためにわざわざ青森港に廻した。同艦は 7 月 4 日青森に入港した、上人及び随員一同は東久世長官の心温まる歓迎を受けて大喜びであった。上人及び随員は翌 5 日午後同艦に乗込み、6 日一度出港したが、風が烈しくなりかけたので青森港に引返した。そこへ函館門徒衆がチャーターした庚午丸が青森に入港した。そこで随員を両船に分乗せしめ、上人は長官差回しの軍艦に乗り、7 日青森出港、同日夕刻両船無事函館に入港したのである。東久世長官が加何に温かい心を以って上人を迎えたかは、この一事でもよく解る。「北濤道百年」はこういう事実を全く見逃している。

7 日は既に夕刻にもなったので、上人は函館管刺に宿泊、8 日開拓使出張所に東久世長官を訪問して軍艦差回しの御礼を述べ、併せて新道切開きについて相談をされた。その事が「日録」に記るしてある。

更に明治 4 年 7 月「本願寺街道」が竣工するや、東久世長官は早速この新道を通行して東上した事を自ら「日録」に記るしておるのみならず、岩村判官、西村權監事の兩人に宛て長官は書面を以って知らせている。
書簡現存。

是等の確実な資料によって東久世長官が現如上人を温かく歓迎したこと、新道切開きを重要視し、その竣工を喜んだことが確知出来る。「そっけない」とか「冷たい」という「北海道百年」の記述が間違いであることは明である。

第三の間違い

「北海道百年」上巻 51 頁に寺院表門の写真を掲載し、それに「明治初年の京都東本願寺、表門も維新当時にはかたく閉ざされたままだった」という説明が付けられているが、これがまた全く間違いである。

(1) この写真に出ている門は京都東本願寺の門ではない。東本願寺は蛤御門の変の兵火で両堂も門もすべて類焼したので、明治初年の頃には屋根のある門は無かった。

(2) 明治初年の頃には、屋根の無い冠木門があった。冠木門には扉が付いており、夜は閉扉するが、昼は毎日開扉した。維新前後に於いて、昼間も確く門扉を閉ざしたという事実はない。

従って「北濤道百年」掲載の写真も、その鋭明も全く間違いである。

因みに曰う、東本願寺に現存する屋根のある立派な門は明治 43 年起工、44 年 3 月竣工したもので、「本願寺誌要」（明治 44 年 4 月発行）に写真も説明も出ている。また元治兵火焼失以前の東本願寺の門については、写真は無いが、有名な画家が写生した画幅が現存しており、「記念帳」（昭和 6 年 7 月発行）にこの画幅の写真が出ている。それを見ると元治兵火焼失以前に於いても「北海道百年」に掲載されているような形の門は東本願寺には無かった事が明確に証明される。

第四の間違い

明治初年に東本願寺が切開いた「本願寺街道」の利用率について「北海道百年」は大きな間違いを記している。

わが国では明治維新の頃までは、人閥と馬とが通行出来る事を一応の基準として道路を造った。東濤道五十三次も中仙道、北陸道などみなそうである。

「本願寺街道」も例外ではない。しかし欧米では当時既に道路工事が相当進歩しておって、馬車通行を基準としたので、道幅も広く、山坂の急傾斜を避け、迂回してでも、なるべく平坦なコースを採用した。開拓使がアメリカ人技師を雇用して札幌、室圃間の新道を造った時には島松、千歳、苫小牧を大迂回するコースを採用し、馬車通行可能の方式により「札幌本道」（現在の国道 36 号線）は莫大な国を投入して明治 6 年に完成した。

「札幌本道」が完成してからは「本願寺街道」の通行量は減少した。しかし「本願寺街道」を唯一の交通路として明治 4 年以降喜茂別、留寿都、壮瞥等に和人が入植し、明治 4 年留寿都に駅通が設けられた。是等の人々は生活必需品の購入にも、農業生産物の販売にもすべて「本願寺街道」を利用した。また定山溪温泉も「本願寺街道」を唯一の交通路とするのであるが、この道路が切開かれて入湯者は年々増加した。「本願寺街道」20 数里の内、中山峠付近の重畳たる山岳地帯約 6 里の区間は、農業に適しないからこの 6 里の区間だけは沿道に人家も無く、通行者が少いので道路に雑草が生えるという事はあった。しかし「札幌本道」が出来たがために、延長 20 数里の「本願寺街道」の通行者が全く絶無になり、道路が雑草の中に消え失せたという事はない。この事は「橋口文蔵遺事録」によって証明出来る。

橋口文蔵は明治 19 年 2 月胆振国モンベツ製糖所長に就任し、翌 20 年 8 月まで同地に居住した。モンベツ在住中、橋口は友人数名と乗馬にて「本願寺街道」を通行してソウベツを経て、羊蹄山麓第八号草原に達し、アイヌ小舎に一泊して翌日モンベツに帰った。更に明治 21 年 12 月以降札幌農学校長、北海道庁理事官として 24 年 9 月まで札幌に居住したが、その期間中に「本願寺街道」の明媚なる風光を賞せんとて平岸を経て定山溪温泉に至った。のち「本願寺街道」と題する紀行文一篇を記し、没後友人が編集出版した「橋口文蔵遺事録」にこの紀行文が収録されている。それによると「本願寺街道」20 数里の中、「札幌より定山溪に至る概ね 7 里許」は「行路平坦、車馬往還、行人をして神気爽快ならしめる」とある。次に太平洋岸のモンベツから「本願寺街道」を通行して羊蹄山麓第八号草原までの 10 数里も徒歩又は乗馬で通行が出来る」と記してある。ただ中間の定山溪より第八号草原に至る「僅々 6 里」は人馬の往来が少いために道路に雑草が繁茂している。故に人夫を使役して雑草を刈り、少しく修繕を加えればこの六里も容易に徒歩し得る道路に回復可能だと橋口はいつておる。これは明治 20 年前後の「本願寺街道」の状況を示した文献である。

更に橋口は「本願寺街道」を唯一の交通路としてルスツに於いて 180 万坪の大牧場、ソウベツに於いて十万坪の農場とを經營したことが井口正道執筆「開墾事業」（「遺事録」所収）に記してある。

北海道庁は札幌より定山溪を経て虻田に至る必要道路として「本願寺街道」を道費を以って明治 27 年に改修し、更に大正 6 年にはこれを地方費道に編入し、爾後屢々改修を加えたが、「本願寺街道」のこのコースの重要性が政府に認められて昭和 30 年国道 230 号線（札幌、虻田線）に昇格した。その以後は数十億の巨額の国費が投入され、近年大改修が加えられて立派なアスファルト舗装道路となった。今や旧「本願寺街道」のコースは札幌、函館間の最短距離となり、年間数百万の人間と数十万の自動車とが往来する事になり、将来この道路の重要性と利用率とは益々増大することは確実である。この点橋口文蔵は流石に先見の明があった。曰く「本願寺街道」は室蘭街道（札幌本道）に比すれば 10 里余を短縮す……札幌、函館間の捷路之れに過ぐるものなし……蓋し他年此の道路、札幌、函館間の公道となるや必せり」

橋口文蔵に比較すると「北海道百年」は全く先見の明が無く、その上に事実を誤認して間違ったことを書いている。「北海道百年」に曰く「有珠新道はすたれる一方“本願寺街道”の名のみを残して再び“荊棘”と“芒叢”のなかにその跡を消してゆくのである」と。“本願寺街道”という名前だけが残って、イバラとススキの中に道路跡が消え失せてゆくと書いてあるが、トンデモない大間違いである。中山峠に立って旧本願寺街道（現在の国道 230 号線）の交通状況を見れば、「北海道百年」が「本願寺街道」の利用率についても、いかに先見の明が無いのか、いかに大間違いを記しているかは火を見るよりも明らかである。

※編者追記 この開教百年史で上記の「旧本願寺街道（現在の国道 230 号線）」との表現がなされたがために、峠の現如上人像の横に「旧本願寺街道 碑」が建てられたものと思われるが、本願寺街道は、有珠新道ともいうように新道開墾のみで旧道はありえない。[開削跡はそのまま、明治 27 年に道庁が新ルートを建設し、これが旧 230 号線となっている] 旧…… との表記と設置場所などに疑問を感じているのだが、……本編[紀要] 4 2 ページ参照

第五の間違い

「新ユーカラ譚」引用に関連して「北海道百年」は明らかな間違いを記している。木村不二男という北海道在住の作家が、アイヌを主人公とする「新ユーカラ譚」という小説を書き、昭和 36 年に単行本として札幌から出版した。この小説の中で、主人公のアイヌが和人に対する憤懣をいろいろ並べ立てておるのだが、その憤懣の一つとして明治初年に東本願寺が「本願寺街道」を作ったときに、工事人夫として多数のアイヌが賃銀を貰って協力した。「これ（アイヌ人夫）の協力がなかったら絶対に実現性のない北海道では空前絶後の難工事だったのだ。ところがそこにはこれについてアイヌのアイの字も書かれていない」とこのアイヌの主人公が語り、和人はアイヌの功績を故意に無視していると憤慨することが木村不二男作のこの小説に書いてある。

「北海道百年」には「本願寺街道」の「工事にかけた期間はわずか一年。この短期間にどうして可能だったかは当然の疑問だが、これについての記録は皆無と断言する」と言い、これに続けて木村不二男作「新ユーカラ譚」の一節を引用して、この道路切開についてのアイヌの功績を故意に無視しており、これが「短縄圃工事のナゾ」だと「北海道百年」は書いている。しかし「本願寺街道」の工事に属する「新ユーカラ譚」の一節は、歴史的事実として明らかに間違いである。「北海道東本願寺由来」（明治 45 年 6 月大谷派北海道寺務所発行）「北海道開教紀要」（大正 4 年 9 月大谷派札幌別発行）「東本願寺北海道開教史」（昭和 25 年 7 月大谷派東本願寺札幌別発行）等の本願寺関係から発行された諸書には、「本願寺街道」工事についての記載があり、その中にはいづれも多数のアイヌが工事人夫として協力した事蹟を明確に記述してある。この小説の主人公が不勉強で、是等の書物を読まないからこのような事実と相違したことを言ったのであろう。

小説というものは文芸作品で作者が自由に創作するものであるから、作品の中に歴史的事実と相違することが書いてあっても、芸術としての価値には影響は無い。しかし小説の中に書いてあることを、何等の吟味もしないで、そのままのことが歴史的事実であると早合点するものがあつたら、それは歴史研究者としては恐らく落第であろう。倉田百三作「出家とその弟子」という文芸作品の中に、鎌倉時代の遊女が三味線をひく場面がある。しかし歴史的事実としては三味線という楽器は室町末期に琉球（現在の沖縄）伝来の蛇皮線を内地で改良して作ったものであるから鎌倉時代には三味線はまだ無かった。若し歴史書の中に文芸作品「出家とその弟子」を証拠として三味線は鎌倉時代に存在したと主張する人があつたら、それは世間のもの笑いとなるであろう。

多屋曰く「北海道新聞は北海道第一の大新聞であり、趣方紙としては五指の中に入る全国的にも有力な新聞である。その有力新聞社が北海道百年を記念して特別に刊行したのが「北海道百年」上中下三巻である。他の部分は兎も角として上巻第八章には前記の通り数多くの間違いが書き並べてあることは、北海道を代表する大新聞「北海道新聞」の名誉のために、まことに遺憾千万である。NHK などは間違いがあると、率直に陳腐して間違いを訂正しておく。北海道新聞社もこの点 NHK を見習って貰えないものかと北海道新聞社に私は要望したい。

「新北海道史」第二巻の間違い

「北海道」は道議会の議決を経て開道百年記念事業として「新北海道史」を発行する事となり、昭和 46 年 3 月「新北海道史」第三巻が出版された。同巻は明治元年から同 19 年までの期間を取扱ったものであるが、同巻第三章「開拓基礎事業の進展」の中に「本願寺道路」について可成り詳しい叙述がなされている。ところがその叙述の末尾に「本願寺道路の開削は本府札幌と函館を連絡する要路として、官業の不在を埋める役割を果たしたが……まもなく札幌本道が築造されたためほとんど利用されずに廃道となった」と記述してあるのは、明らかに間違いである。

(1) 本願寺街道を「廃道」にしたという事実は無い。

本願寺街道は東本願寺が「勅許」を蒙って開鑿した道路である。それゆえ政府も開拓使も廃棄処分など出来るものではない。また実際に「何年何月何日に鹿道処分にした」という歴史的事実は無い。

(2) 本願寺街道は札幌本道が出来た後に於いても必要な道路であり、魔道にすべき理由はない。

本願寺街道が開鑿されると、この道路を唯一の交通路として喜茂別、留寿都、壮瞥等に相当の農民が漸次に入植した。また定山溪温泉の入湯者もこの道路ができてから逐年増加した。この人達は札幌本道がいくら立派な道路になっても、本願寺街道を全く利用しない訳にはいかない。それは本願寺街道と札幌本道とはコースが違うからである。解りやすい例を挙げるなら、札幌から函館へ行く鉄道線路は余市、蘭越、長万部を經由する函館本線と、千歳、苫小牧、長万部を經由する千歳線回りとがある。千歳線回りの方が車両も奇麗でありスピードも早いと知っても余市、蘭越居住の人々は函館本線を利用しない訳にはいかない。それはコースが違うからである。千歳線が開通してから後は、札幌より直接函館に行く旅客は千歳線を利用するのが多いので余市、蘭越経由の旅客が減少したことは事実である。然し余市や蘭越など函館本線の沿線に相当数の人々が居住しておる限り函館本線を廃止する事は出来ない。それと同道理で、札幌本道が出来ても、本願寺街道の沿道に相当数の人々が入植しており、その人々にとっては本願寺街道が唯一の交通路であるのだから、本願寺街道を廃道にするというような馬鹿なことは到底あり得ないのである。

(3) 明治 4 年に開通した本願寺街道は明治 20 年代に於いても道路として利用者があつた事は橋口文蔵がこの道路を通行して書いた「本願寺街道」という紀行文によって明らかである。この紀行文は「橋口文蔵遺事録」に収められて出版されている。

(4) 本願寺街道は廃道どころか通行人が益々増加するという実績によって道庁は明治 27 年道費を以ってこれを補修し、大正 6 年地方費道に編入、更に昭和 30 年国道に昇格せしめた。札幌函館間の最短距離国道として年百数万人が利用しておる現状である。

従って「本願寺道路は札幌本道が築造されたためほとんど利用されず廃道となった」という「新北海道史」の記述は明らかに間違いであり、且つ重大な間違いである。

編集者が不勉強で「橋口文蔵遺事録」等の文献を読まず、また実地に調査もせず、廃道にならないものを「廃道となった」というような間違った記事を書くことは無責任といわねばならない。

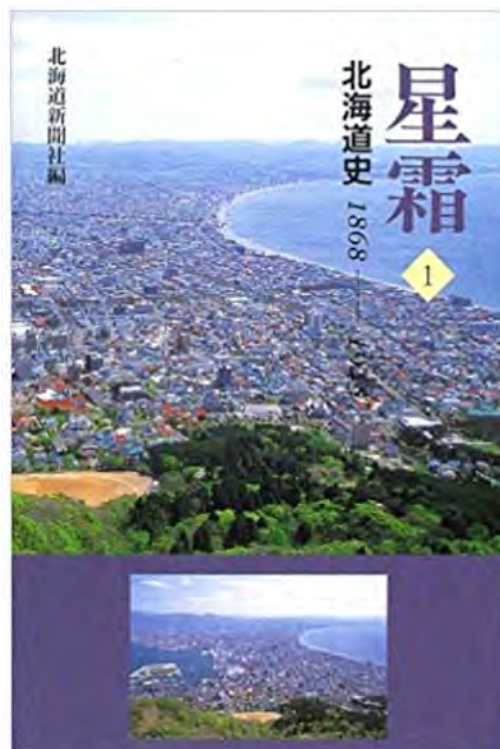
一、明治3年勅許を蒙って東本願寺現如上人は僧俗併わせて百数十人を引率し、命懸けで北海道に渡り、更に多数の和人やアイヌを雇用して「本願寺街道」を開いたのである。その功績を抹殺することは許されない。しかも、それが「北海道開道百年」を記念し、北海道を開拓した先人の功績を顕彰することを使命とする「新北海道史」が、編集者の不勉強によって先人の功績を抹殺することは甚だ不都合と申さねばならない。

特に「新北海道史」は道費を以って編集され、今後北海道に於いては郷土史の権威書と一般から見られるので、同書にこのような重大な間違があることを放任する訳にはいかない。よって茲に同書の間違いを指摘し、事実に基づいて訂正する次第である。

以下、省略

以上、東本願寺北海道開教百年史 昭和 49 年 真宗大谷派北海道教務所発刊から抜粋（横書）引用しました。

追録 1-1～4 の通り、北海道新聞社が開道百年に上中下三巻で発刊したものは、東本願寺が多くの誤りを指摘していたのですが、北海道新聞社は誤りを訂正することなく2002年4月 に復刻版 星霜 全6巻 北海道史として復刻されたようです。



アイヌ民族差別と大谷派教団

共なる世界を願って

真宗大谷派（東本願寺）



北海道国郡全図

＜北海道東本願寺図書館岩田文庫 蔵＞

明治政府は、開拓使を設置した直後に、蝦夷地一円を「北海道」と呼ぶことを布達し、同時に11カ国・86郡に分割し開拓使によって統治させることとなる。「北海道」の「道」とは、それまで日本の領土を表す言葉である、「五畿七道」になぞらえたともいわれており、文字通り日本の領土化を宣言する名称である。この地図は、当時の開拓判官松浦武四郎の筆による北海道全図。



北海道移住手引き草

1895(明治28)年 北海道庁課編 <大阪人権博物館 蔵>

北海道に移住するにあたり留意すべきことから、法規、各統計、各種届け出書の記入の方法、鉄道の運賃表まで多岐にわたって収録されている手引書。「植民地」という言葉が随所にみえる。開拓使は1882(明治15)年に廃止され、1886(明治19)年まで北海道は函館、札幌、根室の3県に分割され統治される。1886年3県が廃止され「北海道庁」が設けられ、再び全道を統治下に置く。



人類館事件 —「展示」された人々

＜琉球新報社 蔵／大阪人権博物館 提供＞

1903(明治36)年、大阪で開催された第五回万国勸業博覧会の余興(民間パビリオン)として「人類館」が開設され、アイヌ民族、台湾原住民、沖縄人、朝鮮人、マレー人、インド人、ジャワ人、トルコ人、ザンジバル島人が見せ物のように「展示」された。当初は中国人・朝鮮人の展示も予定していたが、政府や留学生の抗議で中止され、沖縄人を「野蛮人」扱いたとの抗議の声が高まり、展示は途中で打ち切られた。



ポスター表



ポスター裏

ポスター「拓殖博覧会」＜大阪人権博物館 蔵＞

1912(大正1)年、東京・上野公園で開催された博覧会のポスター。ここでは、朝鮮、台湾、関東州、「樺太」、北海道の産業や統治の状況が展示された。「新領土の各土人」と差別的に呼ばれた人々が「展示」され、見せ物にされた。帝国内の序列構造を示そうとした狙いが伺える。



チロットコタン 国防に努める白人古潭のアイヌ民族の女性

＜幕別町蝦夷文化考古館 蔵／北海道ウタリ協会 提供＞

1896(明治24)年以降、アイヌ民族も徴兵されるようになり、第二次大戦の戦場で「勇敢だった」という話が多くある。それは、厳しい民族差別からの解放を願ってのものであり、出征は「劣等民族視」されていたのを見返すチャンスととらえた者も多かった。アイヌ民族の女性もまたそうであった。



東本願寺北海道開拓錦絵 「本府御酒被下之図」

＜大谷大学 蔵＞

「北海道巡教之図」「現如上人北海道御開拓錦絵」ともいわれ、明治期の東本願寺教団による北海道開拓・開教を描いたもの。原版は1871(明治)年東京の「甘泉堂」によって製作された。その後様々な形で再版されているが、真宗大谷派は1929(昭和4)に「東本願寺版」として復刻を行っている。そこにはアイヌ民族に対して土下座や平伏させる等の姿が描かれ、詞書にも「土人ども」等の差別的な言葉がある。



ゆうきしょうじ

結城庄司氏の闘い <解放新聞社 提供>

1983(昭和58)年45歳で逝った、アイヌ民族復権運動のリーダー結城庄司氏は、「アイヌ民族の復権とは、民族としてのあらゆる誇りを回復するのが解放の道であって、アイヌの自覚を捨て去ることではない」との強い姿勢で運動の先頭に立ち、アイヌ解放同盟、札幌アイヌ文化協会などを設立。アシリチェップ・ノミの復活や、ノッカマップのイチャルバなどを始めた。それらの運動は様々な形で現在まで引き継がれてきている。写真は1980(昭和55)年9月、名古屋で開催された部落解放研究第14回全国集会での講演。



アイヌ新法制定要求 <北海道ウタリ協会 提供>

1899(明治32)年に制定された「北海道旧土人保護法」は、1997(平成9)年アイヌ民族を中心とした粘り強い運動により廃止されたが、同時に求められていた「日本に固有の文化をもったアイヌ民族が存在することを認め、日本国憲法のもとに民族の誇りが尊重され、民族の権利が保障されること」を基盤にした、「アイヌ民族に関する法律(アイヌ新法)」は、文化面も含めた民族の権利回復と経済的自立を目指した、抜本的かつ総合的な民族法というべきものであったが、結果として制定されたのは、いわゆる「アイヌ文化振興法」というものであった。この法律の内容は文化面だけに限定されたものであり、先住性などには触れられていない。



のむらぎいち

国連で演説する北海道ウタリ協会野村義一理事長

<北海道新聞社 提供>

1987(昭和62)年ジュネーブで開かれた国連先住民会議に、北海道ウタリ協会は「日本の単一民族国家論の否定にかかる直接要請行動のスタートとして」はじめて参加し、アイヌ民族の存在と現状を訴え、出席者に感銘を与えた。その後今日まで、国際会議や交流の場で、幾人もの人たちが、様々な視点から、アイヌ民族の誇りと、先住民族としての権利の保障などを訴え続けてきた。また、日本においても先住民族を招いた会議が開かれるなど、様々な形で国際社会の中で、この問題への取り組みがなされてきている。これらは2008(平成20)年までアイヌ民族を先住民族と認めなかった日本政府に対しても大きな問題提起となった。

発刊にあたつて

わが宗門は、「同朋社会の顕現」という課題を担い続けていくことを、宗門に課せられた歴史的社会的使命として受け止め、一九六二（昭和三七）年以来真宗同朋会運動を展開し、今日まで歩を進めてまいりました。

その歩みの中で不可欠でありましたことが、自らの歴史を「同朋社会の顕現」という課題に照らすという営みであります。いわゆる「教団近現代史の検証」と呼んでおりますところの作業であります。

この作業は、一九九五（平成七）年の戦後五〇年という節目の年を契機に本格化してまいりましたが、その柱の一つが、差別問題、非戦平和の問題など、時代社会から問われてくるさまざまな課題に対して、宗祖親鸞の教えを旨とする教団として、自らの関わりの歴史を問い、そこから見えてくるものを現在の課題として確かめ、教団内外に表明していくという取り組みでありました。

これらは、宗門の「非違の歴史」を現在の視点でただ断罪するものではなく、私たち自身の、すなわち人間の闇を見つめる大きな機縁としてとらえ、その歴史の中で生きてきた人たちの悲しみを自らの悲しみとして見出し、共に念仏者として生きるということの力としていく営みであります。

しかし、その取り組みは、決して私たちが内発的に起こしうるものではありません。差別してやまない、また差別していることにさえ気づかない私たちを、この課題の前に向き合やすものは、私たちの非違なるあり方によって、人間として生きるということを奪われてきた人たちの、私たちに対する問いかけの声に他なりません。

真宗大谷派における解放運動とは、その声と、そこに込められた深い願いに向き合うところからはじまり、

同朋社会の顕現への促しとして、その声と願いを受けとめていく、というところに帰結する運動といえましよう。

このたびの、真宗大谷派とアイヌ民族との関わりをひも解き、それを宗門の課題として共有すべく資料集を発刊するという取り組みも、まさしくその質の中にあるものであります。

あるアイヌ民族の一人が、真宗本廟・研修道場の壇上で訴えられました。「私たちはあなた方にビルを背負って、北海道から出て行け、と言っているのではない。共生の世界と一緒に実現させていきたいのだ。東本願寺は、明治政府の同化政策と一緒にあって、北海道に一番乗りしたのであったら、今度は、北海道が、本当に人と人が尊重しあって生きられる人間の大地。アイヌ・モシリとして回復されていくことの先頭に立ってもらいたい。私たちは皆さんと共に、アイヌ・ネノ・アン・アイヌ。人間らしくある人間、として生きていきたいのだ」と。私たちはこの願いをしっかりと受け止めていきたいと思えます。

この資料集の発刊を契機として、北海道開拓に関わる、この国の歴史、宗門の歴史、そして、その中で生きた個々の人たちの歴史を丁寧に汲み取り見つけ、アイヌ民族復権への願いに、私たちの宗門のあるべき姿を学んでまいりたいと願っております。

真宗大谷派宗務総長 熊谷宗恵

発刊の経緯と願い

本資料集発刊の契機は、一九九四（平成六）年八月一八日にもたれた、アイヌ解放同盟ならびに北海道ウタリ協会札幌支部と北海道教区、同和推進本部（当時）との話し合いの席で、これからの大谷派におけるアイヌ民族復権問題への取り組みのひとつとして、学習冊子の発行の必要性が話題にあがったことにさかかります。

その場合は、本資料集にも全一九枚を掲載している、『東本願寺北海道開拓錦絵』に対するアイヌ民族からの問題提起を受けての話し合いの場でありましたが、同日付当本部名での受け止めに対し、今後の取り組みに対する具体性が乏しいという指摘がなされ、話し合いの中で出てきたのが学習冊子の発行でありました。その後、北海道教区と協議を重ねる中で、「本部と教区同和協議会との連携のもとでアイヌ民族差別問題を、大谷派に属するものとして基本的に学んでいける学習冊子を作成する」ことが確認されております。

しかし、私どもの力不足により、その後数年の間、取り組みの一步を踏み出すことができませんでした。そしてようやく二〇〇〇（平成一二）年に、本山において開催した人権週間ギャラリー展に、北海道教区同和協議会が協力いただいたことが二度目の機縁となり、あらためて、アイヌ民族の方々から大谷派教団にかけられた願いを具体化すべく、資料集発行の話が、教区同和協議会と当本部との話し合いの俎上に上がることとなりました。そのことを受けて、翌々年北海道教区社会教化部門と合同で編集委員会をつくり、資料集作成に向けての取り組みがスタートいたしました。

その時にもっとも留意したことは、資料集作成はあくまで北海道教区との共同作業で行なうということでありました。そしてできるだけ北海道に在る人の視点を大事にしながら、時間がかかっても、丁寧な学習

と作業を積み重ね、課題共有をはかりながら資料集を編んでいくということが確認されました。また靖国問題や社会問題に学ぶ視点も本資料集の編集には不可欠であるとして、社会教化部門全体から編集委員の選出を得ることとなりました。それは結果的にお互いの学習を深める大きな効果をもたらし、解説文の視野を広げることになったと感じております。

その最初の編集会議において確認した編集の基本方針は、①アイヌ民族の方々が言われる「和人は北海道から出て行けというのではない。本当に共生を求める存在となってほしいのだ」という願いに添えていくと言うことをベースにする。②侵略か非侵略かという判別をするのではなく、「民衆史」という視点で資料集を編んでいく。民衆史という視点は、人と人との出会いの歴史という視点であり、出会いが妨げられてきた歴史という視点である。③真宗門徒としてアイヌ民族差別問題に学ぶとはどういうことかということを常に意識しながら編集する。という三点でありました。

その基本を極力はずさずに、解説と資料の選択を行なってきたつもりですが、特に①について意識したことは、同化政策の被害にスポットを当てるといふより、アイヌ民族の方々がそのこととどう向き合い、闘い、そして何を願ってこられたのかというところに焦点をあてることでした。

②については、あくまでも歴史を見るとは人間を見ることがある、ということへのこだわりです。そのことを感じていただく手がかりとして、当初から教団のアイヌ民族差別問題への取り組みに関わっていた大谷大学の泉恵機さんが記された、「歴史」は「資料」ではない。古人の、即ち僕らに血のつながった先輩たちの、鼓動や息吹を、その喜びと悲しみをその紙背に見出し、見出すことによって見出す者の鼓動とそれが一つになるとき、「歴史に出遭う」とそれをなづけるのである。」（『身同』七号より）という、私たちが編集作業をする上で意識してきた言葉を、あらためてここで再確認しておきたいと思います。

そして最後に③についてであります。結果的に北海道開拓の歴史を、先行研究に学び直したという域を

大きく超えることはできなかったのかもしれませんが。しかし、大切なことは、その史実をどう見ていくのかという現在の営みであります。その時に、私たちが意識し続けたのが、自ら大谷派門徒になられたあるアイヌの方が語られた、「自分は、浄土真宗に出会うことによって、何の気後れもなく堂々とアイヌ民族の文化を大切にし、伝統行事を行っていきえるようになった」という言葉です。

浄土真宗に生きるものとしての私たち一人ひとりのあり方が、アイヌ民族問題から問われ、またその問いに對して、浄土真宗に生きるということに込めていく。その筋道を示唆してくださる言葉であると受け止めます。この資料集において、アイヌ民族と出会った大谷派僧侶・山縣良温の事跡をかなりの紙幅を費やして収録したことは、その取り組みの方向を強く意識してのことです。

ただ、掲載資料の中には、差別的表現が含まれているという指摘が、既になされているものもあります。しかし、資料集という性格上原文のまま掲載いたしました。本資料集全般にわたって、項目ごとに付けられている解説文と資料をあわせてお読みいただく形で、活用されることを切に願います。

以上、発刊の経緯と、編集において大切にしてきた視点を述べさせていただきました。

この資料集発行の年、二〇〇八（平成二〇）年六月、国会においては「アイヌ民族を先住民族とすること求める決議」が可決され、それを受けて、政府からもアイヌ民族を「先住民族」とする認識が示されました。アイヌ民族復権運動の歴史においても画期的な出来事であると受け止めます。

この資料集が、「共生への道」を真宗門徒として歩まんとするお一人おひとりにとっての、ささやかでも学びの素材になることを願ってやみません。

解放運動推進本部

編集にあたって

第一章

近代日本の北海道開拓、大谷派の開教、アイヌ民族差別問題を考えるうえで、まず前段階として明治以前の、異域としての蝦夷地ということをもまず概説した。本州とは事情が異なる商場知行制、場所請負制など基本的な用語・事柄をおさえた。和人とアイヌ民族の立場の変化、交易の相手から支配・被支配へ、非同化から同化へと変質していく過程を、二度のアイヌの蜂起、蝦夷三官寺の存在などを通して考えたい。

そして明治維新を契機として、日本が近代国家をめざして施した対アイヌ民族政策をとりあげた。いわゆる同化政策に対し、差別された歴史ではなく差別と闘ってきた歴史としてとらえるという視点が重要であり、さらに現代もなお続く差別からの解放ということを学びたい。

第二章

日本国家の歩みと軌を一にして、大谷派宗門が具体的にどのような開教に取り組んできたかを、内部資料を基に歴史事情を述べた。旧幕府や新政府との関わり、北海道開拓開教に進んでいく過程を読み取っていたきたい。

宗門の開教の要点は、新道切開・移民奨励・教化普及であり、その具体例として、本願寺道路を取り上げた。

第三章

大谷派におけるアイヌ民族差別問題についての今後の課題を提起した。まずアイヌ民族差別問題を取り上げることになる経緯を振り返り、北海道開教ひいては宗門の近代史を見直す視点を今一度問い直す。何故開

教の歴史が「差別」の問題となるのか、その原点を再確認したい。

北海道教区の取り組みにもふれ、開教とは何かを再検証することを提起した。今後も継続する課題である。今回錦絵を詞書の解説と共に一括提示した。「見たくもないもの」というアイヌの人の指摘もあるが、あえて負の遺産・非違の歴史を直視することで課題が明らかになることもある。当然取り扱いには慎重さが求められる。

さらに開教に従事した僧侶の具体例として、山縣良温を取り上げた。従来見落とされがちであった、現地の具体的な教化活動の様子がうかがえる。

聞き取り

聞き取りというものは、生の歴史の証言として貴重なものである。アイヌ民族のケース二例と大谷派僧侶のケース二例を採録し活字化した。

年表

北海道・アイヌ民族に関する事項、大谷派・宗教関連の事項、差別問題を含む社会一般の事項という三段組で列記した。

北海道東本願寺図書館岩田文庫所蔵資料について

今回北海道東本願寺図書館岩田文庫（以降「岩田文庫」と表記）所蔵の資料を用いたが、一般にあまり知られていないので紹介する。

▽『御休泊之記』（「ビー本」）

現如上人が京都を出発し札幌まで来て、浅草御坊に戻るまでの道中の記録である。通過した地名、休憩や

宿泊の寺院名や個人名等を記録したもの。表紙には

「従明治第三庚午二月十日西京発／至同年九月十八日東京着／御休泊之記／道中方控」

とあり、裏表紙には

「御休泊之記 一冊／原本は半紙墨書き百拾七枚／大谷派本願寺の所蔵である／岩田文庫建築落成を祝／し写本一部を特に本山より／岩田文庫に寄贈された／昭和四拾貳年六月拾八日／岩田文庫運営委員長 多屋弘」

と由来が記されている。多屋氏が、一九四九（昭和二四）年に東本願寺北海道開教史を書いた時には既に引用しておられるので、存在はかつて知られていたであろう。しかし現在原本は所在不明である。

▽『東本願寺記録―朝廷関係』（コピー本）

書名は当初から付けられたものではなく、多屋氏が便宜上名付けたものと推測される。一九六七（昭和四二）年の『北海真宗』では「維新前後古記録」と紹介されている。裏表紙に

「原本に枳北文庫の蔵書印あり／東本願寺の旧蔵なりし事を／知る 夕張本源寺住職西部利恵／が京都古本屋にて入手せし由／同君より借受けこの写本を作る／北海道開教百年史編集資／料として／昭和四十四年八月／委員長 多屋弘」

とある。一八六二（文久二）年六月から一八七三（明治六）年一二月に至るまでの、本願寺と、朝廷・新政府との文書のやりとりの記録である。本願寺の名の入った野紙に書かれてあることから信頼出来る資料と判断出来るが、今回編集にあたって原本の確認は出来なかった。

▽『北海道開教日誌』（コピー本）

現如上人渡道に同行し宿割りを担当した、京都六条の樋口津右衛門の手記である。表題は便宜上付けられたものであろう。高島章氏が一九八八（昭和六三）年研究発表された時点でも「仮題」としており、多屋氏の著作にも引用されていない。内容は一八六八（慶応四）年から始まり、一八六九（明治二）年八月の現如上人による関東巡化の記録、一八七〇（明治三）年の渡道については、地名人名のみならず簡単なメモ書きも添え、「錦絵」の各場面に関する記述も見られる。見真大師号宣下の出来事も記載され、一八七七（明治一〇）年に至るまで書き継がれている。種々の筆跡が混じり、内容が前後する部分もある。「北海道開教日誌」という名称は誰が名付けたか不明であり、適切ではないように思われる。「樋口津右衛門手記」というべきか。これも原本の確認は出来ない。

アイヌ民族差別に関する学習資料集編集委員会

目次

発刊にあたって……………真宗大谷派宗務総長 熊谷宗恵

発刊の経緯と願い……………解放運動推進本部

編集にあたって……………アイヌ民族差別に関する学習資料集編集委員会

第一章 アイヌ民族復権の願いに照らされて

第1節 「異域」としての蝦夷地……………2

(1) 江戸期の対蝦夷地政策……………2

〔資料1〕「三国通覧図説」林子平……………5

〔資料2〕徳川家康黒印状……………5

〔資料3〕増毛場所請負証文……………5

(2) アイヌ民族の蜂起……………7

〔資料4〕「蝦夷談筆記」松宮親山……………10

〔資料5〕「寛政蝦夷乱取調日記」新井田孫三郎……………11

(3) 蝦夷三官寺の建立……………14

〔資料6〕「休明光記付録一件物」羽太正養……………16

〔資料7〕「掟」……………16

〔補記1〕松浦武四郎……………16

第2節 近代国家の形成とアイヌ民族……………17

(1) 近代国家の形成……………17

〔資料8〕樺太千島交換条約……………20

(2) アイヌ民族に対する同化政策……………21

〔資料9〕	旧土人名称一定	25
〔資料10〕	旧土人賜物並禁目と旧土人教化諭達	25
〔資料11〕	獸獵毒矢禁制	25
〔資料12〕	北海道地券発行条例	26
〔資料13〕	北海道旧土人保護法	26
〔資料14〕	旧土人児童教育規程	27
〔資料15〕	弁開鳳次郎の陳情書	27
〔資料16〕	勇敢なる旧土人	28
〔資料17〕	北海道庁による「北海道旧土人保護法」の評価	29
第3節 たたかいの歴史、そして現在		
(1) たたかいの歴史		
〔資料18〕	「アイヌ神謡集」序 知里幸恵	30
〔資料19〕	「コタン」遠星北斗	33
〔資料20〕	「解平運動」森竹竹市	34
〔資料21〕	「土人保護施設改正に就いて」貝澤正	35
〔資料22〕	「アイヌ大会に就て」貝澤藤蔵	36
(2) いまを生きるアイヌ民族		
〔資料23〕	「皇民化と対決する」結城庄司	37
〔資料24〕	「アイヌ民族に関する法律(案)」	40
〔資料25〕	「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」	41
〔資料26〕	「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」	45
第二章 明治政府と東本願寺		
第1節 北海道開拓・開教の時代背景		
(1) 近代以前の「北海道」と東本願寺		50

(2) 明治維新と東本願寺

- 〔資料27〕 王政復古の大号令 51
〔資料28〕 朝廷への誓書 55
〔資料29〕 神仏分離令 55
〔資料30〕 朝廷に廃仏の意がない旨の御沙汰書 55

第2節 明治初期の開拓・開教の実際

(1) 開拓・開教のはじまり

- 〔資料31〕 蝦夷地開拓御下問書 56
〔資料32〕 開拓出願書 57
〔資料33〕 開拓出願の経緯 57
〔資料34〕 御沙汰書 開拓使へ 58
〔資料35〕 指令 58
〔資料36〕 御沙汰書 本願寺へ 58
〔資料37〕 開拓史からの鑑札 59
〔資料38〕 門末への廻状 59

(2) 願書における三つの柱

- 〔資料39〕 道場取建箇所願 60
〔資料40〕 新道切開箇所届 63
〔資料41〕 新道切開入用書上 64
〔資料42〕 新道切開開拓費 64
〔資料43〕 蝦夷地門末取締りと移住に関する願書 65
〔資料44〕 移住者への便宜書 65
〔資料45〕 本願寺開墾の為門徒移住の府藩県への布告 65
〔資料46〕 酔歌 66
〔資料47〕 本願寺百姓について 66
〔補記2〕 真宗大谷派の千島開教 66

第三章 アイヌ民族と大谷派教団

第1節 真宗大谷派におけるアイヌ民族差別問題への取り組み……………70

(1) 解放運動推進本部における取り組みとその意味……………70

(2) 北海道教区における取り組みとその意味……………73

〔資料48〕「大師堂」爆破事件 決行声明……………77

〔資料49〕真宗教学研究所声明……………78

〔資料50〕単一民族国家発言に対する声明……………80

① 中曽根首相発言に対する真宗大谷派の見解と要望……………

② 平沼赳夫・鈴木宗男両議員の「単一民族発言」問題に対する受けとめ……………

〔資料51〕中曽根発言への抗議 北海道教区……………83

第2節 「東本願寺北海道開拓錦絵」その課題の共有のために……………84

〔資料52〕「東本願寺北海道開拓錦絵」……………89

〔資料53〕「東本願寺北海道開拓錦絵」復刻趣意書……………96

第3節 山縣良温の事跡に学ぶ……………97

〔資料54〕「アイヌ」の宗教概観……………103

〔資料55〕「アイヌの村」……………105

〔資料56〕北東日報記事……………106

〔資料57〕「土人教育調査」……………108

聞き取り

① 小川隆吉さん……………112

② 結城幸司さん……………115

③ 山名智月さん……………118

④ 相河恵昭さん……………121

〈凡例〉

- ・漢字は資料、解説文ともに新字体に統一した（例 佛Ⅱ仏）。
- ・資料中でのかな遣いはそのままとした（例 ーといへる）。
- ・助詞として使われる漢字や合字は一部の例外を除き平がなに直した（例 者Ⅱは、江Ⅱえ、茂Ⅱも）。
- ・解説文中における数字は漢数字とし、年号については西暦としカッコ内に元号を加えた。
- ・敬称は一部を除き省略した。また諸般の事情を考慮し、個人名を表記しなかった箇所もある。
- ・地名人名については厳密な区分はせず、現在の表記に従った（例 箱館と函館、僧侶の姓など）。
- ・資料の中で、差別用語や差別的表現が使われている箇所があるが、資料集という性格上原文の歴史性を考慮してそのままとした。

第一章 アイヌ民族復権の願いに照らされて

第1節 「異域」としての蝦夷地

(1) 江戸期の対蝦夷地政策

蝦夷地

江戸時代、幕藩制国家にとって体制外の地として、北方に「蝦夷地」と呼ばれる「異域」が存在し、和人とは異なる、独自の文化を持つアイヌ民族が生活していることは知られていた。その認識は、最高の政治権力者の官職名が徳川最後の將軍慶喜に到るまで、中央の政權に従わぬ民、すなわち夷を征伐するという役目である「征夷大將軍」であったことにも現れている。古く平安の昔から、朝廷を背景にした政治的権力である大和政權は東方を征服することが課題であった。古代のエミシ、蝦夷と呼ばれた人達と現在のアイヌ民族が系譜的に繋がるかどうかは定かではないが、東北の道の奥（みちのく、陸奥）に、政權に従わぬ民がおり、武力による征圧を繰り返しつつ大和政權の領土を拡張していったことはずっと人々の歴史の記憶に刻まれていた。

その伝承を文字で記したのが一七八五（天明五）年に脱稿された林子平の『三國通覧図説』【資料1】である。ロシアの脅威を説き、北方開拓の必要を勧めている。その中に大和政權と蝦夷地の関わりが記されている。この三國とは、朝鮮と琉球そして蝦夷のことである。子平自身が日本の三つの隣国と記しているように、あくまでも日本領土ではなく他国であった。まず、『統日本紀』（七三七（天平九）年）によれば、七二二（養老六）年頃には存在した多賀城を日本と蝦夷地の境界とした。次いで延暦の頃（八〇〇年頃）坂上田村麻呂が攻め、津軽海峡以南までを日本とした。その後室町幕府の時代、一四五六一五七（康正二）長祿一）年コシャマインの蜂起があり、それを平定した武田信広（蛎崎氏を継ぐ、後の松前氏の祖）が松前の地に本拠を構えたのである。

松前藩の成立

やがて豊臣政權下、信広の子孫蛎崎慶広が蝦夷島の支配を認められた。さらに徳川幕府の時代には姓を松前と改め、一六〇四（慶長九）年、將軍家康より黒印状【資料2】を授けられ、蝦夷地の交易の独占権が認められた。ここに松前藩が成立するのである。

松前藩は、東は亀田から西は熊石までを和人地とし、それより奥は蝦夷地とした。本州の各藩とは事情が異なっており、米が穫れないので無高ということになり、もっぱらアイヌ民族との交易が主な収入であった。松前藩成立以前より、アイヌの人々

が蝦夷地の産物を和人の地に出向いて交易をする形態は出来上がっていた。コシャマインの蜂起以後は蛎崎氏の本拠地松前が主要な交易地となっていた。一五五〇（天文一九）年、瀬棚と知内のアイヌ民族の首長と蛎崎氏の三者による講和により「夷狄の商船往還の法度」^{（イリキノカネフナノホド）}、和人地が形成されアイヌ民族がやって来て物々交換をする「城下交易制」^{（シロノカネフナノホド）}ができあがった。

商場知行制

松前藩成立初期は、城下交易制であった。やがて蝦夷地の海岸部要所に「商場」^{（カマクラ）}を設け、領地（俸禄）の代わりとして交易権を家臣に分け与えた。そこに原則として夏に船一艘で出向き、本州の商人から入手した米・酒・鉄製品・漆器などを、アイヌ民族の持ってくる鹿やラッコなどの獣皮、干鮭などと交換したのである。これを夏商という。それらを本州商人に売却して得た収入を以って知行とした。これが「商場知行制」であって、この体制は寛永期（一六二四―四四年）頃から、幕府が蝦夷地を直轄し、再び松前藩に戻すまで続く。この体制はアイヌ民族からみれば、交易相手が商場の支配者の松前藩の家臣に限定されることを意味する。かつて、カラフトやアムール川、津軽地方や南部地方にまで出向いていたアイヌの自由な交易活動は完全に禁止され、競争相手もなく、不利な交換レート^{（エクスチェンジ・レート）}を強要されることも多くなった。例えば干鮭百本^{（ヒキイ）}米二斗という交換基準が、米七升とされたりした。さらに松前藩は、当初黒印状にもあるように「蝦夷は蝦夷次第」としてアイヌ民族の自由な往来と交易を認めていたのに、アイヌ民族の行動範囲を蝦夷地内に限定し、松前城下への自由往来を禁止するなどしてアイヌ民族の「蝦夷地封じ込め政策」をとった。これ以後、アイヌ民族の生活は大きな圧迫を受けることとなる。

この頃より、砂金掘り・浜辺での漁・樵^{（シロ）}などの労働力として、松前・津軽・南部・秋田などから和人の「入稼ぎ者」が多く蝦夷地各地へ流入を開始。砂金採掘の為に流域を荒らしたり、森林を破壊したり、鮭を多量に捕獲することに因ってアイヌ民族の漁場への遡上数が激減するなどの環境破壊が繰り返され、それに対するアイヌ民族の不満が爆発したのが一六六九（寛文九）年のシャクシャインの蜂起である。

商場知行制下の場所請負制

やがて享保期（一七一六―三五年）頃から、藩主や家臣達は、和人商人に商場の経営・アイヌ民族との交易を任せて、運上金（税金）のみ受け取るようになった。請け負った商人達は、単に交易の場であった地域でより多くの産物を得るため漁業を営営するようになる。それを場所と呼び、いわば点から面へと広がったのである。これを「場所請負制」という。

〔資料3〕は増毛場所の証文である。ただしその場所と場所の境界について争いが起きた場合は「夷地ノ事ハ夷次第」（「福山秘府」という原則が貫かれた。なお、厳密に言えば商場知行制とは藩主と家臣との関係の事柄であり、場所請負制は知行主と請負商人との関係であって、「商場知行制が場所請負制に変わった」と理解するのは正確ではない。

実態としては、この時代の他の地域の藩もそうであったように、参勤交代やその他の財政上の理由から運営が困難になっ

た松前藩やその家臣が、たまっていく負債をなんとかする為に、債権者である商人に交易権を一任したものである。商人達のより過酷な利潤追求の結果、収奪・酷使は激化し、アイヌとの交易だけでは足りず、アイヌを労働力として徴用・酷使し、直接産物を生産する行為がはじまる。その過酷さは松浦武四郎『補記』の『近世蝦夷人物誌』などによりうかがい知ることが出来る。このアイヌ民族に対する奴隷労働と搾取によって生産されたコンブなどの産物は、北陸や関東、薩摩・琉球、あるいは敦賀を経由して上方へ流通した。蝦夷地の産物を上方などへ輸送する「北前船」が、この頃より盛んになるのである。魚肥（ニシンなどの油を絞った粕で、植物を丈夫にする効果の高い肥料）は金肥と呼ばれ、近畿市場を中心に大量に流通し、綿花・菜種・藍などの商品農産物の生産性を大幅に向上させ、上方や江戸に花開いた大衆の消費文化を支える基盤となった。「蝦夷地」と近世日本の台所事情は密接に関係している。

幕府による直轄

一七八九（寛政一）年に、道東で起きたクナシリ・メナシの蜂起の衝撃と、迫り来るロシアの脅威に対抗するため、幕府は蝦夷地を直轄地（上知）とした。一七九九（寛政一）年、まず東蝦夷地を仮上知した。引き続き一八〇二（享和二）年には永上知、さらに一八〇七（文化四）年西蝦夷地も直轄地とし（第一次）、松前藩を陸奥梁川（やまがわ）に転封した。その後一八二一（文政四）年に松前藩に戻すが、再び一八五五（安政二）年に幕府直轄地とした（第二次）。行政的には一八〇二（享和二）年二月に蝦夷地奉行を設置（のち箱館奉行、松前奉行と変わる）。二度目の直轄時期にはまた箱館奉行を置いた。尚、幕府直轄ではあるが、東北諸藩を動員して警備を命じている。

蝦夷地勤番体制下の場所請負制

いったん松前藩が復領した時、藩は商場知行制を復活させないで、家臣には扶持米と金を支給する体制とした。これらの経過の中で、各場所には役人・番人が置かれ、従来の場所請負制は変質していく。つまり番人や支配人は交易の仕事から、幕府や藩の役人としての性格を帯びることになる。これを蝦夷地勤番体制下の場所請負制という。場所請負制は一八六九（明治二）年九月に新政府開拓使によって廃止されるまで続くのである。

対蝦夷地政策

幕府や松前藩の蝦夷地経営の変遷を概観すれば、和人とアイヌ民族の関係が、はじめは対等な交易相手であったものが、雇い主と賃労働者となり、やがて支配者と強制労働者の関係へと変質した。異域から事実上の内国植民地化へと方針転換していったのであった。



道新りんご新聞

@user-vq2tk7qg3q

チャンネル登録者数 154人

登録済み ✓

道新りんご新聞youtube動画 で検索して
下記□のyoutube動画をご覧ください。



平岸用水①

692 回視聴・5 年前



本願寺道路②

405 回視聴・5 年前



本願寺道路①

706 回視聴・5 年前



アイスキャンドル@南平岸 onちゃんといっ
しょに心もボカボカ

真宗大谷派 専修寺 札幌市手稲区にあるお寺 - 札幌市手稲区で ...

<https://wp.sensyu.jp/> ▼

このHP中段の↓下記youtubeをご覧ください



同朋大学仏教文化研究所2020年度後期史料展
「東本願寺現如と北海道
—「本願寺道路」着工150年—」

特別編
北海道本願寺道路
史跡探訪

- 2020年＝北海道「本願寺道路」着工150年。
- 東本願寺と明治政府の北海道「開拓」
- 明治3(1870)年、東本願寺現如の北海道巡教。「本願寺道路」の整備を指示。
- 明治4(1871)年、「本願寺道路」整備完成。

① 東本願寺 (札幌市手稲区) ② 本願寺 (札幌市手稲区) ③ 中川橋 (札幌市手稲区) ④ 南平岸 (札幌市手稲区)

⑤ 東本願寺 (札幌市手稲区) ⑥ 本願寺 (札幌市手稲区) ⑦ 中川橋 (札幌市手稲区) ⑧ 南平岸 (札幌市手稲区)

特別編「北海道本願寺道路史跡探訪」 同朋大学 仏教文化研究所 2020年度後期史料展示